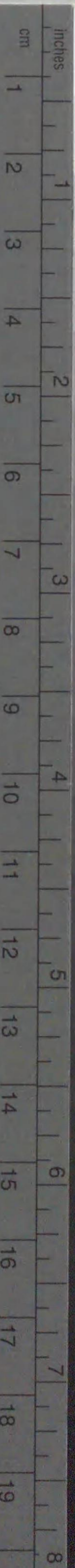


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

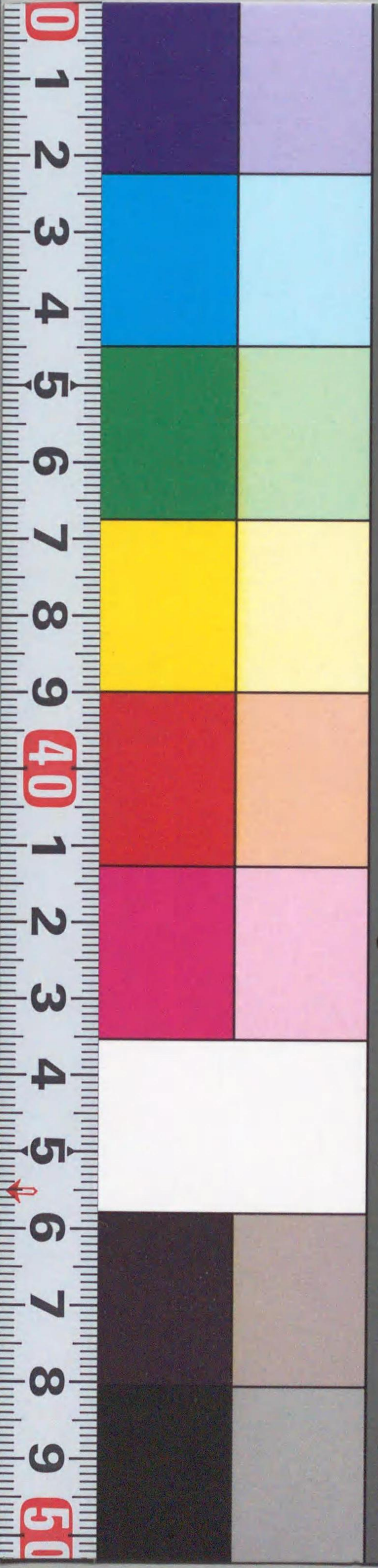
A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

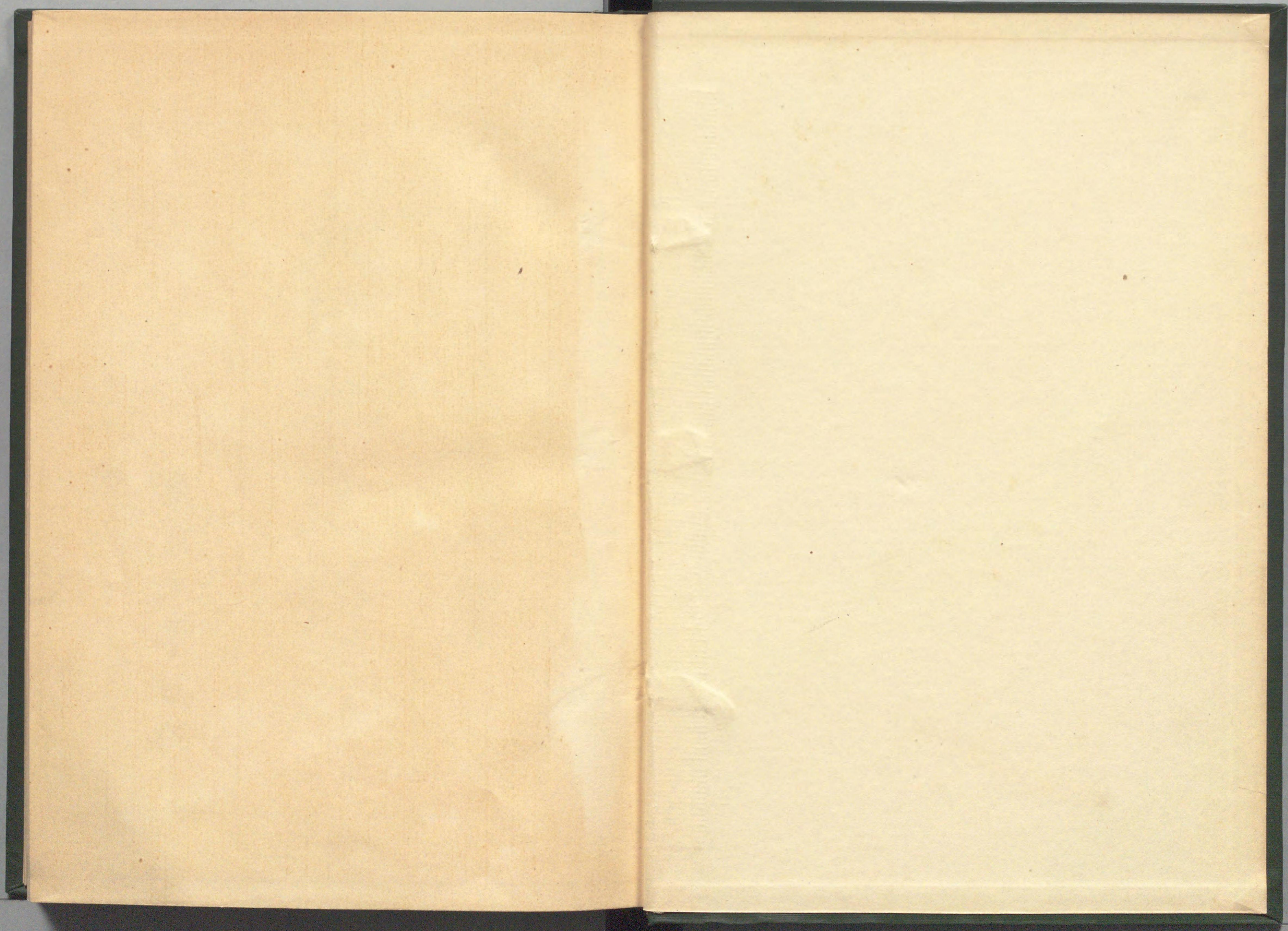
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



GB22  
7  
00280334







東京大學史料編纂所編纂

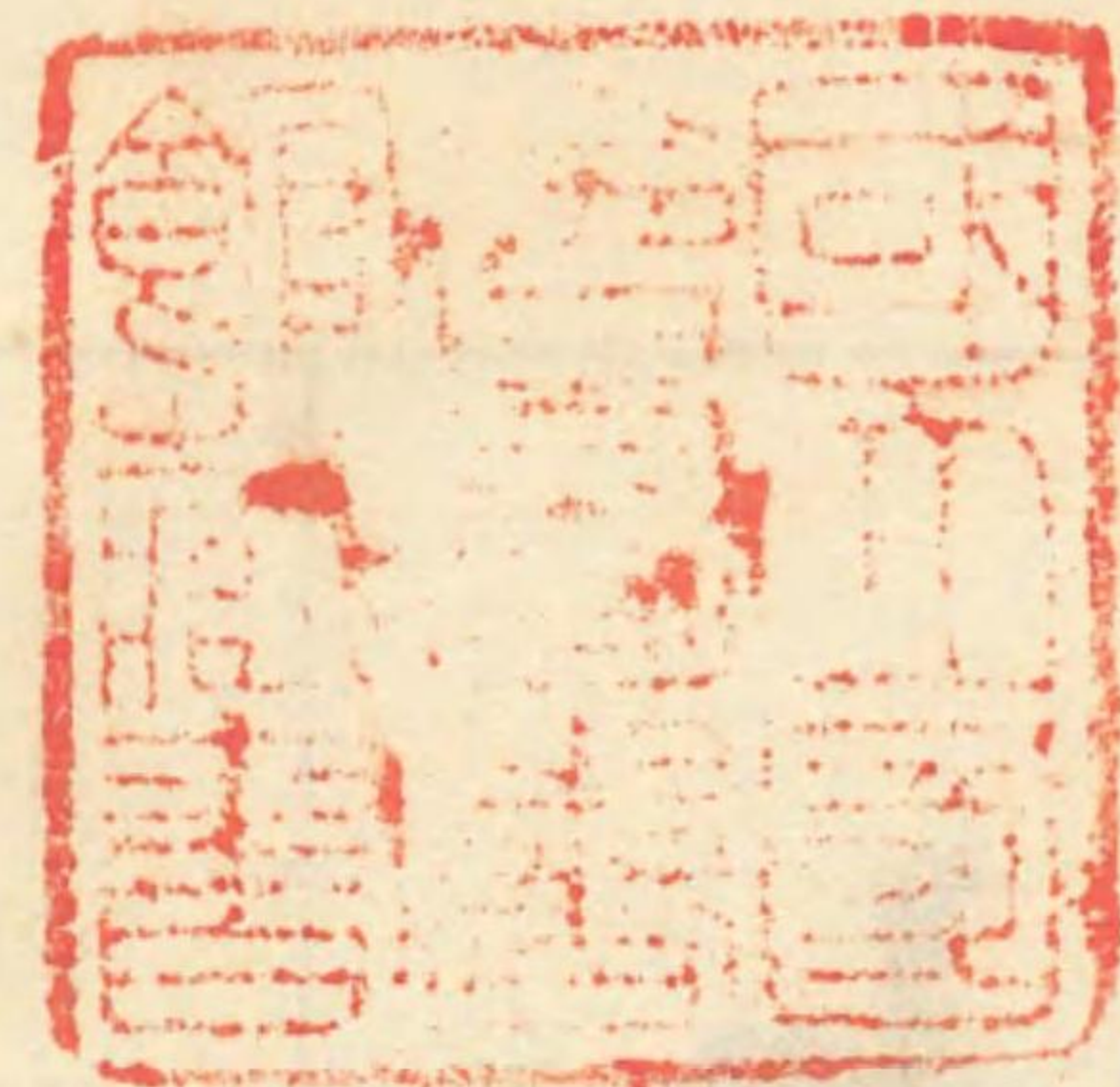
大日本史料

第十一編  
之九

東京大學藏版



GB22  
7



贈  
東京大學史料編纂所  
坂本太郎

280334

# 大日本史料

## 第十一編之九目次

正親町天皇

天正十二年

九月

- 八日 泉涌寺ニ勅シテ、諸國ニ募緣シ、寶塔ヲ造營セシメ給フ、……………一  
 羽柴秀吉、前田利家、利勝父子ニ尾張ノ形勢ヲ報ジ、近ク惟住長秀ノ歸陣ス  
 ベキヲ告ゲ、佐々成政ニ對シ、輕卒ニ兵ヲ動カスコトヲ誠シム、……………一
- 戸次道雪、連、高橋紹運、種、筑後建仁寺ニ禁制ヲ下ス、……………三
- 九日 羽柴秀吉ノ老臣杉原家次、丹波福知山ニ歿ス、……………四  
 河内石川郡藏入奉行伊藤秀盛、同國叡福寺太子廟ニ燈明料ヲ寄進ス、……………一三  
 毛利輝元、羽柴秀吉トノ和議ニ據リ、伊賀家久ヲシテ、備中加茂ヲ退カシム、  
 ○輝元、周防、長門ニ於テ、三百石ノ地ヲ與フ、……………一五
- 十日 織田信雄、長田善二郎、同又五郎、長崎彌左衛門等ニ替知ヲ與フ、○津田清次

目次 天正十二年九月



ニモ之ヲ與フ、……………二〇

伊勢國司代北畠朝親、沈松齋本願寺光佐顯如ニ物ヲ贈ル、……………二一

若狹小濱ノ廻船業者木下和泉入道、羽柴秀吉ニ物ヲ贈ル、○秀吉、之ヲ謝シ、  
近ク歸陣スベキコトヲ告グ、……………二一

豊後賀來ノ賀來松壽、父鎮光ノ所領ヲ相續ス、○大友義統、松壽ヲシテ、之ヲ  
安堵セシム、……………二二

秋月種實、島津義久ト龍造寺政家トノ間ニ周旋シ、和ヲ講ジテ成ラズ、○義  
久、兵ヲ肥後隈本熊本ニ集ム、○島津忠平、義弘伊集院忠棟等、隈本ニ著ス、○軍  
ヲ同國吉松ニ移ス、(上井覺兼日記)……………二三

十一日 近江多賀社神主某、物ヲ羽柴秀吉ニ贈ル、○秀吉、之ニ答フ、……………四二

佐々成政、前田利家ノ屬城能登末森ヲ圍ム、○利家及ビ其子利勝、利長之ニ赴  
援シ、成政ノ軍ヲ破ル、○成政、兵ヲ越中ニ收ム、……………四四

長宗我部元親、其將久武親直ヲシテ、伊豫ヲ攻略セシム、○同國深田城、陷ル、……………一七六

毛利輝元、伊豫來嶋出兵ノ日次ヲ桂元親ニ報ジ、來會ヲ促ス、……………一八三

大友義統ノ將戸次道雪、鑑連高橋紹運鎮種等、蒲池鎮運恒家ヲ筑後山下ニ攻ム、○

築河、瀬高、鷹尾等ヲ火ク、○鎮運、道雪ノ陣ニ抵リテ降ル、……………一八四

大友義統、戸次道雪、鑑連高橋紹運鎮種麾下ノ將立花鎮實、十時惟直等ノ、筑後ニ  
於ケル戦功ヲ褒ス、……………一九六

十二日 羽柴秀吉、河内金剛寺ニ、沒收セル寺領還付ヲ約シテ、功ヲ勵マサシム、……………二〇二

羽柴秀長、長秀美濃西順寺ニ禁制ヲ下ス、……………二〇二

十三日 徳川家康、紀伊金剛峰寺惣分中ニ、恩賞ヲ約シテ、忠信ヲ勵マサシム、……………二〇三

十四日 佐々成政ノ屬將越中守山ノ神保氏張、能登ヲ侵サントシ、同國七尾ノ守將前  
田安勝等ト、荒山、勝山ニ戦フ、○前田利家、同國石動山ノ守將大屋勝重、青  
木善四郎ニ、末森ノ戦捷ヲ報ジ、氏張ニ對シテ、堅ク備ヘシム、……………二〇四

紀伊根來寺杉坊聖算、土佐長宗我部元親ノ弟香宗我部親泰ニ答ヘテ、尾張ノ  
形勢ヲ報ジ、之ト好ヲ通ズ、……………二一六

十五日 徳川家康、河内國見山ノ保田安政佐久間安次ノ戦功ヲ褒ス、○織田信雄モ亦之ニ  
書ヲ與ヘテ、和泉出兵ヲ促ス、……………二一七

蒲生賦秀、郷氏伊勢木造ノ木造具政ノ兵ト、同國菅瀬ニ戦フ、……………二二一

十六日 賀茂社、羽柴秀吉ニ卷數并ニ青銅三百疋ヲ贈ル、○秀吉、之ニ答フ、……………二三五



十七日 羽柴秀吉、軍ヲ尾張ヨリ美濃ニ納メントシ、兵ヲ引カシム、○織田信雄、徳川家康モ亦清洲ニ歸ル、……………二三六

蘆名盛隆、岩代示現寺嘯月院ニ年貢十駄ノ地ヲ寄進ス、……………二三九

十八日 上杉景勝、前田利家ト呼應シ、須田滿親等ヲシテ、佐々成政ノ屬城越中境ヲ攻メシム、○滿親、景勝ノ近ク越中ニ出馬スベキコトヲ、利家ニ報ズ、……………二四〇

伊豫湯月ノ河野通直、金尊坊ヲ同國石手寺地藏院住持職ニ補ス、……………二五八

十九日 毛利輝元、舊ニ依リ、出雲一畑寺ヲシテ、本堂上葺ノ費ヲ同國秋鹿郡ニ徵セシム、……………二五八

二十日 筑前立花ノ立花統虎、立花鎮實等ニ書ヲ遺リテ、筑後在陣ヲ勞フ、……………二六一

廿一日 織田信雄、尾張熱田ノ加藤景延、同順政ニ命ジテ、牡蠣殻ヲ同國清洲ニ運バシム、……………二六二

肥後ノ合志、山鹿、三池等ノ諸氏、島津忠平義弘ニ使ヲ致シテ、降ヲ請フ、○同國隈府ノ隈部親泰降ル、……………二六三

廿二日 大和筒井定次、馬借一揆ノ首領ヲ刑戮ス、……………二七四

十月十六日、定次、馬借一揆ノ首領ヲ刑ス、……………

近江長命寺、羽柴秀吉ニ祈禱札并ニ物ヲ贈ル、○秀吉、之ヲ謝ス、……………二九四

廿三日 羽柴秀吉、姪羽柴秀次三好信吉ヲ戒飭ス、……………二九五

大神宮祭主大中臣慶忠ヲシテ、其知行ヲ安堵セシメ給フ、……………二九七

金森長近、飛驒ニ出馬セントシ、石徹白長澄ニ書ヲ遺リ、同國ノ情勢ヲ報ゼシム、……………二九九

廿四日 徳川家康ノ將本多廣孝、尾張陰葉印場郷天神社ニ禁制ヲ下ス、……………三〇〇

近江坂本ノ淺野長吉、同國西教寺ヲシテ、惟住長秀及ビ杉原家次寄進ノ寺領ヲ安堵セシム、……………三〇一

島津忠平、義弘軍ヲ肥後吉松ヨリ、同國高瀬ニ移ス、○忠平、高瀬ニ入ル、……………三〇二

廿五日 羽柴秀吉、竹田定加ニ命ジ、丹波龜山ニ赴キテ、養子次秀勝ノ病ヲ診療セシム、……………三〇五

廿六日 大乘院門跡尋憲、京都ヨリ奈良ニ歸ル、……………三〇六

筑後築川ノ龍造寺家晴、肥前高尾ノ田尻鑑種ニ隔意ナキ旨ヲ誓フ、……………三〇六

島津征久等、龍造寺政家ノ屬將白間野宗郷ヲ肥後小代ニ破ル、……………三〇七

廿七日 龍造寺政家、肥後ヲ島津義久ニ致シテ、和ヲ請フ、○大友義統ノ將戸次道雪、高橋紹運、使者ヲ島津忠平ニ遣シテ共ニ秋月、龍造寺兩氏ヲ討タンコトヲ勸



ム、○義久、政家ニ和ヲ許ス、……………三二〇

廿八日 薦野増時、米多比鎮久等、立花統虎ヲ援ケテ、筑前立花城ヲ守ル、○大友義統、之ヲ褒ス、……………三二三

大友義統、筑後古賀ノ稻員安守ノ忠功ヲ褒ス、……………三二六

廿九日 佐田鎮綱、筑後ニ於ケル戰捷ヲ賀シ、大友義統ニ物ヲ贈ル、○義統、之ニ答フ、……………三二七

是月 比叡山横川ノ良信、同所中堂再建ノ爲メ、諸國ニ勸進ス、……………三二八

豐受大神宮、同宮領伊勢安濃郡卯杖饗料御厨ヲシテ、上分ヲ徵納セシム、……………三一九

羽柴秀吉、伊勢ノ地ヲ諸將ニ頒ツ、……………三二一

羽柴秀吉、尾張光明寺ニ禁制ヲ下ス、……………三二四

美濃兼山ノ森忠政、同國愚溪寺ニ禁制ヲ下ス、……………三二四

十月

一日 大友義統、衛藤統門ノ筑後在陣ノ功ヲ褒ス、○志賀紀伊介ノ功ヲ褒ス、……………三二六

肥後筒嶽ノ小代親泰、島津義久ニ降ル、○義久ノ弟島津忠平、義弘親泰ヲシテ、本領ヲ安堵セシム、○同國隈府ノ隈部親泰、筑後邊春ノ邊春鎮信等、忠平ニ

謁ス、……………三二六

二日 美濃清水ノ稻葉一鐵、領内ノ檢地ヲ行フ、○之ヲ老臣那波直治ニ命ズ、……………三二九

八月、一鐵等、美濃某寺ヲシテ、其知行ヲ安堵セシム、

三日 大友義統ノ將戸次道雪、高橋紹運等、軍ヲ筑後高良山ニ移ス、○龍造寺政家ノ領邑草野、妙見、井上等ヲ攻撃シ、又秋月種實ノ領邑ヲ侵ス、……………三三〇

四日 讓位ノ思召アルニ依リ、羽柴秀吉、仙洞御所ヲ造營ス、○繩打アリ、……………三四五

羽柴秀吉、天正寺ヲ山城新紫野ニ廻メントシ、敷地及ビ船岡山ヲ寄進ス、……………三四八

徳川家康、尾張小牧ノ壘ヲ修ス、……………三五五

北條氏直、櫻井武兵衛ヲシテ、其父和泉守ノ名跡ヲ安堵セシム、……………三五五

五日 羽柴秀吉、京都ヲ發シテ、大坂ニ歸ル、……………三五六

常陸佐竹義重、上杉景勝ニ答へ、近況ヲ報ズ、……………三五七

惟住長秀、尾張ヨリ越前ニ歸ル、○前田利家、上杉景勝ノ老臣直江兼續ニ答へテ、長秀ノ近ク加賀ニ出馬スベキヲ報ジ、越中境城攻略ヲ賀ス、……………三五八

六日 陸奥蘆名盛隆、其臣大庭三左衛門ニ弑セラル、○盛隆ノ子龜若丸、家督ヲ繼グ、……………三五九



伊豫能島ノ村上武吉、同國忽那島ノ俊成左京進ヲシテ、所領ヲ安堵セシム、……………三七七

七日 羽柴秀吉、尾張、美濃在陣ノ諸將ヲ戒ム、……………三七八  
八日及ビ十七日、秀吉、美濃、尾張在城ノ諸將ヲ戒ム、

羽柴秀吉、若狹ノ諸寺ニ鐘ヲ徵ス、○近江ノ新庄藏人ニ命ジテ、同國長濱等ノ諸寺ノ鐘ヲ徵セシム、……………三八〇

近江佐和山ノ堀秀政、同國百濟寺本堂ヲ再建ス、……………三八一

肥前高尾ノ田尻鑑種、島津忠平義弘ニ二心ナキコトヲ示ス、……………三八二

八日 羽柴秀吉、壇榮清ヲ石清水八幡宮社務職ニ補ス、……………三八三

里村昌叱、父昌休ノ三十三回忌ニ當リ、連歌ヲ行フ、……………三八五

九日 羽柴秀吉、紀伊ニ兵ヲ出サントシ、一柳末安ニ命ジテ、大坂附近ニ著陣セシム、……………三八七  
廿七日、秀吉、和泉願泉寺ニ禁制ヲ下ス、

長宗我部元親等、讃岐松尾寺仁王堂ノ建立ニ奉加ス、……………三八九

十日 上杉景勝、舊ニ依リ、領内ノ伊勢大神宮領ニ諸役ヲ免除ス、……………三九〇

十一日 誠仁親王、和仁王、松尾社ニ詣シ、西芳寺、天龍寺、清涼寺等ヲ遊覽シ給フ、……………三九一

德川家康、尾張小牧ヲ巡視シ、松平家忠ヲシテ、同國小幡ヲ守ラシム、……………三九四

北條氏直、上野小泉ノ富岡對馬入道ニ書ヲ遣リ、番替トシテ、山中大炊助ヲ遣セルヲ告グ、……………三九四

大友義統、後藤右衛門尉ノ筑後在陣ノ功ヲ褒ス、……………三九五

肥後阿蘇ノ宇治長松丸惟光ヲ贈リテ、大友義統ニ筑後ノ戦勝ヲ賀ス、○義統、之ニ答フ、……………三九五

十二日 德川家康、甲斐波木井ノ波木井四郎左衛門ニ同國下條ノ地及ビ澁澤ノ家屋ノ諸役ヲ免ズ、……………三九八

小早川隆景、書ヲ渡邊但馬守ニ與ヘテ、筑前山鹿ノ警備ヲ嚴ニセシメ、併セテ東國、北國等ノ形勢ヲ報ズ、……………三九九

屋山三介、築瀬三河入道等、高橋紹運ノ居城筑前岩屋ヲ留守ス、○大友義統、三介ヲ褒ス、○三河入道ヲ褒ス、……………三九九

十三日 筑前高祖ノ原田了榮、笠新兵衛ニ知行ヲ加フ、……………四〇一

筑後猫尾ノ黒木實久、援ヲ島津忠平ニ求ム、○使者、肥後高瀬ニ到ル、……………四〇一

十四日 伊勢大神宮領伊勢ノ地五百石ヲ祭主藤波慶忠ニ附與シ給フ、○兩宮神主等、其還付ヲ禁裏ニ陳訴ス、……………四〇二



○羽柴秀吉、大坂城中ニ茶湯ヲ催ス、……………四〇五

信濃諏訪頼忠、平井出清右衛門ニ、同國葛木内五貫文ノ地ヲ宛行フ、……………四〇六

前田利家、佐々成政ノ屬城加賀鳥越附近ヲ火ク、……………四〇七

羽柴次勝ノ老臣田中吉政、舊ニ依リ、丹波天寧寺ノ諸式ヲ免許シ、且竹木ノ  
伐採ヲ禁ズ、……………四〇八

十五日 御日待、……………四〇九

毛利輝元、出雲國造北島久孝ニ同國會我宮造營ノ費トシテ、一分ノ德政ヲ寄  
進ス、……………四〇九

十六日 羽柴秀吉、淺野長吉ニ命ジ、播磨飾磨津ニ於テ、兵糧二百石ヲ十河存保ノ將  
篠原甚五、森志摩守ニ渡サシム、……………四一二

蒲生賦秀、氏儀俄忠兵衛尉ニ伊勢飯野、飯高二郡ノ内八百貫ノ地ヲ、西村重  
就ニ同國飯高、一志二郡ノ内二百貫ノ地ヲ宛行フ、……………四一三

德川家康、酒井忠次ヲシテ、尾張清洲ヲ、榊原康政ヲシテ、小牧ヲ、菅沼定盈  
ヲシテ、松平家忠ト共ニ小幡ヲ守ラシム、○家康、遠江濱松ニ還ル、……………四一四

德川家康、西郷家員ヲシテ、尾張赤見ヲ守ラシム、○家康、之ニ扶持方毎月五

百人分ヲ與フ、……………四一八

十七日 德川家康、佐々成政ニ答ヘ、成政身上ノ儀ニ就キテ疎意ナキ旨ヲ述ブ、……………四一九

羽柴秀吉、禁裏御料所山城十一箇郷ニ於ケル諸職、人夫等ノ競望ヲ止ム、……………四二〇

丹波龜山ノ羽柴次、勝内侍所ニ御神樂ヲ奏ス、……………四二〇

梅若大夫、勸進能ヲ上御靈社旅所ニ張ル、……………四二二

伊豫高峠ノ石川通清歿ス、○子虎竹丸嗣グ、……………四二二

十八日 德川家康ノ將石川數正、東美濃ニ出デ、羽柴秀吉ノ兵ト戰フ、○家康、遠山佐  
渡守ニ書ヲ與ヘテ、其子半左衛門尉ノ戰死ヲ傷ム、……………四二七

上杉景勝、林源五郎ノ功ヲ賞シテ地ヲ與フ、……………四三〇

十九日 長宗我部元親ノ兵、西園寺公廣ノ居城伊豫黒瀬ヲ陷ル、○毛利輝元ノ將桂元  
親、之ヲ輝元ニ報ズ、……………四三一

龍造寺政家、使ヲ島津忠平弘ニ遣シテ降り、誓書ヲ呈シ、兼ネテ大友義統ノ  
兵ヲ討タンコトヲ請フ、○忠平、使ヲ義統ノ將戸次道雪等ニ遣シテ、撤兵ヲ  
求ム、○忠平、肥後高瀬ヲ發シテ、鹿兒島ニ歸ル、……………四三三

二十日 羽柴秀吉、大坂ヲ發シテ、近江坂本ニ赴ク、……………四四四



廿一日 青蓮院尊朝法親王、諸國末寺中法度ヲ定メ、關東ノ末寺ニ下シ給フ、○之ヲ  
下野日光常行堂ニ頒テ給フ、…………… 四四五

近衛信輔、信山城吉田ノ春日社ニ參籠ス、…………… 四四六

筒井定次、兵ヲ率キテ、大和郡山ヲ發シ、東國ニ向フ、…………… 四四七

廿二日 權大納言飛鳥井雅春ヲ罷ム、…………… 四四七

龍造寺政家、舊ニ依リ、麟圭ヲシテ、筑後高良山座主職ヲ安堵セシム、…………… 四四七

廿三日 羽柴秀吉、近江坂本ヨリ北伊勢ニ出ヅ、織田信雄、尾張清洲ノ守將酒井忠次  
ニ之ヲ報ズ、○秀吉、同國土山ニ著陣ス、…………… 四四八

織田信雄、坂井利貞ニ命ジテ、美濃小山築砦ノ用具ヲ德川家康ノ將石河康通  
ノ許ニ急送セシム、…………… 四五二

上總勝浦ノ正木頼忠、黒川出羽守ノ叛意ヲ報ゼシ朝井備中守ノ功ヲ賞ス、…………… 四五二

廿五日 羽柴秀吉、伊勢土山ヨリ同國神戸ニ著陣ス、○上部貞永ニ兵糧米、竹木等ノ  
調達ヲ命ズ、…………… 四五三

(目次終)

大日本史料

第十一編之九

正親町天皇

天正十二年甲申

九月

甲戌朔

八日、辛巳泉涌寺ニ勅シテ、諸國ニ募緣シ、寶塔ヲ造營セシメ給フ、

〔泉涌寺文書〕四○山城

〔泉涌寺衆僧中

左中辨萬里小路充房〕

就密□寺大破之儀、佛牙寶函等、以諸國勸、早可致カ□再造之營之由、天氣候也、仍執達如件、

天正十二年九月八日

左中辨(花押)

泉涌寺衆僧中

○泉涌寺舍利殿再興ノ爲メ、綸旨ヲ吉川元春、山内隆通ニ賜フコト、十三年二月十日ノ  
條ニ見ユ、

羽柴秀吉、前田利家、利勝父子ニ尾張ノ形勢ヲ報ジ、近ク惟住長秀ノ歸陣

天正十二年九月八日



天正十二年九月八日

スベキヲ告ゲ、佐々成政ニ對シ、輕卒ニ兵ヲ動カスコトヲ誠シム、

〔前田家所藏文書〕

四日之御狀今日到來、令披見候、此表之義所々手堅依申付、敵方種々有懇望候、(備田信雄)三介殿御料人、家康惣領子十一(希康)成候を取出、其上家康舍弟重而出、石川伯耆實子、(數正)源五殿、(備田長益)三郎兵衛實子出、尾張國こゝるて雖懇望候、不能許容候處、色々越前守異見被申候條、思案半之儀候、然は越州廿日比は何之道にも可爲開陳候、越中(成政)の行義、はや越前と令談合相定候間、佐々内藏助山取以下仕候とて、聊爾なる働御無用候、うちばに被相構、越前守被相越候を可被待義專用候、自然不被待候、越度候而者、不可有其曲候、猶使者こ申渡候、恐々謹言、

(天正十二年下開シ)  
九月八日

筑前守

秀吉判

前又左(利家)  
御返報

至境目、佐々藏助罷出付而、各被相動、精入御尤候、此表丈夫こ申付、人數不入候條、(惟住長秀)惟越五三日中こ開陣候而、則其表へ出陣候、其間儀無越度様こ、聊爾之働有間敷候、爲其申遣候、恐々謹言、

九月八日

筑前守

秀吉(花押)

前田孫四郎殿(前勝)  
御陣所

○惟住長秀、兵ヲ率キテ、越前北莊ヲ發スルコト、八月十九日ノ條ニ、成政、加賀朝日山ノ砦ヲ襲フコト、同月二十八日ノ條ニ、前田利家ノ屬城能登末森ヲ圍ムコト、九月十一日ノ條ニ、長秀、北莊ニ歸ルコト、十月五日ノ條ニ見ユ、

戸次道雪、(鑑)高橋紹運、(鎮)筑後建仁寺ニ禁制ヲ下ス、

〔太宰管内志〕(筑後之七) 建仁寺

建仁寺ノ制札に、禁制、右軍勢甲乙濫妨狼籍、竹木採用之事、堅令停止畢、若於違犯之族者、可處嚴科者也、仍執達如件、天正十二年九月八日、主膳入道紹運判、丹後入道道雪判とあり、さて南筑明覽に、下妻郡禪院村禪院山建仁寺云云、建仁元年草創也、開山葉上僧正、其後自鎮雄僧正文祿年中迄密灌之法行之、舊記寺寶有故而被収于肥前、今亡云、僧雪舟暫居于此寺、有十六羅漢畫像、雪舟畫也、(又自作)道雪公、紹雲公(傳)黒木誅伐之後、詣于此所、制札相傳曰、紹運公筆跡也、爲青蓮院末山、寺領三十石とあり、

○筑後猫尾ノ黒木實久、大友義統ニ降ルコト、本月一日ノ條ニ、道雪、紹運等、蒲池鎮運

天正十二年九月八日



天正十二年九月九日

四

ヲ筑後山下ニ攻メ、築河、瀬高、鷹尾ヲ焚キ、鎮運、道雪ノ陣ニ抵リテ降ルコト、本月十一日ノ條ニ見ユ、

九日、壬午羽柴秀吉ノ老臣杉原家次、丹波福知山ニ歿ス、

〔寛永諸家系圖傳〕六十 杉原

家系

家利 七郎兵衛、生國尾張、祖父より尾張に住す、

家次 七郎左衛門尉、生國同前、

女子 七曲と號す、淺野又右衛門が妻、高臺院の養ひ母、

女子 あさひと號す、杉原道松か妻、

長房 彌兵次、

家次 元龜元年、秀吉につかへて、家老となり、播州三木の城を領す、

天正十年、秀吉山崎天王山を普請せられしとき、家次奉行す、其後京都の所司代となりて、まつりことをとりおこなふ、江州坂本の城を領す、其後坂本をあらためて、丹波の福知山城を領す、同十二年九月九日、五十四歳にて病死、法名淨庵、

〔寛政重修諸家譜〕五百 杉原

三木ヲ領ス 山崎城普請ヲ奉行ス 京都ノ奉行トナル 坂本ヲ領ス 福知山ニ移ル

家利 七郎兵衛、

家次 七郎左衛門、

某源七郎

女子 淺野又右衛門長勝が妻、七曲と稱す、豊臣太閤の政所高臺院の養母なり、

女子 杉原助左衛門某が妻、あさひと號す、高臺院の實母なり、

長房 彌兵治、伯耆守、從五位下、 母は某氏、

女子 母は某氏、木下肥後守家定が室、

家次 豊臣太閤につかへ、京都の所司代となり、丹波國福知山城を領す、天正十二年九月九日死す、年五十四、法名淨庵、丹波國奥野部村長安寺に葬る、

長房 天正二年、近江國小谷に生る、幼にして父母に離れ、淺野長政にやしなはれ、十四年より、豊臣太閤につかへ、攝津國西代尻池の地をたまふ、時に十三歳、

〔系圖纂要〕五十一 杉原

家利 按、光平十世孫云、然則當光親子也、又云、光衡四世云、杉原七郎兵衛尉、

家次 七郎左衛門、任秀吉公、爲三木城代、天正十一年、遷坂本城、兼京師所司代、又遷丹波福知山、同十二年九ノ九死、五十淨庵、

天正十二年九月九日

五

丹波長安寺ニ葬ル



天正十二年九月九日

女 朝日前、杉原助左衛門入道道松妻、慶長三年八月十一日、康徳寺松屋妙貞、  
 女 七曲前、淺野又右衛門長勝妻、慶長八年四月十八日卒、雲亮院寶林妙瑜、  
 長房 彌平二、天正二年生、同十三年、從五位下、伯耆守、慶長六年、賜常州小栗地五千石、遷豐後杵築城、後遷居但馬豐岡城二万八千石、寬永六年二月四日卒、五十五、道無、六、

〔古文書纂〕

○京都大學所藏 平氏杉原之系圖

家利	桓武天皇九代之皇胤、杉原七郎兵衛尉、自祖父居尾州、
家次	七郎左衛門尉、京都所司代、奉行、福知山二城居之、有勘狀、
女子	七曲、淺野又右衛門尉妻、
女子	朝日、杉原道松妻、
家定	肥後守、
女子	政所、高臺院、從一位秀賴公室、
長房	伯耆守、彌平次、有勘狀、
重長	伯耆守、寬永十八年、被任諸大夫、寬永廿一年十月廿八日、於江戶死去、法名淨本、有勘狀、
長俊	長兵衛、早世、
女子六人	北條出羽守氏重、船越三郎四郎永景、

法名

〔入道傳〕

○山城 木下淨庵 木下七郎左衛門、豐臣家次、七郎兵衛家利男、尾州人、元龜元、仕秀吉公爲家老、天正十二、九卒、五十四歲、

松平伊賀守忠晴、堀美作守親昌、淺野攝津守、竹中左京亮重常、

〔杉原家次墓碑銘〕

○丹波天田郡奧野部村長安寺

天正十二年甲申年九月九日 養室乘安禪定門

〔杉原家次位牌銘〕

○丹波天田郡奧野部村長安寺

心光院殿養室乘安大居士 神儀  
 天正十二年申九月九日、卒於福智城、  
 俗名杉原伯耆守家次、葬于當山、

〔杉原家次位牌銘〕

○丹波天田郡奧野部村長安寺

心光院殿養室乘安大居士  
 相原七郎左衛門尉家次侯、福知山城地三萬石大主也、

天正十二年九月九日



天正十二年九月九日

八

天正十二<sup>甲</sup> 歲九月九日卒去、奥ノ部長安禪寺葬、

大坂松嶋住村上絹女

施主元關利兵衛下女

産下天津村岡井氏女

フク女

○家次、檢使ト爲リ、備中高松城ヲ請取ルコト、十年六月四日ノ條ニ、淺野長吉ト共ニ京都ノ奉行ト爲ルコト、同年八月七日ノ條ニ、山城西山光明寺ヲシテ、寺領ヲ安堵セシムルコト、同年十月十二日ノ條ニ、同國勝持寺ニ禁制ヲ下スコト、同年十一月二十八日ノ條ニ、攝津水無瀨宮ニ於テ、陣取亂妨ヲ禁ズルコト、同年十二月一日ノ條ニ、山城松尾社ヲシテ、寺領ヲ安堵セシムルコト、同月十日ノ條ニ、同國金藏寺ヲシテ、寺領ヲ安堵セシムルコト、同月二十日ノ條ニ、等持院ヲシテ、寺領ヲ安堵セシムルコト、十一年正月二十日ノ條ニ、禁制ヲ山城清涼寺ニ下スコト、同年二月二十六日ノ條ニ、山城賀茂社ヲシテ、社領ヲ安堵セシムルコト、同年三月二十七日ノ條ニ、秀吉、家次ニ近江北郡ノ形勢ヲ報ジ、後報ヲ待チ、兵ヲ率キテ來會セシムルコト、同年四月四日ノ條ニ、家次、石清水八幡宮社家田中秀清ニ、山城狹山郷ノ處置ニ就キテ、委細ヲ報ズルコト、同年五月二十五

日ノ條ニ、秀吉ヨリ近江志賀郡川上莊等ノ地ヲ與ヘラル、コト、同年八月一日ノ條ニ、狂氣スト傳ヘラル、コト、同年年末雜載、武家ノ條ニ、近江坂本ヨリ丹波福知山ニ移リ、同國天田郡夜久莊直見村等ノ地ヲ中村五郎左衛門尉ニ與フルコト、本年八月十九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部<sup>ス之</sup> 杉原家次

花押  
杉原家次

○長濱八幡神社文書(近江)  
十一月十二日附八幡宮惣  
中宛書狀

天正十二年九月九日

九



天正十二年九月九日

一〇

杉原七郎左衛門尉家次

○同上

天正三年三月十三日附  
八幡宮惣中宛禁制

杉原七郎左衛門尉家次

○等持院文書(山城)

天正十一年正月二十日  
附等持院宛書狀

杉原七郎左衛門尉家次

名ヲ家繼  
トモ書ク

長原神領  
ニツキ幹  
旋ス

〔志紀長吉神社文書〕

内○河

態令啓候、河州長原神領之事、貴所へ御理申入由候、連々秀吉様御存知所候、我等式事も入魂申越候、無異儀候様御肝煎頼申候、神主口上可申候、恐々謹言、

八月八日

淺彌兵衛御宿所

家次(花押)

杉七郎左

杉原七郎左衛門尉家次

○天城文書(雜書)

天正十二年八月十九日附  
中村五左衛門尉宛書狀

〔武家事紀〕

十四續集豊臣家臣

相原七郎左衛門尉家次

秀吉ノ舊臣タリ、秀吉播州ヲ領シ玉フ

天正十二年九月九日

一一



天正十二年九月九日

時、杉原國政ヲ司トル、而ノ但馬國手裏ニ入ノ後、但州ノ内ヲ領ス、杉原無程卒去、由此子伯耆守長房ヲ淺野長政カ掣タラシメテ、家事ヲ下知セシメ玉フ、杉原卒去ノ後、長政等秀吉ノ政務ヲ司也、

〔丹波志〕

天田郡二福知山城起元

相原七郎左衛門家次、天正十二申年、當城六萬石領ヲ賜フ、此時、羽柴秀吉ノ命ト

見ユタ、轉江州坂本城移之後、病卒、嫡子十郎光房、或ハ甥トモアリ、秀吉ニ仕テ、豊後國杵築城ニ移ル、

杉原家系ヲ按ルニ、其後番城ト成ト雖モ、難實、十郎長房ト有、

〔丹波志〕

天田郡八陵墓部

一杉原七郎左衛門尉平家次墓、奥野部村長安寺

高サ六尺計ノ五輪、在法名、

新光院殿養室乘安大居士

天正十二申年九月九日ハ誤アリ、

福智山城主也、位牌長安寺ニ在、

家臣ノ墓四基有、碑銘不見、位牌無之、例詢死ノ墓トモ可謂、其名不傳コト可嘆コトナリ、

同貳尺餘五輪ナリ、〇四基トモ、ニ現存セリ、

〔福知山傳記〕

〇丹波 福智山代々城主

杉原七郎左衛門 後紀伊守といふ、

同嫡子伯耆守 但馬國豊岡<sub>2</sub>所替、

〔備中集成志大全〕

十三雜

杉原氏由縁之事

木原ハ平氏、紋所澤瀉、又ハ三引也、淺野家ニモ此紋ヲ用ユ、又云、三浦モ此紋、平氏也、

一木下肥

後守家定妹ハ、太閤秀吉ノ政所ト云、又云、淺野長勝ノ娘ト前書見エ、紛鋪故ニ爰ニ附、淺

野氏先祖ヲ聞ニ、長政ノ先祖清和天皇後胤ニテ、淺野又右衛門尉長勝ト云、此人ハ尾州中

村ノ郷ノ住人ニテ、信長公ノ弓ノ衆ナリト云傳、長勝ハ杉原七郎兵衛家利ノ息女ヲ、故有

テ二人迄養ヒ、一人ハ秀吉ヘ嫁シ、一人ハ淺野彌兵衛尉長政後彈正カ妻トス、一説ニ、淺野

又左衛門ハ杉原家利ノ聲也ト云、杉原氏ハ桓武天皇之後胤、平相國清盛後胤ニ季衡ト云者

有、次男伯耆守光衡ト云、是初テ號杉原是ナリ、四代目ヲ杉原七郎兵衛家利ト云、其子七郎

左衛門尉家次ト云、此人ハ丹波國福智山之城主二萬石領ス、天正十二年、丹州ヨリ江戶州城カ

本ノ城ヘ移リ、京都諸司代ヲ勤、同十二年癸巳九月九日卒死ス、行年五十七歳、法名淨庵ト

號、〇下略

河内石川郡藏入奉行伊藤秀盛、同國叡福寺太子廟ニ燈明料ヲ寄進ス、

〔叡福寺文書〕

〇河内

御太子御社領何も檢地被成、御燈明懈怠候間、雖少分候、田地一段爲灯明寄進申候、あさ名

天正十二年九月九日



天正十二年九月九日

つく田と申所候、全可有所務者也、

天正拾貳

九月九日

上太子

寺中

伊藤太郎左衛門尉

秀盛(花押)

〔附録〕

〔叡福寺文書〕

河内

以上

太子寺屋敷、坊屋敷共八石七斗にて相濟候、可被得其意候、恐々謹言、

天正十二

速水又次郎

拾月廿八日

可有(花押)

太子寺

まいる

定

太子村

當山之儀、秀盛かたへ雖被相留候、過錢無之付而、みたりかひしき由、無是非次第候、見付

相候者、壹人こ三十疋宛過錢申付候間、可成其心得候、并石土草右同前之事、  
以上

天正十四

三田村次郎四郎

九月日

家(花押)

毛利輝元、羽柴秀吉トノ和議ニ據リ、伊賀家久ヲシテ、備中加茂ヲ退カシム、尋デ、輝元、周防、長門ニ於テ、三百石ノ地ヲ與フ、

〔萩藩閥録〕

二十九 井原孫左衛門

此方御一味以來申談候本地、新地御知行之事、於向後彌不可有相違候、先度證判雖進置候、重而承候間、任其意候、尙隆景可被申入候、恐々謹言、

九月九日

輝元 御判

伊賀與三郎殿

(家久) 御宿所

右馬頭

伊賀與三郎殿

御宿所

輝元

今度以片山惣兵衛尉被仰越條々事、具承知候、

天正十二年九月九日



天正十二年九月九日

一六

一御知行本知、新知之儀、前々判形被進置之辻、向後彌無違儀可有御進退之事、  
一依弓矢之成立、自然岡山衆被懇望之子細候共、一往顯可被申之事、  
一御家來之衆若拔々被申様候共、對御方顯申、以其上可令返答之事、  
右條々若於僞申者、可罷蒙日本國中大小神祇、殊八幡大菩薩、嚴嶋兩大明神、春日大明神、  
賀茂大明神、天滿大自在天神、愛宕大權現、別而氏神之御罰者也、仍誓文如件、

天正十二

九月九日

隆景 御判

小早川

伊賀與三郎殿

隆景

隆景備中  
大井庄以  
下ヲ與ヘ  
スコトヲ  
約ス

備中國切之和睦、羽筑分別候而相調候者、御歸國之間、備中大井庄五ヶ村、吉河、山内之事可  
進置候條、可被仰付候、爲其一行如件、

天正十二

九月九日

小早川

隆景 御判

伊賀與三郎殿

家久京藝  
和陸ニヨ  
スリテ退  
城

以都鄙和睦成行、御退城之事被申入候之處、御同心誠以難述言語候、然間雖少分候、於神邊領  
之内、一所可被進置候、彼城方角簡要之在所候之條、城領所相計、以其上、國近所引合可被進  
置候、聊不可有別儀候、恐々謹言、

九月九日

隆景 御判

眞俊 御判

伊賀與三郎殿 御宿所

福原出羽守

小早川

伊賀與三郎殿 御宿所

隆景

京藝和平令入眼、傍爾之儀付而、爲御届此方御取退、誠御入魂不淺次第候、向後不可有忘却  
候、仍於防長三百石進置候、御馳走之段連々聊疎意有間敷候、恐々謹言、

二月十三日

伊賀與三郎殿 御宿所

輝元 御判

天正十二年九月九日

一七



伊賀與三郎殿 御宿所

毛利

輝元

家久ハ宇喜多直家ノ一族

右伊賀與三郎家久者、備中國加茂之城主こ而、宇喜多直家之一族こ而御座候、天正年中、羽柴秀吉公中國御下向こ而、御當家と御合戰之節、直家者秀吉公ハ一味こ而、家久者輝元公ハ御一味仕候、依茲右御證文數通被下之、本地新地、京藝和平之上、案堵（安堵）可被仰付由候處、信長公薨去こ依て、天下秀吉公之御政務こ相成、家久事藝州ハ引越、無程病死仕候處、家續之男子無御座、女子壹人有之候、從輝元公、家久後家娘ハ被對、被下置御扶助候而罷居候事、

輝元井原元歳ニ相續フ命

高四郎大夫師久、御當家越後國佐橋より、藝州吉田ハ御移被成候時、致隨身、同國井原村ハ令下向、號井原高四郎師久、其後井原高常陸介元師者、弘元公被成御聲候、嫡子井原中務少輔元造、其子彦右衛門元良、其子孫左衛門、後こ伯耆元歳と申候、輝元公御側被召仕候、（私家之儀者、元歳以來御奉公仕候、）右こ有之伊賀之遺跡相續被仰付之、家久娘と可嫁旨被仰付候、雖然對彼家、準本領知行於被下置者、家續可仕之由申上候處、先名跡爲相續當分井原を名乘御奉公仕候内、御兩國ハ御引移被成こ付、其御沙汰無之候て、只今迄打過罷居候、伯耆事者、伏見御時代より御奉公相

元歳家久ノ女ヲ娶ル

勤、慶長十五年より、御兩國御仕置之御手傳被仰付、輝元公御隱居ハ被召連、寛永貳年迄相勤候、嫡子與三郎（後孫左衛門元良、伊賀與三郎家久娘ハ出生仕候、）家續之後天死仕候、男子貳人御座候、嫡子清吉、（後彦右衛門次男新發意、後十右衛門就尙、と申候、○下略）

○家久、宇喜多直家ノ許ヲ去リテ、輝元ニ屬スルコト、九年八月十九日ノ條ニ、輝元、誓書ヲ家久ニ與ヘテ、其忠誠ヲ褒スルコト、十年六月九日竝ニ十一年閏正月十二日ノ條ニ、家久、美作木山寺ニ、舊ニ依リ、諸役ヲ免除セシムルコト、十一年年末雜載ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕

イ之部

伊賀家久

伊賀家久

家久

○木山寺文書（美作）  
天正十一年八月十三日  
日附寄進狀

家久ノ花押



天正十二年九月十日

二〇

十日、癸未織田信雄、長田善二郎、同又五郎、長崎彌左衛門等ニ替知ヲ與フ、尋テ、又津田清次ニモ之ヲ與フ、

〔三田村文書〕○越前

北伊勢橫部東方之郷ノ地方之郷ノ地

北伊勢橫部東方之郷之内を以、替知之内先貳百貫文宛被仰付候旨候間、全可有知行者也、仍如件、

天正拾貳九月十日

曾我又六郎(花押)

朝夕 (花押)

松庵 (花押)

長田善二郎殿へ

長田又五郎殿へ

〔長崎文書〕○東京大學所藏

同朝明郡ノ地

北伊勢朝明郡五原五郷之内四百貫文、爲替知被宛行之旨、被仰出者也、仍如件、

天正拾貳九月十日

曾我又六郎(花押)

朝夕 (花押)

松庵 (花押)

長崎彌左衛門殿

〔阿波國古文書〕一名東郡津田勝次郎所持

同員辨郡ノ地

北伊勢伊那邊郡内大社之郷、同郡赤尾郷合八百貫文、替地之内、先右分被仰付候、全可有御知行狀如件、

天正拾貳

曾我又六郎(花押)

九月十一日

朝夕 (花押)

松庵 (花押)

津田清次殿

○信雄、清次ニ伊勢三重郡ノ地ヲ與フルコト、十一年九月十日ノ條ニ見ユ、

伊勢國司代北畠朝親沈松齋、本願寺光佐顯如ニ物ヲ贈ル、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕○山城 一同日、勢州國司代東門院、今ハ枕松齋ト云、御書

恐々謹言、御判無之、今度御音信太刀、鳥目五百疋、刑部卿取次也、

○朝親、家康ニ南海ノ形勢ヲ報ジ、伊勢ノ地ノ返付ヲ請フコト、四月三日ノ條ニ見ユ、

若狹小濱ノ廻船業者木下和泉入道、羽柴秀吉ニ物ヲ贈ル、是日、秀吉之ヲ

謝シ、近夕歸陣スベキコトヲ告グ、

天正十二年九月十日

二二



天正十二年九月十日

〔集古文書〕

七十二 家臣岡本秀武藏

南河之鮭二尺到來、祝著候、則可賞翫候、將又此面任取下、近日可納馬之條、可心易候、猶追々可申聞候、恐々謹言、

九月十日

筑前守

秀吉 印判

木下和泉入道殿

○秀吉ト織田信雄、徳川家康トノ和議成ラズ、家康、陣ヲ尾張茂吉ニ移スコト、本月七日ノ條ニ、秀吉、病氣平癒ヲ和泉入道ニ報ズルコト、十三年五月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔若狭國志〕

附録

閩書島夷志、攝、磨、伊勢、若サ、博多其民相矜、以賈積貲或百万、和泉一

州所食擊鐘謠、右二書○圖書編、明ノ世ノ書也、勢村ニ高橋長者ト云フ富人アリシコト云傳タリ、當國ニ南京、高麗、交趾ノ磁物多クアリテ、京ノ商人年々ニ多ク買ユキタレドモ、ナホ殘ル處夥シ、木下和泉、組屋六郎左衛門ガ先祖朝鮮ヘ行テ交易セシ由言傳フ、

豊後賀來ノ賀來松壽、父鎮光ノ所領ヲ相續ス、是日、大友義統、松壽ヲシテ、之ヲ安堵セシム、

〔賀來文書〕

○肥後

親父兵部少輔鎮光一跡之事、任相續之旨、領掌不可有相違候、恐々謹言、

九月十日

義統(花押)

賀來松壽殿

秋月種實、島津義久ト龍造寺政家トノ間ニ周旋シ、和ヲ講ジテ成ラズ、義久、兵ヲ肥後隈本熊本ニ集ム、是日、島津忠平義弘、伊集院忠棟等、隈本ニ著ス、尋デ、軍ヲ同國吉松ニ移ス、

〔上井覺兼日記〕

十八 八月、

一四日、○中略、覺兼、酒宴ノコト、此日長野淡路守、就居頭役ニ、鹿兒嶋ヘ被參候、歸宅候て、野村大炊兵衛尉殿まで、書狀にて承候趣者、御出勢之事、先日吾々祇候申候砌之御談合無相替儀候、來廿六七日、必肥州隈本ヘ諸勢被著合候様ニ打立肝要之由承候、然者同名右衛門尉宮崎ヘ歸候て、此趣諸方ヘ觸させ候也、

一五日、早旦内山茶屋にて、休世齋御會尺可申之由申候間、掃地等可申付ため、彼方ヘ行候、柏原殿、野村大炊兵衛尉殿同心申候、先今度宮崎衆可被立衆等書立候、其外種々盛共申候

天正十二年九月十日

二三

上井覺兼  
二日隈本ニ  
諸兵集結  
スベキコ  
トヲ觸ル  
宮崎ノ衆  
ヲ立ツ衆



也、此朝ハ天氣惡候て、未刻計休世齋御下也、茶湯會尺申候、柏將、野大座被居候、御茶別儀にて候、此夜ハ茶屋被衆留候て、終夜閑談酒宴也、

〔上井覺兼日記〕 十九 八月、

一十五日、早朝佐土原へ中書公御二人御歸宅候、御祝言被參候、樽一荷、食籠肴にて進獻申候、衆中十人計同心申候、銘々瓶酒進上被申候、家久御父子御指出御寄合也、折節新納殿、又都於郡興善寺被參候、同座にて御見參也、種々御會尺也、持參御酌申候、又中書公御父子共御酌被成候、表之御座終候て、奥へ被召寄候、是へも食籠肴にて御酒持參候、奥にても御酒宴共也、殊之外酌共申候也、弓削太郎左衛門尉處へ宿申候、罷歸候へハ、廳而又七殿御酒もたせ候て御禮こ入御也、又暫酒宴也、又七殿へ拙者刀進入申候、康光也、漸薄暮こ打立候て、如宮崎罷歸候也、

一十六日、如常、柏原將監殿子息へ、帶此方にて解せ申候へと、同心候て被來候、即帶進之候、祝言とて酒肴預候、終日酒宴也、此日上原長州より書狀到來候、此度御出勢之儀、於飯野又々御談合共被成、其趣具こ此方まで御注進候する由被聞及候、如何之由相尋也、聊不存事候間、其分こ返答申候、鎌田筑後守都於郡へ使こ越申候趣者、今朝從鹿兒嶋之書狀、其方より持せ預候、彼趣者、豊州より使僧かこしまへ被參候頃、歸宅たるへ候、送之夫丸等縣へ

島津家久  
豊久佐土  
原ニ歸ル

康光ノ刀

帶解  
忠平等出  
兵ノコト  
ヲ議ス

鹿兒島ヨ  
リノ書狀  
ノ大友義統  
ノ使者

可申付之由也、彼使僧遊行上人へ被參候、然者歸宅之日限、鎌雲前より委被聞せ可承之由申候、未都於郡へハ不被來由也、彼使物語にも、今度御出勢指延候様に歎候らん、瀧聞宗運前より都於郡へ聞之候處者、於飯野御談合共候て、宮崎まで其趣可相聞之由候通、鎌筑後守物語也、

一廿日、從海江田人數など召寄打立候處、從かこ嶋庄内役人衆までの御狀持せられ候、其趣、御出勢之儀、來廿七八日、隈本へ越著之由雖被仰渡候、御談合替事候、然者來月二日三日、隈本へ著揃被成候様こ可然候、此由宮崎へも可被仰渡之趣也、依其打立之事留候、此由當國中へ申渡候也、此日幕之加治等敷禰休世齋被成候て祝儀也、從穗北兩使也、同名右衛門尉、柏將被聞候、本田治部少輔殿先年平田孫六殿楚忽之儀共候て、其六ヶ敷事故、當所こ付公役共候、又々本之ここと、穗北こ公役共候様こ拙者頼之由、平田新左衛門尉殿より承候、是ハ拙者分別にて、治部殿此方へ公役被申事にてハなく候、就御事之儀、中書公など聞めされ候て、穗北之衆中にてハ有ましきに定候て、此方へ公役なされ候條、吾等として意見ハ難申候、本治部少輔殿へ御談合被成、彼校量次第其方へ公役共候ハ、一段可然之通申候、○下略、遊行上人ノコトニカ、ル、附録ニ收ム、

一廿四日、別而愛宕へ讀經申候て祈念仕候、休世齋歸被成候、柏田船本まで送こ罷出候、從夫

隈本へ集  
結ノ日時  
變更



覺兼和知  
河原ニ新  
村ヲ立テ  
祭

大將ハ忠  
平  
逃散ノ百姓  
ヲ舊ノ領  
主ニ返ス  
手立ノ談  
合

使者鹿兒  
島ヨリ歸

直こわち川原こ船繫候する入江候由申候、然者其邊こ村を仕立候すると存候條、左様之躰見償候する爲罷下候、齋藤讚岐拯處にて會尺也、各御酒なと持來候也、從清武使也、肥立日限之事并來月十五日祭禮候間、衆中なとも隙入事候、然者祭過候て立有度由之佗也、返事、當所も來月十五日兩社御祭禮候、殊こ衆中百姓こ相懸事に候間、祭を指延罷立候、御祭禮こ指合候へ、諸方以同前たるへ候條、御出勢無人數たるへ候、是非以祭禮にハ取合なく、來月二日三日、隈本へ越著候様こ、各打立肝要之由返答申候也、從椀山殿も、續打立日限使者にて御尋被成、同前こ申候也、此日從忠棟會并傳こ書狀預候趣者、來廿六日必打立被成候、拙者も其覺悟可申由也、今度御大將兵庫頭殿御當之通爲存知とて書載候、大野治部太輔殿より、山田百性逃散仕、此方へ居候由被聞及候、此等之儀御法度之前に候間、無異儀歸候様に頼被成由、使者にて承候、即歸申候する由、返答申候也、

一廿五日、天神へ別而看經等申候、行之談合共、衆中寄合候ていたされ候也、此日新納殿入御也、即申請候、御酒御持せ也、座躰、客居四郎殿、鎌田源左衛門尉殿、新納右近將曹、次新納殿内衆、上井名字ノ方、主居拙者、柏原將監殿也、種々御會尺共申候、御持せ酌被成候、即拙者も御酌申候、此夜ハ柏原殿へ御留被成、拙者御禮こ參候、將監殿御會尺共被申候也、  
一廿六日、鹿兒嶋へ參せ候飛脚歸來候、親貞、忠棟より書狀到來候、先日被仰越候様こ、無油

覺兼宮崎  
ヲ發ス  
竹田ニ泊

飯野ニ忠  
平ヲ訪フ

馬越ニ著

斷早々打立肝要之由也、(種實)秋月より使者返事も未落著候、彼是今少御談合可入子細共候間、來廿九日、於馬越御談合可有候、忠平公も彼方へ御出合可有候、其外談合衆彼方へ可被揃候、拙者事も必々可罷出合之由、上意之由也、此日吉日にて候間、首途こ岩戸へ參詣仕候、滿願寺城へ御登候、此度御出勢別而御神慮肝要之儀、鹿兒嶋より被仰候、然者不動護摩廿一座、歸宅次第修行可仕候、立願頼存之由申候、聽而祈念被成願書預候也、

一廿七日、肥後表御出勢こ付打立申候、於馬越御談合と候間、定而一兩日ハ彼處こ可爲隙入之條、衆中ハ明日可被打立由申候、此日昏屋邊までと存候處、吉利殿御父子竹田こ出合被成、於假屋種々御會尺也、然者斜陽こ罷成候儘、彼處こ留候、(吉和忠)頻總州御館へ可參之段雖承候、沈醉申候儘、加治木雅樂助を以申述候、

一廿八日、鷄鳴こ荒神へ看經申候、未明打立候、野尻町にて破籠なと受用候、然處從飯野來者申事にハ、武庫公御打立今日と定候つれ共、如何候哉、指延由申候、然間愚弟次郎左衛門尉處へ人を遣承合候、一定忠平公御打立者今日指延候、菟角今夜ハ彼處へ留候へと候て、使者被遣候、就夫彼館へ行候、茶屋にて會尺也、種々肴酒にて閑談共申候、

一廿九日、早朝次郎左衛門尉殿振舞也、種々之儀共候、從夫打立候、般若寺麓之川原にて破籠共受用仕、漸馬越田中之大宮司處こ越著候、即忠棟御宿へ使進入候趣者、今日於此方御談



合之由候儘、急可參著覺悟候處、忠平公御打立遲候間、當者今日御談合ハ、迎成間敷存候て路次等心靜ニ只今參著候、尤參候て可申承候へ共、路次之疲勞之由申候也、さては越著申候哉、可然候、明日御談合たるへき由返答被成、

九月、

一一日、看經等別而申候、忠棟へ使進入候、今日御談合在所如何之由申候、武庫御宿たるへく候由也、亭主御酒振舞候也、聽而忠棟宿へ參し候、新納武州(忠元)、川上參州(忠實)など閑談共候、忠平公より御使給候、夕より此方へ越著申候歟、御無沙汰候、やかて祇候可申由也、拙者こそ早々可參候處、御使忝候由申候也、忠棟同心ニ忠平公御宿へ參候、即御見參也、亭主伊東右衛門佐御會尺被申、其座躰、主居武庫公、忠棟、町田出羽守(久能)、松尾方、亭主、客居圖書頭殿、拙者、奥之山左近將監方、新武州、川參州、猿渡越中守也、種々御會尺也、御點心參候、主居武庫公、川上上州(信之)、新武州、町羽州、松尾與四郎、亭主、客居躰臺、忠棟、拙者、奥之山、本田刑部少輔、川上參州也、種々持參候御酒共候て、御酒宴也、此座果候て御談合也、町羽州、穢所新介御使被申候、各へ被仰出趣、此度御出勢各辛勞之通也、付而者秋月媒介を以、龍造寺と和平之由候、然者秋月之神判、又龍造寺神載を以秋月迄申段、兩三使到來候、就其飯野へ平田濃州(光秀)并御使衆町羽州被差越、於彼方新武州、川參州など御談合共候、各和平之儀ハ無納得

忠棟覺兼  
等忠平ノ  
宿所ニ會

忠平等和  
平ヲ好マ

義久虫氣  
ヲ病ム

評議衆  
和平懇望  
カハ龍造寺  
ノ謀計

候、一圓ニ御弓箭之由候、尤頼母敷被思召候、併去春之御出馬も各太守様御進發候へてハ何篇難成之由候、就夫御發足被成、御大利無是非候、此度ハ御虫氣然々候ハぬ故、御發足有ましく候、さてハ誰人も御發足共候ハす共、閉目なされ候する仁候ハ、近比可目出候、殊漸百日計之用意、諸軍衆へハ被仰付候歟、左候て肥州表一行可有之事ハ御納得なく候、就夫者、諸勢歸國之儀等御侘可申條、程有ましく候歟、然者龍造寺從爰御披官(被)ニ罷成、質人をさし上候する由申候、所領等去渡候ハぬ迄にて、此等之儀を被仰離候するハ、御所好にてなく候、其故者、日新様(忠貞)、伯圍様御代より已來、十分ニ候ハぬ所を專一(忠貞)なされ候、諸侍者無曲御和平など、存候共、先々彼秋月之使之者和平之由御返事被成、さて御當家ハ和平ニ罷成候其日までハ、互ニ防戰大法之様候、此度も其分たるへき由返事被申候て、諸勢者隈本邊ニ被著合、存分之行肝要之由被思召候、但御弓箭一篇ニ此度御出勢日限過候共、我々閉目候するなど存候旁々候ハ、可然之由也、乍重筆度々十分之事を被指捨、御勝利之例多々被仰出候、難盡筆昏候、各上意乍勿論、尤奉存候、さてハ秋月より使者四人參候、彼兩人ハ八城(代)へ被召留、今兩人へ此方より使僧被指添候て、和平之儀被申候、然て肥筑などまでも差上候するなど、申候ハぬ處、兵儀衆無納得候、其故者、隆信弓箭盛之時さへ、肥後之事ハ御所感被成、和睦之由共被申候、況當時者弓斷矢盡たる政家和平懇望ニ、領知等進



天正十二年九月十日

三〇

上之由不被申候事者、又々謀計迄候條、善惡弓箭たるへく候、併今一到來聞せられ候する由、被仰渡候て、可然之段定候也、左候而、各假屋へ歸宿候、

一 二日、早朝馬越を打立候、軍勢道支候間、漸久木野へ著候、

一 三日、早旦打立、申刻計佐敷へ著候、拙者腫物散々候儘、從彼方船を乗候、衆中又ハ忤者なとハ陸路也、佐敷小宿へ、地頭御酒持せ被來候、種々之儀共也、夕塩へ出船申候、

一 四日、朝塩へ德之淵へ著岸候、平田濃州より著津之由候て、使預候、町之衆など御酒共持參申候、賞翫共候、菟角候て、申刻計八城籠へ著候、村山舍人助へ宿申候、亭主即御酒被振舞候、忠棟よりも、罷著たる由候て、使預候、拙者も入して申入候、

一 五日、忠棟御宿にて寄合中、種々談合共申候、此日忠平公著岸被成、伊集院下野守各宿等之儀可被仰調之由申候て、隈本へ被遣候也、此日秋月より之使者へ、兩人ハ此方被留、今兩人ハ此方之使僧同道候て被歸、委龍造寺之意分共、可被聞せ之由被仰理候、使町田羽州、穢所新介也、御兵儀衆之御存分尤存候、備者此方より御使を以可罷歸之由也、併諸勢堺目へ指懸被成、火色等顯然候ハ、肥、筑、隈騷以之外たるへく候、左候てハ、何たる償之御談合も難申調候間、彼使往返十日計之事ハ、御行を被指延候て可目出之通、秋之使前より頻々候也、

覺兼馬越  
ヲ發ス  
佐敷ニ著  
ス

八代ニ著  
ス

忠棟宿所  
ノ會議  
忠平八代  
ニ著ス  
種實ノ使  
留メ二人  
ヲ返ス

平田光宗  
ノ宿所  
ノ會議  
十方暮

忠平宿所  
ノ會議

合志親重

肥後表ニ  
禁制ヲ下  
ス

一 六日、兵儀衆差揃、濃州宿にて談合也、菟角此十一日より十方暮にて候、然者此内ハ御働なとなされぬ日廻に候、をのつから十日計ハ御行可相延候條、秋之使之存分を被任候て可然之由也、左候て御書并寄合中書狀返答など被渡候、

一 七日、忠平御宿にて御寄合也、座躰、主居忠平公、伊集院肥前守、本田紀伊守、川上左京亮、客居麟臺、拙者、奥山左近將監、松尾與四郎也、種々御會尺共也、此日秋月之使者、此間書狀共候、届候すれとも、日州遠方之故、無其儀候、乍聊爾遲怠無是非候とて、書狀被持來候趣、一和之儀頼之由共也、下緒二筋預候、使者内田九郎左衛門尉也、此日合志殿并山鹿刑部太輔殿より使書預候、爰元御出勢目出之由共也、著合之諸勢禮儀承候也、

一 八日、早朝肥後表へ可被立高札を判仕候、其趣、

禁制

- 一 神社、佛閣并構四壁等の竹木切とる事、
  - 一 諸耕作あらし濫妨之事、
  - 一 所、たひの衆によらす、喧嘩口論いたす事、
- 右條々堅令停止畢、若於違犯之輩者、速可被處罪科者也、仍下知如件、

天正拾二年九月八日

伊勢守判

天正十二年九月十日

三一







覺兼隈本  
ニ著ス  
長野惟冬  
城一要  
忠平モ著  
ス

忠平宿所  
ノ會議

會議ノ條  
數

加悦飛驒守より使者にて、爰元へ著岸之由目出候、尤自身早々可被來候へ共、今日木原無餘儀祭禮候、參詣候て、只今被歸候間、聽而可被來之由也、從此方可申通處て、著津之由被聞せ、使節祝著之由返答申候、此晚如隈本可罷通覺悟候處、鹿兒嶋衆少々被來候、武庫公、忠棟ハ何たる由共候こ哉、今日ハ小川、豊福邊て御留之由物語候、さてハ陸路御供申候ハぬさへ候、せめて此方て待申候へてハと存、穢新拙者同心て留候、加悦飛驒守、拙宿へ禮て被來候、即參會申候、御酒寄合候也、

一十日、○上略、隈部親泰、島津氏ニ屬セント請フコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、早々隈本へ可罷越之由也、從夫聽而川尻を打立、隈本へ罷著候、武庫公、忠長、忠棟此晚著せられ候、拙者宿長野惟冬之在處也、城一要より使者也、罷著候、尤自身禮被成候すれ共、忠平公御著、打つゝき會尺被成候間、無是非候、先々一人て而禮儀承由也、

一十一日、早朝武庫公御宿へ參候、即御見參也、諸方角より到來共多々候間、指寄御談合候而可然おほされ候、忠棟へ此由申合候て肝要之由被仰候條、聽而忠棟へ參し候、即談合衆書立觸なされ候、其衆忠長、忠棟、新納武州、伊野州、吉利總州、比志嶋吏部、町田羽州、伊集院作州、穢所新介、吉田作州、(請也)上原長州、伊集院肥州、此衆也、御談合條數、拙者書付候、一諸方角計策用捨之事、一豊後陳へ御音信之事、一御陳替之事、右之條々忠棟宿所にて談合也、此

天正十二年九月十日



城親繩

天正十二年九月十日

三四

朝城一要、同親繩同心に拙宿へ禮被成候、即見參申候、御酒參會候也、太刀、織筋、預候、各地下衆、旅衆禮共承候也、此晚亭主長野惟冬に御酒振舞候、上原長州、穢所新介相伴に賴候、深更迄酒宴共也、

忠平宿所ノ會議

一十二日、典厩(征久)、義虎などへ御禮申候、此朝武庫様於御宿談合也、忠棟、新武、上長、伊野、町羽、拙者也、此日城一要宿所へ忠平公被申請候、其座様、客居武庫様、忠長、拙者、町羽、伊野、主居典厩公、忠棟、一要、新武也、終日御會尺也、點心之時、奥之山左近將監、松尾與四郎參候、地下より長野惟冬被參候也、酒宴亂舞也、奥之山、松尾鼓仕候、一要より祝物など被遣候、寄合中より一要へ太刀、織筋、一ツ、持せ候也、聽而於御座中こ一要被見候、深更こ各御歸宿也、

陣ヲ吉松ニ移ス

一十三日、早朝打立、吉松へ陳替申候、諸勢同前也、武庫様へ一要こ此朝御寄合故、御遅引也、此未之刻計吉松へ著候、○山鹿某、降ヲ乞フコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、

〔後薩藩舊記雜錄〕

十五

肥後立之事示給候、得其心候、替儀候者、將又可預御注進候、仍宮崎へも即御狀之趣申渡候、恐々謹言、

北郷

北郷一雲

天正十二年比方八月十九日

一雲(花押)

本多親貞

本田下野守殿(親貞)御返報

庄内衆

猶々、爰こ河内へ御番衆勢之と差籠申、其上○薩藩舊記、上ヲ後ニ作ル、肥後へ忠虎可罷立事、曾而難成次第候、諸家も兩口之御奉公者不被召様承候、具足之多少者可相定候歟、庄内衆計被仰付事、不致納得候、

來翰令披見候、

一爰こ河内御番手之事、此間之人衆逗留可申之由承候、兼日廿日之日數相定候之間、如其替合申候、爲御心得候、

一此度之替之人衆、先日之御番○同書、コノ次ニ手ノ字アリ、三ツ一ツ立申候、其故者肥後へ○同書、ハ字ナシ、彈正忠可罷立之由承候、他國之出張、且遠方、且可爲逗留候間、其用意乍不如意相納申候、難遠左右方之御奉公候之條如此候、

一肥後立之人衆者、菱刈へ逗留申可承合之由承候、得其心候、近所之御人衆御立之刻者、彈正忠も可罷立覺悟候、

一菱刈口御番之事、三ヶ國三番被仰付候由、先日承候間、如其分別之處、諸家之御番手無御見

天正十二年九月十日

三五



得候之由承及候、無御心元候、

一爰こ河内之事、御番代も、足輕扱之御入衆も無御見得候様承及候、其外普請等も無御沙汰候由聞之候、於如今之御覺悟者、一定惡事可致出來候歟、愚拙忤者共若輩耳候之間、一段氣遣存候、爲後日申入候、恐々謹言、

九月十二日

北郷左衛門入道

一雲(花押)

本田下野守殿 御返報

○種實、和ヲ義久、政家ノ間ニ斡旋スルコト、四月二十四日ノ條ニ、肥後ノ諸士、義久ニ降ルコト、本月二十一日ノ條ニ、忠平、軍ヲ肥後吉松ヨリ、同國高瀬ニ移スコト、同月二十四日ノ條ニ見ユ、

〔附録〕

〔上井覺兼日記〕

十八

八月、

一朔日、祝言等如恒例、衆中各禮儀承候、御酒など預衆も候、寺社家同前各御參會候也、諸方よりも禮儀共承候也、此日鶴戶參詣之爲、海江田へ越候、休世齋同道申候也、日暮之間蘇山寺へ留候、休世齋、鎌田源左衛門尉殿、柏原殿、野村大炊兵衛尉殿、上井右衛門尉殿、此衆同

上井覺兼  
鶴戶社ニ  
參詣ス

別當坊ニ  
於ケル酒  
宴

心申候、蘇山寺殊之外會尺被成候、終夜酒宴共也、

一二日、早朝出船申、鶴戶へ參詣申候、先船本まで、別當より御使僧預候(つ、)宿坊へ著候、御案内者として使僧預候、廳而同心申、別當へ參候、先三獻也、食籠肴にて樽二荷進入申候、案内者被仰付候間、即神前へ參候、言語道斷之靈地無申計候、日來之念願之祈并讀經等申候、御幣頂戴仕候、御益之坊主御縁記之趣共委物語也、參錢百疋進獻申候、其後御本地堂へ參候、別當庭まで指出被成、頻と承候間、又御坊へ參候、座躰客居休世齋、次恭安齋、柏原左近將監殿、愚弟神九郎也、主居別當、次拙者、鎌田源左衛門尉殿、上井右衛門尉也、種々御會尺無申計候、三篇目拙者持參、別當へ酌申候、即又別當御酌被成候、衆僧へ拙者持せの御酒、同名右衛門尉酌にて申候也、吾々忤者などへも、銘々こ御會尺被成候、召出之御酒など也、御兒、若僧達御酌などにて、種々御懇志共也、二王堂にて追酒也、八町坂上まで、別當送こ御出也、拙者初而參候とて、百疋別當より預候、至薄暮從鶴戶出船申候、矢野大炊左衛門尉小目井こ頻可來之由申候て、中途まで來候間、此夜小目井こ留候、種々會尺、終夜酒宴也、圓福寺も同心申候也、

一三日、早朝矢野大炊左衛門尉會尺申候也、野村大炊兵衛尉昨日船にゑわれ候て、野嶋こゑろしき置候、然者陸路より參候するとして被來候、鶴戶別當へ昨日御懇懃之儀共御禮申候

天正十二年九月十日



天正十二年九月十日

也、恭安齋、伊比井へ休世齋、吾々御同心之由候間、伊比井へ著船候、此日川下共候て、河肖遙也、棧敷共候て、種々珍敷御會尺共也、從別當昨日參候處、無會尺なされたる由候て、御使僧也、即參會申候、酒宴也、聽而御禮申候て歸し申候、此晚鞠にて慰候也、假屋種々會尺申候、地下之者共吾々宿へ踊入候、見候て慰候也、圓福寺御座候間、種々我々耳こ不入御物語共被成候、聽聞申候、深更こ各小宿へ被歸候也、

一四日、假屋種々會尺申候、從野嶋頻可來之由申候へ共、先々隙入事候間、急候て、紫波洲崎のこくとく歸帆候、著船之時分、野嶋之者共、中途海上にて御酒と存候つれ共、順風荒候て難成候間、此方へ持參之由申候、種々之儀共也、即賞翫申候、聽而風呂燒せ候由候間、行候て入候、柏將、野大同心申候、折宇<sup>(生半間シ)</sup>迫濱之者共御酒持來候、各參會賞翫仕候、蘇山寺も御酒持せ被來候、此晚於中之城、悴者共各寄合候て坂迎申候、深更まで酒宴也、○下略、覺兼、部下ニ限カ、ル、上ニ收ム、本集結ヲ命ズルコトニ

一六日、早朝茶屋にて會尺申候、圓福寺、休世齋又へ各同心申可參之由承候間、參し候時、御振舞種々之儀共也、無門關四五則讀なされ候て聞せられ候、百丈之野狐こはかられ候て、太御酒こ罷成、各沈醉申候、柏將、野大へ宮崎へ申付事等候間歸申候、休世齋へ紫波洲崎城へ御登也、拙者へ歡千代丸參宮之ため罷越候間、木花寺まで迎こ指出候、木花にて種々會

尺共候、從夫御諷方<sup>(御)</sup>へ參詣申候、參錢百疋進上申候也、御幣頂戴候、從夫御伊勢へ社參申候、參錢同前、貳三獻參候、御幣頂候、それより城へ罷登候、於内城貳三獻、歡千代こ百疋被下候、深更まで種々御會尺也、持參之御酒なと賞翫共被成、酒宴也、

一七日、中城へ歡千代召烈<sup>(列)</sup>參候、三獻同前、從夫御崎へ參候、百疋持せ候也、座主坊にて終日會尺被成候、院主より歡千世へ百疋給候也、休世齋、恭安へ留守こ御座候、座主にて珍酒候つる間、拙者兩老へ使こ而、右之酒送進之候、捻之與こ、

おもひきや出しし跡こ君をききてかゝる情をかへすへきとハ  
なと戲候也、御兩所よりも、即返歌共被成候也、此晚中城へ留候、折宇迫衆踊共仕候、二三番入<sup>(戲)</sup>は共舞候也、

一八日、中城寄合被成、種々御會尺酒宴也、此晚加江田御伊勢之前弓場にて的也、種々之儀共也、此夜へ内山こ留候、

一九日、如宮崎打立候、蘇山寺弓場築せられ候て、拙者會尺とおほされ候、然共此度繁多にて無其儀候、そと通こ見可申之由候間、立寄候て見申候、殊之外御酒なと也、此晚宮崎へ著候、

一十日、歸宅候とて各被來候、碁將碁<sup>(碁)</sup>なと也、行前にて候間、諸細工させ候て見申候、此晚柏

天正十二年九月十日



天正十二年九月十日

四〇

原殿庭にて、鞠慰(ヲ)蹴候へと承候間、其分候、種々會尺にて、深更まで酒宴也、  
一十一日、此日も細工なとさせ候て見候、時々(ヲ)碁にて慰候、此暮休世齋從紫波崎(州)此方へ御越也、

一十二日、藥師(ヲ)祈念等別而申候、脇刀上野彌左衛門尉へ作せ候、打立候也、丸ぬき也、此日、從紫波洲崎より内々歸也、各供共仕來候、歸著之時分、當所北方南方より雜掌(殿)くれ候、寄合候て賞翫申候、供衆なとへも、召出之御酒也、一昨日遊行上人より使僧預候、其趣者後住定、鹿兒嶋へ被請御意、來廿日祝儀必定候、左候て、聽而當住之定之方者、又遊行(ヲ)打立たるべく候、美々津まで送之儀頼被成由也、就夫鎌田雲州へ談合のため、堀四郎左衛門尉殿越申候歸也、雲州者差合事候て無見參候、小牟田方にて被相達候、巨細明日使節を以可承之由也、

一十三日、如常、歡千代供申候て越候、同名神九郎、加治伊與介なと歸候間、恭安様へ御禮等申入候也、

〔上井覺兼日記〕

十九

八月、

一十七日、如常、鹿兒嶋淨光明寺遊行之後代定(ヲ)付、都於郡へ御越候由候て、使僧預候趣者、遊行送之事、美々津迄可申付之由也、

刀工上野  
彌左衛門  
尉

遊行上人

鹿兒嶋淨  
光明寺

一十八日 觀音へ別而讀經等申候、中書公より預御使者候、川上左近番長殿也、先日祇候申候御禮也、折節美々津より安藤方御酒持來候、使者へ參會、種々肴にて酒宴也、

一十九日、幕仕立させ候、見申候、從高城使也、趣者、遊行上人より、近日中被立せ候、然者都於郡より高城まで著せられへき由候、宿等之儀頼之由候、續前と申難成候、其上高城(者)二三反之道場御座候へ共、是にハ迎も成ましく候、其上一夜御逗留候ハ、調達等如何候する哉尋之由也、拙者返事、此方へ遊行より承候處者、都於郡より美々津迄と承候、さてハ高城までと候や、彼方へ猶々尋させられ候て可然候、又調儀之事、去年飢肥より海江田常瑠璃寺まで御座候て、彼寺へ一宿候、吾々ハ肥後立、留守にて候つる、彼處にてハ調儀ハ不申候、野菜薪なとハ申付候、此分にて候つる、若々左様にもや候すらん、菟角能々都於郡へ御談合候て可然由、返事申候、此日都於郡興善寺被來候、久無沙汰之由共也、御酒預候、參會候て閑談共也、此日所々へ遊行上人送之儀等申渡候、從本庄萬福寺御酒持せ被來候、即參會申候、

一廿日、○中略、隈本集結ノ日時變更  
ノコト等ニカ、ル、上ニ收ム、次こ遊行上人送之事、かこしまより、穗北一所にて閉目可被成之由當候、難成おほされ候處、拙者前より彼盛承候分者、輒く目出由也、此返事、不紛遊行送之義盛を以申候、然こかこしまより直こ御當候哉、僮者其ことく御閉目可然候、拙者

天正十二年九月十日

四一



天正十二年九月十一日

四二

所々へ申付候分ハ、留候する由申候也、

一廿一日、彼岸入にて候間、別而念佛共仕候、諸所へ續指延候由申渡候、返事等到來也、都於郡へ本田大膳亮にて申候、前日遊行上人送之事、所々盛を以申渡候、然處穗北へかこしまより直こ被仰付由候之間、さてハ私前より諸所へ申付候てハ、指過たる儀候間、先私申付候分ハ差留候、然間盛之書立進之候へとも不入事候條、可返預之由申候也、返事、彼送之事とちまるへくおほされ候處こ、又々如此候哉、笑止こ候、併菟角拙者入魂申候へてハにて候由也、

京樽

一廿二日、彼岸中看經同前、此日柏原將監殿頼候て、遊行上人へ久無沙汰之由申述候、并俵四十輕微こ候へとも、御合力之由申候て進入候、鹿兒嶋常光明寺へ京樽一荷進之申候、いづれも御大慶之由也、此晚此方庭にて鞠也、各へ御酒振舞候也、此夜長野淡路守、野村大炊兵衛尉、明日休世齋御歸之由聞付候間、御暇乞と候て、種々酒肴持來也、深更まで酒宴也、一廿三日、看經等如恒、蓮香民部少輔處にて細工させ候、下候て見候、種々會尺也、終日慰候也、此日於都於郡遊行上人後代定被成候由也、光照寺、川原田道場、彼兩寺を藤澤こ被成由也、

十一日、申、甲近江多賀社神主某、物ヲ羽柴秀吉ニ贈ル、是日、秀吉、之ニ答

フ、

〔多賀社文書〕

○近江

爲當陣祈禱、牛玉、御簡、香水并兩種壹荷到來、寔遠路之懇情祝著候、此表之儀彌任存分候之條、可歸陣候間、期其節候、恐々謹言、

(天正十二年下四ツ)  
九月十一日

秀吉 (朱印)

多賀大社

大神主

筑前守

秀吉

多賀大社

神主

〔多賀社文書〕

○近江

秀吉へ爲御見廻、御祈禱之牛玉、御簡、香水并兩種一荷被進之通、遂披露候之處、遠路之御懇音、別而被成御祝著候、則以直書被申候、尙能々相心得可申入之由候、隨而拙身へ鳥目五十疋被懸御意候、誠御懇情之段令祝著候、此表之儀彌被任御存分候間、可御心安候、猶期後音候、恐々謹言、

大谷紀介

天正十二年九月十一日

大谷紀介

四三



天正十二年九月十一日

九月十一日

多賀大社

神主殿 □□□

五喜 (花押)

四四

○秀吉、多賀社ノ立木ヲ伐ラントシ、同社不動院ニ命ジテ、濫伐ヲ停止セシムルコト、二月十三日ノ條ニ見ユ、

佐々成政、前田利家ノ屬城能登末森ヲ圍ム、是日、利家及ビ其子利勝、利之之ニ赴援シ、成政ノ軍ヲ破ル、尋デ、成政、兵ヲ越中ニ收ム、

〔奥村氏所藏文書〕賀○加

此表一昨日如申上候、成政佐々内藏助去九日能州末守取卷候旨注進之條、戌刻ニ加州金澤打立、能州へ十一日曉、則責候所へ、不移時日切懸、鑓先にためすつき崩、藏助家中人數共之首注文付注進上候、其外數千餘討捕付而、藏助令撤軍、栗柄へ被罷退候と申候、但慥こハ聞不申候、其競を以、七尾ニ有之同名五郎兵へ、前田安勝中川清六、越中内境目之荒山城へ取懸責崩、城主之事ハ不及申、悉刎首候付而、勝山同前落居候條、越中國中へ付入候、追付雖可申候、自然御意をも不請、卒爾之働と被思召候てハいか、と存、不及是非金澤へ打入、人馬之いきをつかせ候間、御意次第ニ彼國へ亂入、藏助可刎首を案之内ニ御座候、以下筆寫ノ際省略セシナラン、ナホ、秀吉、利家、利勝父子ニ書ヲ與ヘテ、輕擧ヲ誠ムルコト、

九日成政  
末森城ヲ  
包圍ス

成政俱利  
加羅ニ退

前田安勝  
荒山勝山  
ヲ攻略ス

本月八日ノ  
條ニ見ユ、

九月十三日

羽柴秀吉  
筑州様人々

前田又左衛門尉

今度越中衆打死人名、大方注進之候、

佐々喜右衛門尉	野々村主水助
佐々新左衛門尉	齋藤九郎次郎
久世又兵衛	同 又介
堀田次郎右衛門尉	野入平右衛門尉
山下 <small>(正久)</small> 甚八	佐久間勘介
本庄市兵衛	佐久間源六

此外首千餘討捕之、大將分迄付進之候、

以上

九月十三日

〔松雲公採集遺編類纂〕

百四十四  
古文書部四十五

溝口(秀勝)金右衛門尉、村上(義明)次郎右衛門尉○寸錦雜錄、溝口、兩人方より惟越へノ字アリ、之注進狀、十

天正十二年九月十一日

四五

越中勢戦  
死者

山下正久

溝口秀勝  
村上義明



戰況ヲ惟  
住長秀ニ  
報ズ

秀吉下奈  
良宮後河  
田ノ岩ヲ  
修築ス

長秀ハ二  
十日頃歸  
陣ノ豫定

利家與村  
永福ノ末  
森籠城ノ  
功ヲ賞ス

天正十二年九月十一日

四六

六日○同上、西刻到來、令披見候、今度於末守被及合戰切崩、野々村主水初而數多被討捕、被  
得大利之由申越候、心知能御手柄無申計候、殊自七尾罷出、是又荒山、勝山乘取、首數多討捕  
之由、何之口も首尾揃、目出度珍重候、佐々内藏助栗柄山（谷良カ）北候由承候、定而右之栗柄（符カ）も、  
足を留事成間鋪と令推察候、然者此表尾州之内取出、下（谷良カ）なら（符カ）、宮後、桑田（河）、  
ニ作、三ヶ所普請丈夫申付、はや過半出來候、二三日中兵糧米○同上、玉藥以下并人數等四五  
千計○同上、コノ間宛入置、廿四五○同上、廿五日比六ニ作岐阜迄令開陣、敵之様子見合、可隨其旨條、  
上、可隨意候、於時宜者、可御心易候、越前守廿日比○同上、コノ間可為歸陣候、猶々被仰合、御本  
之條ニ作、於時宜者、可御心易候、越前守廿日比○同上、コノ間可為歸陣候、猶々被仰合、御本  
意待覺候、恐々謹言、

九月十六日

筑前守

秀吉判

前田又左衛門尉殿

御宿所

今度遂○武家事紀三十五所末守籠城、無異儀持定之段、無比類粉骨候、雖為少分、為加増、以押水  
之内千俵令扶助訖、全可知行者也、○同上、全以下六字ナク、并與仍如件、  
力之者三十人附與之トアリ、

天正十二

九月十六日

利家判

奥村助右衛門尉殿

按、一本（永福）こ所記載之寫如左、

今度遂末森籠城、令苦戰○加能越古文叢所收菅家見聞持定、無比類忠節令大慶候、雖為少分、為  
加増、以押水之内千石○同上、石ヲ令扶助畢、○同上、畢ヲ訖ニ作リ、次并與力之者三十人附與之、仍  
如件、  
俵ニ作

天正十二

九月十六日

利家（花押）

奥村助右衛門尉殿○奥村榮同氏所藏

利家感狀寫同ジ、

奥村正系譜云、利家公感永福防禦之功、即賜二公感狀及利家公之馬幟、（白繪畫）所御之甲冑  
太刀、腰刀、（並金紙）腰指、（裁裂）黃金七兩、（每鏡有梅）於永福、且加賜祿一千俵、又屬與力士三十人、其  
後告秀吉公敍爵、任伊豫守、且賜豊臣姓、

態令啓達候、仍今度者佐々内藏助當城取卷雖相攻、其方丈夫被相踏候付而、早速懸付得勝利  
遂本意之段、大慶此時候、誠無比類御働共、無是非候、利家御満足不及申候、其元彌普請等被

天正十二年九月十一日

四七

永福ニ鐘  
櫃ノ馬幟  
ヲ與フ



天正十二年九月十一日

四八

入念可被申付事肝要候、爰許無相替儀候間、可御心易候、雖不及申候、萬事御氣遣專一候、猶追而可申候、恐々謹言、

九月十七日

孫四

利勝判

奧村助右衛門尉殿

一本所記載之寫如左、○加能越古文叢四十所收  
菅家見聞集、殆ソド同シ、

態令啓達候、仍今度は佐々内藏介以多勢、末森之城不分晝夜取卷雖相攻、其方父子三人丈夫被相踏、依堅固、早速懸付得勝利、遂本意候段、大慶此時候、誠無比類御働故無是非候、利家御満足不及申候、其元彌普請等も被入念、可被申付事肝要候、爰元無相替儀候間、可御心易候、雖不及申候、萬事氣遣專一候、猶追而可申候、恐々謹言、

九月十七日

利勝判

奧村助右衛門尉殿

又一本所記載之寫如左、

態令啓達候、仍今度佐々内藏介以多勢末森之城取卷、不分晝夜雖攻戰、其方父子三人丈夫被相踏、因堅固、早速駈著遂一戰、得勝利達本望之段、甚快然之至候、恐々謹言、

前田孫四郎

利勝(花押)

九月十七日

奧村助右衛門尉殿

今度末守籠城無異儀特定之段、無比類働候、雖爲少分、爲加増以押水之内千俵令扶助訖、全可知行者也、仍如件、

天正十二

利家判

九月十六日

千秋主殿介殿

今度佐々内藏介當城取卷、雖相攻候、碎手堅固被相踏候付而、則懸付及一戰、即時切崩、得勝利之段、併各丈夫之覺悟故、早速遂本意、大慶此時候、無比類働共神妙之至候、利家御満足之事者不及申候、其地普請等彌入念可被申付事專一候、當表諸口何も無異儀候、是又可心易候、尙追而可申候、恐々謹言、

孫四

天正十二年九月十一日

四九

千秋範昌  
ノ戦功ヲ  
賞ス



天正十二年九月十一日

九月十九日

千秋主殿助殿

一本所記載之寫書尾如左、

九月十九日

千秋主殿助殿

按、作十九日恐非哉乎、

能州押水之内所々村付但山林竹木除之

一三町六反半五步

はり山加能越古文叢四十所收管家見聞集地名ナシ

此米百九拾俵壹斗六升貳合五勺

一廿七町貳反拾三步

敷波村同上、地名ナシ

此米寸錦雜錄、コノ間ハアリ百拾六俵三升貳合五勺

一三十七町六反同上、コノ次ニ大九十歩トアリ

宿村同上、宿ヲ有ニ作ル、加能越古文叢四十所收管家見聞集地名ナシ

此米千百三拾俵貳斗貳升五合

高桑兵衛

利家大敗  
イフ撤スト  
ヲシ秀吉兵

合貳千五拾六俵壹菅君榮名記、加能越古文叢四十所收管家見聞集、壹ヲ貳ニ作ル、斗貳升コノ合計誤アリト雖モ、便宜之ヲ註セズ

此内

千俵

奥村助右衛門尉

千俵

千秋主殿助

以上

五拾六俵貳寸錦雜錄、一ニ作ル、斗貳升餘有之、

天正十二

十月十一日

利家判

其表之有姿聞屈、致馳走こ付而、持傳候山之儀令扶助候、於向後こ、不可有相違者也、仍如件

天正十二年十一月六日

利家(花押)

高桑兵衛殿

〔土橋文書〕

〇常陸

就中北國之儀以外令蜂起、兩度之合戰味方得大利、前田失手候故、俄羽柴此表引取候、〇上下略、九月晦日、土橋種治宛、織田信雄書狀、全文ハ本月十七日ノ條ニ收ム、ナホ、秀吉、兵ヲ美濃ニ撤スルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、

天正十二年九月十一日



大將分討  
取入ヲ討

成政ノ兵  
二千餘戰  
死ス

利家出陣  
ニ際シ小  
切手ノ繩ヲ

前田利久  
金澤ニ留  
守ス

篠原勘六  
横根ヲ煩  
テヘ下モ陣  
出陣ス

惟住長秀  
小松ノ村  
上義明ヲ  
金澤ニ派  
遣ス  
前田秀繼  
出陣ヲ止  
ム  
利家博士  
ヲ召シ出  
陣ノ時ヲ  
問フ

天正十二年九月十一日

〔多聞院日記〕三十一 九月廿二日、

一去十一日ニ越中ノ佐々内藏介ト前田又左衛門及合戰、越中ノ衆敗軍了、十三人大將分首取  
注文寫被下了、

五二

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山城 一○中略、秀吉、尾張ニ岩ヲ築クコト、越中佐々内藏助敵ニナ  
ル、則前田又左衛門ト大合戰アリ、九月九日ト十一日、十二日ニ合戰アリ、佐々打負、ヨキ

軍兵十人餘、雜兵數輩討死、二千計ト云、又佐内藏キリカヘシ、クリカラノウヘニ陣取、加  
州河北郡令放火云々、説々不同也、○下略

〔陳善錄〕

天正十年

一同九月十一日、能州末森へ佐々内藏介被出時、奥村助右衛門、千秋主殿助、土井

伊與注進金澤へ申上られ候へ、利家様、利長様御出陣被成、御具足めし候時、こて之なわ  
を御きり被成候由、討死と御究被成候、御うへ様へ被仰置、篠原勘六よこね煩被申候、御  
意之通勤六申上分、御先手ハ不波彦三、（殿下同シ）村井又兵衛、（ふんご事）多野村三郎四郎、片山内膳、岡嶋帶刀  
などにて、段々こそなへ候也、金澤御留守居前田藏人殿其比ハ御中なあり、利家様ヲ御頼  
御出候ゆへ、じゆんじゆく被成候故、御名を御隱居と申、魚住隼人、篠原彌介かれら御留  
守、篠原勘六もよこね煩候間、御留守仕候へと被仰候へ共、耳こも不聞入、御請不申上被罷  
出候よしにて候、金澤町まで、小松こ被居候村上坊（多聞院防）なとヲ、越前守殿ヲ被越おかれ候は

ずのよし候、扱津波田（殿下同シ）まで、いそぎ御父子様御出被成候由、つはたにて、右近殿、寺西宗

與など、はや末森ハ落去仕事可有御座候、これにて御待請候て可然由被申上候、利家様御  
若キ時ヨリ之御武篇、御威言終内藏介こ一度もこされたる事なし、奥村助右衛門、千秋主  
殿介、土井なとも、其外歴々ヲすてころし、命有てなにかせんと、異見を御用なく候、其  
時右近殿、宗與など内談にて、はかせ之上手御座候間、時取おも御見せ候て可然由、被申上  
候由、其時村井豊後（長頼）を一間所へ御呼候て、とかく合戦と思か如何候と御意ノ時、御尤奉存  
候、一合戰被成、手間も不入、越中人數追崩可申候由申上候へハ、利家様御心いさきよく本  
ノ御座敷へ御座候て、各はかせヲ見せ候様こと被申候間、其もの呼出候へと御意ノ時、彼  
はかせ罷出ル、利家様、博士ハ、われかと御意候へハ、畏て御座候と申時、懐物之本を取出  
ヲ御らん被成、菟角又左衛門ハ、後まきするそみよと、怒聲こ被仰候へハ、はかせ物之本ヲ  
ふところへあし入、時分も星もよき時こ御座候、はやくと御氣色ヲみて申上候へハ、利  
家ノ扱も上手ノはかせかな、頓而大利を得て、御ほうみ可有と打立たまふヲ、上下名大將  
かなとほめぬ者なしと申候由、いづれも年寄衆物かたり候、大納言様度々御物語承候  
事、

一利長様も右近殿、宗與こいわされ、御後卷被成儀如何候と御弓斷被成候時、右之仕合ゆへ、

天正十二年九月十一日

五三



津波田を御出之時ハ、御あわて候て、利長様御馬驗ハ横山三郎持て、町口まで被出候を、皆人ほめ申候由、物語共有之、○利家語、末森近クにて利家公御多いか、以下ナシ

一つはたにていづれも弓斷候故、弓衆なともつるヲはつし有之時、右之仕合、俄に利家様御出馬被成、町口にて殊外御いかり候へハ、大塩大海と申御弓衆弓を雲ばりて仕候事、後まても利家様被仰出候事、

一川尻にて利家様御馬をのり廻、御らん被成、御人數二千五百ほとならてハつゝ、いて不參候、もはや合戦勝候とおほしめし候由、後まで御物語被成候、其ゆへハ、有時淺野左京殿、加藤主計殿(清正)其時之儀御とい候へハ、夜中之人數これまで付したかいたる人數なれハ、死きりたる人數候間、敵三万こハむかふへシと御意候へハ、御兩人御尤くと御かんし被成候事、

一末森大手右之ことく先手大將共かけ向、はや豊後内間野新丞、吉川平太、江見藤十郎、小林彌六左衛門、大くほ小々郎(五七)、屋後太右衛門など首ヲ取來る、其時道二すし有、一筋ハ内藏介陳取つほい山へ也、そこにて村井豊後乗向、利家様へつほい山へ仕かけ一合戦可仕由申上候へハ、内藏介もさすか之もの候間、陳所よく見と、け居可申候間、末森へ懸レト御意候、重而豊後申上ハ、本陳へ懸り候ハ、内藏介を打事可有御座候と申上候へハ、利家

川尻ニテ  
利家ニ隨  
フモノニ  
千五百人

成政坪井  
山ニ陣ス  
利家末森  
ニ向フ

徳山秀現

長連龍能  
登ヨリ來  
授ス

様御いかり候て、おれ(之)下知次第仕候へ由御意、任御意時、首共ヲ御らん候て、一番首ノミやう有、今日之合戦ハ勝利を得候よし御意之由、少もちかい不申候由候、扱大手口越中先懸物頭佐々與左衛門などト、豊後守自身つきあいつきくずし手柄之段、後々まで大納言様御物語候、さてからめてハ、利家様御馬廻山崎彦右衛門、野村傳兵へ鑓合申候、半田半兵へハ一番立候へ共、鐵砲(砲)にて打ぬかれ候ゆへ、鑓ハあい不申候へ共、後まても鑓場一番立候事を御意候て、御知行も三人之内にてハ、千石つゝハ多被下候、扱御小性(姓)篠原勘六、北村三左衛門、富田六左衛門など鑓下ノ高名之由候事、其外名ちかいも有之、物語共も御座候事、其時徳山五兵(秀現)へ大納言様御跡被參候、利家様首を取參申候もの共、七八人手柄ヲいたし候由、御ことはを御かけ候へハ、御息され可被成候間、今ハ御らん被成候て計御座候て可然候哉と被申上候由、以來まで、一段申候由、御意候事、

一末森利家様大利ヲ得被成候後、長九郎左衛門能登方人數出み候時、敵か味方かと物見ヲ被遣候へハ、其時長九郎左被申分、七尾ヲ長九被出時被申分、利家様末森にて御意之通、色々物語有之事、

一末森城奥村助右衛門、千秋主殿助、其外よくもちかため候儀、土井伊與十もんじ鑓ヲ持候て、卅人計めしつれ、利家様頓而御後まで可被成候、町をてきこやふらせてハ無念と、門ヲ



明切て出、四方つき立討死候由、これも色々物語有之、大納言様御物語共おし出し被成候、これこへ書付不申、土井伊與と云者土井但馬守申、利家様御めいひこ土井左京か父なり、但馬遠行之後、左京ハ二つ也、即但馬家長して、其比ハ未後家こ付候て、末森こおかせられ候由 色々御物語有之、

一内藏介合戦こ負のかれ候時、御人數御付可被成と、つもり御らん候へハ、きこいつき、はや利家様御人數八千ほとこみへ申候由、御物語候、其時又村井豊後、不波彦三こ先手ヲ被仰付、御つけ可有と御意、兩人なから忝と御請ヲ申上候へ共、路次此方ハ出場ハ節所ゆへ、利家様御乘廻御らん候て、御付なく候由、其時鳥越こ被居候目賀田又右衛門、丹羽源十郎兩人なから、聞おちこ城を開退候へハ、内藏介よろこひ、鳥越へハ入申候由、これおも度々御咄被爲成、兩人をにくく、おほしめし候事御意候、左様こハ御存なく、もし内藏介金澤ノ城へたれも有間布と心かけ候てハトおほしめされ、跡ヲしたいかけにつばたまで御馬ヲ入させられ、それにて鳥越之事も被聞召、其時おし返へし一戦可被成由、御いらち候へ共、家老衆今日之御手柄日本無双御座候間、まづ御馬ヲ被入可然由被申上付て、其通こ被成候由、御物語御座候事、

一其後瀧川左近殿越前こ罕入して御入候を、昔はうはい衆別而之人越中か上被申候刻、右之

利家成政  
ヲ追撃セ  
ズ鳥越ノ  
將等城ヲ  
開キテ退

瀧川一益  
成政ヲ評

末森之様子、一々かたり被申候へハ、瀧川殿御申候ハ、又左、内藏介武篇ハ、又左ハ數ハ多候、然共人數立合ハ同事こ存候へハ、今度之仕合もはや、以來も聞ておかれ候へ、内藏介成間布、いよく越度取可申候と被申候由、果ノ其ことく也、其道ノ上手之申事ハあい申もの也と、色々さんだん御座候、京伏見にて、これハ徳山五兵へ、寺西宗與其外年寄衆物かたり候事、○利家夜話同ジ、

〔微妙公御直言〕

○加賀能登郷土圖書叢刊二十  
所收微妙公御直言之御意覺書

一或時末森後卷之儀、左門、久越ハ御咄被遊候、

我等親ながらも大納言殿出來合戦に而候、佐々内藏助は天下之望有之候に付、人數も知行高より過分に被致所持候、惣而侍は他國ハ之聞え有之事に候間、免を少分に而も、知行高多聞え候が宜候由被申候、末森ハ取懸候人數貳萬有之候、内藏助人數を出、先手を以攻候段、金澤ハ相知候は、晝之入つ時過に而候處、大納言殿早出馬可有之旨に而、齒がみをして急がれ候、利長には松任に被居候、是は猶以急がれ候得共、早利家出馬とは、三里之道違候故、餘程遅候付而、殊之外急がれ、津幡に而軍評議して、段々次第を立被押出候、此方之人數に合候得ば、内藏助は大軍に而候、此度之合戦に生て可歸と存ものは無之、討死々々と覺悟仕者共に候故、勢は格別強體に而候、其上利家金澤出馬之時分、今日を限と被存極、わらんじの緒をかな結にして、餘處を小刀に而切、二度はき直し不申と獨言を被申出候、其

成政天下  
ノ望アリ

利家草鞋  
ノ緒ヲ金  
結リシテ  
残リテ切



成政虚ヲ  
軍カレ敗  
衝カレ敗  
ヲ甲ノ忍緒  
ヲ金結ニ  
切テ殘ヲ  
シハル誤ナ  
切ハル誤ナ  
傳ハル誤ナ

時芳春院殿の暇乞として、勝手之方被參候得ば、芳春院殿三方に米と鯉をのせ被持出候處、利家米を(無効)抓見被申得ば、黒米故、勝而喰と被申、綿嚙(無効)の入、城を被出候時分は、未先手も揃不申、跡より段々に先細繰出し、津幡に而利長をも被待合、先手を揃、合戦之評定有之時、兎角今日を限討死と極候由被申候へば、先手之者共何も一度に御尤と申候、夫に而事濟候由被申、早出馬に而候、跡より追付申者共も有之由、御咄被遊候、利家いかなれ加様に早出馬有之間敷と、内藏助油斷之處、急に取懸、一合戦有之候に付而、佐々先手敗軍に而、此方之勝に罷成候、佐々も山之上に備を立被罷在候得共、最早可仕様無之、此方よりも山に取懸候ば、大事之儀故、此方にも備を立見合被申候内、佐々は段々人數を引揚被申候由、御咄に而御座候、此儀は岡田將監殿にも御咄被遊候處、御意之通り御出來合戦に而、氣味之能事に御座候旨被申上候、世間に而は御甲之忍緒をかな結に被成、餘處を御小刀に而御切被遊候旨申慣候得共、右之通御意には、御わらんじの緒と慥に御意被遊候を奉承候、

〔奥村因幡守覺書〕

○加能越古文  
叢四十所收

去二日之御飛札、同十日相届令拜見候、然は末森之後卷越(加能)中鳥越に而御働之様子、存知承及候義於有之、具こ可申上旨奉得其意候、併久敷義御座候へ、失念仕候得共、大形覺之通書付致進上候、

成政寶達  
山押水達  
兵ヲ出スニ  
永福小丸  
ニ引取ル

末森ハモ  
ト土肥但  
馬ノ城伊  
但馬ノ家  
老土肥伊  
豫出ノシ  
テ死ス

末森城ノ  
守兵

隠矢來

一天正十二年九月九日、佐々内藏助能州寶達山に同押水に人數を出し、在々令放火候事、  
一快心(水筒)ハ町をかへ申度存、町口迄罷出候處に、敵押詰參申こ付て、小丸引取申候、其刻快心家來野瀬次郎右衛門、三輪勘左衛門、同彌藏其外馬印持新四郎と申者杯、二三度返合ささへ申こ付、快心も心易く小丸へ引取申候事、  
一末守ハ土肥但馬城に而御座候、但馬柳ヶ瀬に而討死仕、其跡を快心に被下、但馬家老土肥伊豫と申者貳千石被下、快心に被爲付置候、此者快心に付申義、内々迷惑に存候歟、ねりこ  
と申、末森を半道程御座候所に罷出候處、敵に被取込、吉田口こけか丸と申門際を而、上下七八十人程討死仕候事、

一同十日、末守へ押寄攻申刻、城中に而働申者ハ、英賢様御馬廻前波三四郎、三輪助右衛門、高崎次兵衛、并快心者之三輪勘左衛門、同彌藏、寺尾甚内、馬印持新四郎、其外鐵炮之者、澁谷、金子など、申者ハ鐵炮を能打、小丸、大手之門脇に而防申候處、屏(併下同シ)を一問四方程打破り、込込出しセリ合、右之者共能働キ申候、寺尾甚内、馬印持ハ其場を而討死仕候事、  
一末守之城門隱やらいの上を、戸をあらし不申引取申こ付而、敵付込迷惑仕候處、快心者と野崎孫助、同與左衛門鑓を取罷出、突懸り候へ、敵崩レ申こ付て、安々とあけす戸をあろし、引取申候事、



一高野瀬左近と申者、其頃古キ者こ而御座候故、走り廻り籠城之下知をも仕候、大西金右衛門儀も、大手之門左之脇屏之上に而、股○股、前田氏戦記集所収、奥村傳書ニ據リテ補フ、を鐵炮にうたれ、夫より不罷出候事、

千秋主殿  
ハ越前ノ  
者

一千秋主殿と申仁も、末守こ被爲置候、是ハ前々二之丸迄渡置候得共、越前之者にて内藏助家中こ知音多、敵方も言葉懸なと仕こ付而、快心申候ハ、其方二之丸こ被居候義、敵方こ存知、言葉をも懸候條、本丸へ入可被申旨申渡、二之丸へハ快心弟奥村加兵衛と申者入替置申候事、

一右之通末守之城内藏助取巻攻申儀、金澤へ相聞へ、大納言様御父子様九月十日、津幡迄被爲成御出陣、彼地こ而御家老中被召出、御評議被成候處こ、上方勢を御待可被成旨申上候衆も御座候、又津幡末守ハ早馬を被遣、一左右をも可被聞召旨申上候衆も御座候へとも、大納言様とかく末守こ而御討死と被思召之由、被相極候旨被仰出候處、徳山五兵衛御尤こ奉存候、御供可仕旨、丈夫こ御請申上、十日之暮程こ則御立被成、夜之明方こ末守こ御著陣、濱之手ハ御人數參り候を、城中こハ利家様とハ見付不申候處こ、片山伊賀、岡嶋備中者杯末守之町こ而相働キ、首を取申こ付而、大納言様と奉存候事、

一大手口へハ片山伊賀守、岡嶋備中守其外物頭之面々被仰付、押寄申候事、

一番鑓ノ  
評定

一大納言様御旗本ハ、馬上四五騎こ而御出被成、御見合候而はま方上り申、中道之尾筋、佐々新左衛門、野々村主水、堀田次右衛門、櫻勘介攻口へ御懸り被成候事、

一鑓合申刻之儀、山崎彦右衛門二三間程先へ罷出、少堀切之御座候こ伏在之處こ、野村傳兵衛と名乗罷出候を見付、重而此兩人鑓とたんこ入申由こ御座候、其後利家様御前こ而、彦右衛門申ハ、私先こ而御座候得共、少伏罷在候處こ、傳兵衛參り候を見付 罷立申候間、傳兵衛鑓先こ而可有御座旨申上候 又傳兵衛ハ、尤名のり罷出候へ共、彦右衛門義ハ、二三間も先こ罷在候間、彦右衛門鑓さきこ而可有御座由申上候こ付 大納言様被聞召、とかく兩人共こ壹番鑓と御批判こ御座候、則其首を富田越後守取申候、櫻勘介首之由こ御座候、是も鑓ハ先ハ不罷出候而ハ、首を取申義成間敷候條、一番鑓同前之旨御意御座候、其外彌市郎と名のり、鑓場へ罷出候、此彌市郎義こ付而、御穿鑿御座候、奥村彌市郎と申者、御前こ而廣言を申罷在候間、奥村彌市郎こ而可有御座旨、御掟御座候か、又御馬廻こ小泉彌市郎と申者御座候、是こ而可有御座かと、脇こ而取沙汰仕候、其後小泉彌一郎こも御加増少シ被下候事、

一半田半兵衛ハ、鑓場ハ一町計前かと小鐵炮こ打レ申候、北村三左衛門義、鑓場へは少遅ク御座候得共、其時之働殘所無御座候旨、利家様御前こ而取沙汰御座候、其後あまた參り候



天正十二年九月十一日

六二

由こ候へ共、入亂打込合戦こ罷成候故、別而名之出候程之義こ而ハ無御座候、其節前田(利秀)又次郎殿も少手を負被成候事、

一鳥越之義、末守之御合戦こ被爲得勝利、金澤へ御歸城之後、内藏助此方へ手をいたし候條、越中へ御働可被成旨こ而、越中蓮沼山尾崎迄御人數被爲押出候而、かろき者共こ、方々放火被仰付、此人數御引取被成候刻、鳥越ハ内藏助馬廻伊野權兵衛、松本伯耆など罷出候處、鷺津九藏一番こ罷出、山之尾かたこ而鑓合、討死仕候處こ、敵引退申を、山崎長門追懸、鑓を合申候、其後横山因幡、同山城なども、鑓合申由こ御座候、御家之九里少藏、杉江左衛門と申者を組討こ仕、杉江を討取申候、其外御歩衆之内細井彌左衛門、山下九左衛門など能働キ申由及承候、此外別こ相替儀も承り不申候事、右私覺之通有増書付致進上候、可然様可被仰上候、以上、

九月十二日

奧村因幡守判(鳥英)

今枝民部殿(近善)

〔奧村傳書〕

○前田氏戰  
記集所收

○上略、本書ハ二通ノ奧村因幡守覺書ヨリ成ル、前ノ一通ハ前掲加能越古文叢四十所收奧村因幡守覺書ニ同ジ、後ノ一通ノ内初メノ三ヶ條ハ、神保氏張、能登ヲ侵スコト及ビ利家鳥越ヲ攻ムルコトニカ、ル、本月十四日及ビ十三年四月八日ノ條ニ收ム、

一佐々内藏助と御取合之刻、加州より能州迄境目〱に御取出之由、津幡には右近様被成御座候御事、

一俱利迦羅にも取出を可被仰付由御座候得ども、内藏助方より早く取出仕に付、加州松根と申所を取出に被仰付、青山佐渡守、村井豊後守被爲入置候御事、

一鳥越之城御拵被成、目加田又右衛門、丹羽源十郎、古澤又右衛門被入置候御事、

一大納言様末守ハ御出陣之御跡に、鳥越をあけ、金澤へ罷越申候、然處に佐々内藏助末森にて打負引取申刻、鳥越明城にて有之に付、競ひ其儘入城仕候御事、

一加州指江之後鉢伏と申所には、湯原八丞を被爲置候御事、

一其後能州羽喰郡(中)に城御拵被爲成、高島石見守被遣候へども、普請首尾不仕候こ付而、末守御一戰之砌は、同國七尾ハ罷越候事、

一能州勝山にも長九郎左衛門被爲置候、是も末守之時分七尾へ引取申候御事、

一先度申上度候得共、私母之儀に御座候得ば遠慮仕候、末守籠城に罷成、長刀之鞘をはづし、堀裏を懸廻、酒をにかつし、夫にて強飯をいたさせ、能働申者には爲給、城中下知仕候、其後爲御褒美、從大納言様代物千疋、芳春院様綿二十把致拜領候、母常々被申候は、主の手より強飯を給申者は、能働之者にて可有旨、物語仕候御事、

天正十二年九月十一日

六三



天正十二年九月十一日

六四

右佐々内藏助と御取合之刻之儀、大形存覺申通書付進上申候、御次而を以、可然様可被仰上候、恐惶謹言、

十月二十二日

今枝民部殿

〔國初遺文〕(原) 横山山城守覺書

覺

成政ノ本陣

本多正重

横山長知  
利長ニ近侍ス

一末守之城御後卷被爲成、大納言様、利長様彼城に被成御移候處に、佐々内藏助本陣坪山○加能越古文叢四十所收横山山城守高名書、坪井山ニ作ル、より馬廻三千計にて、御父子様被成御通候御跡より、末守之城下迄押詰、返攻可仕躰に相見候故、大納言様は末守之本丸に被爲入、利長様は二の丸に被成御座候、其砌本多三彌御家中に被居候故、利長様御近所を被召寄、内藏助旗本退口之御行御談合被遊候、其時拙者は利長様御鐵炮頭上坂又兵衛、稻垣與右衛門など有之候御先手の罷越有之候處、從利長様御近所を罷越可有之旨、度々御使を被下候に付而、二の丸迄罷越、御傍に罷在候故、申立に可仕働も無御座、于今無本意存候事、

一末守之城御後卷に付、大納言様御裁許奇妙の御事に御座候、其比御家に歴々有之中にも、多那村三郎四郎、不破彦三、徳山五兵衛其外小身なる者にも功名數多有之、御後卷の御評

議御座候處に、何も申分は、第一末森より二里此方つぼ山に佐々内藏助本陣を居有之處に、小勢を以て一騎がけに御通り被成候事、第二には濱邊を無恙御通り被成候ても、大敵をあとに御置被成、敵の先手の人數と御合戦に及申刻、先手の勢少しの間支へ候て、内藏助ひつ付可申候、然ば大事の義と、達而御異見申上候へ共、無御承知、とかく津幡まで御出馬被成、あれにて御談合可被成旨被仰出、御發足被成候、扱津幡にても右の通り御異見申上、其上末森に火の手舉り申を金澤にて見申候、然ば末森は可爲落城候條、物見を被遣候か、不然ば今少し御聞合御尤の旨申上候處に、利家様御意に、津幡より末森の道のりは何程あると御尋被成候へば、四里御座候と申上候、又御意に、金澤より當地へも四里なれば、落城に於ては此邊へ落人可有之、然ども一人も無之間、城は堅固必定に候、何とぞ被成、明日未明に末森へ御押詰候而、敵思ひもかけざる所へどつと御かゝり候はゞ、何の手間も入間敷候、猶豫候而落城候はゞ、敵丈夫に城を築き、人數籠置候においては、能州は敵國に成候間、片時も急可申旨にて、利家様、利長様御兩人乘廻し、御下知被成、夜のほのく明に末森へ御著陣あると等しく、内藏助人數出し、目近に相見え申に付、御父子様さいはいを御振被成、かゝれと御下知にて、何の造作なく敵追拂、城へ御取込被成候、内藏助急にひつ付申故、遅參者濱邊と城との間の道を取さられ、討死の者拾人計も有之と覺申候、

天正十二年九月十一日

六五

末森落城  
セバ能登  
ハ敵國ト  
ナラント



天正十二年九月十一日

六六

德山五兵衛弟源七、近藤善右衛門弟印齋、堀喜市郎討死仕候、此外の者致失念候、思ひ出次第可申上候、

鍵合ハナ  
シトイフ

一末森へ御先がけの内、富田越後、山崎彦右衛門、半田半兵衛、野村傳兵衛、北村三左衛門、此五人早々著候へ共、敵支へ不申故、慥に鍵合申沙汰は不承候、拂退の鍵などは可有之候哉、人々働の申分有之と聞え候得共、其場の御穿鑿無御座候に付、勝劣知不申候、五人内半田半兵衛別而氣合能相見え申由承及候、其刻鐵炮手負申候、

一内藏助人數引取申刻、本多三彌申候は、三百私に御付被成候へ、付可申旨利長様へ申上候へ共、御父子様共に御承引不被成候、

一内藏助末森の山下まで押寄候へ共、本丸に利家様、二の丸に利長様御籠被成、御人數賦能御座候故、歸攻も成不申引取申候、

本丸ノ門  
モ燒落ツ

一末森は惣がはも、二の丸も乗取、本丸の門も燒落申に付、俵を以てふせぎ持こたへ申候、

惟住長秀  
ノ援軍ハ  
津幡ニ殘  
ス

一丹羽五郎左衛門殿より爲加勢、人數二三千被指越候へ共、其勢末森へは不被召連、一揆爲御用心、津幡に御殘し被成候、

一内藏助人數加州へ押申候に付、利家様の御意に、敵定て金澤へ働可申候、末森の合戦に勝申候に付、金澤へ働き申と城中に可存候、慥成御城代も無之、御人數は不殘末森へ被召連

利家急ギ  
金澤ニ歸  
城ス

候へば、明城同前に候、内藏助才覺者候間、計策申候は、無左右城を渡し可申候條、金澤へ働候は、迹へ御付候而可及御合戦候か、不然ば濱邊筋を金澤へ御入城可被成候かと御評議あつて、御入城可然に相究り、濱邊を夜通に金澤へ被爲入候、然れども内藏助越中へ人數を入申候、其節鳥越の城には、目加田又右衛門、丹羽源太郎を被爲置候處に、末森落居と推量仕明退申に付、内藏助ひろひ取に取候而、人數を入置申候、目加田又右衛門は多那村三郎四郎兄にて御座候、

一御父子様金澤御入城の翌日、津幡まで御馬を出され、鳥越へ物見を被遣、様子被聞合届候而、金澤へ御馬入申候、

〔加能越古文叢〕

四十

一求舊紀談

一名長知軍談

山城守物語ニ云、

○以下數箇條略ス

一大納言様ト内藏助トノ御間御拵トノ、常眞様ヨリ瀧川三郎兵衛、矢田半右衛門兩使參候、

津幡ヨリ御歸城ノ剋、大樋ニテ御目見仕、口上ノ旨申上越中へ通り申候、末森ニテ被爲得

大利候而、右兩使と御對面、氣味能義ト何も申候、

下略

右求舊紀談古本ハ、前田家の祕本にて、五世參議從三位綱紀卿の親筆奥書こ、此書往昔依家君陽廣公之仰、澤田忠右衛門尉尋聞横山山城守而書記之、就脇田九兵衛尉所進呈之者也、今

天正十二年九月十一日

六七

求舊紀談



茲寛文壬子(十二年)、使奥村庸禮求此書於彼家之所、嗣子摸亡父親筆之本、達之庸禮、々々復請彼親筆之書、不得固辭、乃就庸禮獻呈之、因還投寫本留此本云、

〔太閤記〕<sup>四</sup> 前田又左衛門尉利家末森之城後攻之事

○上略、奥村永福、末森城ヲ守ルコトニカ、ル、十一年五月十一日ノ條ニ牧ム、かゝる處に、佐々内藏助成政、前尾張守護北畠中將信雄卿に與し、既對羽柴筑前守秀吉卿敵の色を立、一萬五千之勢を卒し、末森之城に押寄しかハ、奥村諸卒を下知し、町口へ打出、ささへ見んとせし處に、寄手よハアヒシテと會釋ひ、付入の行に及んとするけしきを見、助右衛門其道意得たる者なれハ、敵のよはきふりを見するハ方便にて有へし、唯引取や者共とて、町をも自焼し引入しかハ、案のことく敵すきまをあらせず引付て込入來りけるに、つゝら木戸にして、三好勘左衛門尉、野瀬二郎右衛門尉歸し合せ、鑓を以た、き立、追歸し鑓下にて二人討捕けり、助右衛門三之丸之外へ打出、多勢なる敵にさやうにしたりくハせぬ物ぞ、かるく引取や者共と下知しけれハ、さすか物なれたる兵共なれハ、意得たると云よりはやく引入にけり、いかハしたりけん、三之丸外構の揚簀戸ををろさす引しかハ、敵得たりかしこしと引付て來りしを、野崎孫介、同與左衛門兄弟面もふらす引返し、鑓を合せぬいゝ聲を上戦しか、終にたたき立、大敵を追出しあけすとを引立、しつゝと歸りしは、あつはれ弓矢取ての面目、此上有へからすとて感しあへりき、風少しなをりけれハ、

永福町屋  
ヲ燒キテ  
籠城ス

成政ノ兵  
三ノ丸ニ  
侵入ス  
野崎孫介  
等之ヲ驅  
逐ス

永福ノ妻  
福卒ヲ激  
勵ス

二之丸に近き家共を、高野瀬左近、大西金右衛門尉罷出燒拂ひし故、火矢のみの用心専なり、敵凱歌を唱へ、きりりと取廻し、稻麻竹葦のことく取巻、持楯搔楯つきよせ、螺鐘を鳴し、鐵炮の音矢叫の聲、寔百千の雷も唯一度に鳴落る計に、喚叫てそ攻たりける、去共助右衛門尉中、事共せず、士卒の機を勵し、堅固にこそハ抱へけれ、佐々仕寄之町場見廻とし來りつゝ、此勢ハつかれたるぞ、佐々平左衛門か勢入代り、一揉もめや者共と下知しければ、平左衛門入代て、一揉二揉捫て攻入んとすれば、奥村兵を左右に隨へ、つきくつろけ、てハ引て入、靜り反て守りけり、藁科新介、三輪勘左衛門尉、同彌十郎、野崎新六、高崎次兵衛、前波三四郎、白井四郎右衛門尉等粉骨を盡し、義氣を勵し、防戦ひ侍りしかハ、彌攻あくんで見えけり、奥村か妻つねハ心もいとしつかに、萬の事に物おそれをし、青柳の糸をも欺計につよからぬ女姓(世)なるか、信長公の御母堂の事聞つる事ありとて、かひくしき女房二三人相ともなひ、長刀をよこたへ、よるひるのさかひを分す城を打廻り、戦つかれ眠りかちなる番衆をハ、事外にいかり禁め、或ハをたやかにも睡をさまし、或ハゆるかせもなく番をつとめぬる所をハ、假名實名をしるし付、さそくたひれさふらふらめ、やかて金澤より後巻なさるへきとの事にてあはしますなと云慰め、或時ハ粥を大器に入持せつゝ、所勞のほとをかんし、或時ハ夜寒の袖の露をはらんかため、紅葉を燒、酒をあたゝめ、塀うらの睡をさましけれ



ハ、悦あへりつゝ、昔の巴、山吹、閑の前などハ、一旦の勇こそあらめ、かく籠城になれもやし給ふやうにおへしますよとて、城中の人々此義に恥つゝ、義を思ふ事日々新にして、夜々に深し、寔金石をも欺く計に諸卒の心一致し、たのもしうそ見えたりける、助右衛門尉、助十郎、又十郎かはるゝ能者共あまた召具し、四方を打廻り、各つかれざるやうにしけれハ、皆々請取の町場を墓所と定へしと、音もせず静り返り守りしかハ、敵も攻あくみ、謀計を廻し、城内を引わりみると、千秋主殿助か所へ扱をそ掛たりける、此人生國越前之者、利家府中を領せし初よりの舊功なるに因て、一方の物かしらとし、東の丸を預け置しなり、敵方に親しき因みあまたあれハ、扱を入、是非々々心を變し、内藏助に對し忠節をいたせよかし、左もあらハ、能州之内二郡并黄金千兩可被致恩賜そ、於同心者、聊不可有相違之起請文を被相越候へとの事也、千秋思やうハ、今五三日も經なハ、糧絶、矢種盡、唯首をひろはれん事一定の事たるへし、此義に同してんやと、身ちかき者共に相議しけれハ、皆尤なるへしと同しけり、さらハ本丸に至て、此旨助右衛門尉へとくと談合し、若同心にあらずハ、ともかくも計りみると、我にかへらぬ者四五人めし具し、本丸之門を扣ハ、入給へとて、千秋一人計そ入たりける、南角の櫓にて千秋ひそかにかくとさゝやきけれハ、中々請も付す、唯千秋を東丸へ歸しなハあしかりなんとて、即此櫓に留めをき、きひしく番を付置、東丸へハ助右衛門か弟奥村

成政千秋  
範昌ニ  
キ内應セ  
スシメント

範昌永福  
ヲ説ク  
永福範昌  
ヲ本丸ニ  
幽ス

加兵衛尉を入替てけり、城中の人皆此事を聞、扱も古今に絶なる忠臣なるへし、武勇と云、無慾と云、すゝしくもみえつる物なりと感しあへりつゝ、死を輕んし、義を重んし戦しかハ、責敗らるへくハなかりけり、去共俄なる籠城に依て、兵糧もなく、水の蓄ももしけれハ、萬之不如意事極りぬ、二之丸の門櫓も、近き比の作事にて、全備なき事を敵方に能知、扉を推破、既押入んとせしを、本丸より勇士共助來て、鑓長刀にてつき出しけり、然といへ共、多勢を以入替ゝ、爰を揉やゝと喚叫て攻けれハ不叶し、そこをハ引て、一の門を固め、爰を枕にし快く討死せんより外はなきと、互に思ひ入防き戦けり、此旨金澤へしき波を打せ告度ハ思ひ侍れ共、幾重共なく圍みしかハ、あハれ隱形の法もかなと希ひ、誰か忍ひ出、此急難を救ひ見ぬかと、助右衛門尉申ける處に、久々つかへ侍りし者進出、某忍ひ出、金澤へ參りみると申けれハ、うれしくも云つる物かな、さらハ參て、此旨委く申上候へ、とかく後卷をいそぎし給ひ候へ、はや兵糧ともしく、諸卒つかれてみえ申候、たとひ千死一生に極りたり共、扱などに取結ひ、渡す事は中々候ましき旨をたしかに申候へ、汝事ハ利家よく御存知之事なれハ、書狀までもなし、事故なく歸候へとて、盃を取かハし出しけり、案内を知たる事なれハ、難なく忍ひ出、十日の晩金澤に參著し、件之旨かくと申上けれハ、けに助右衛門か所存左も有ぬへしと、利家たのもしく思ハれ、後卷有へしとひしめき給ふ事急なり、かゝる時のくせとし



天正十二年九月十一日

七二

て、浮説まち／＼なる物なれハ、はや／＼扱にし、城ハ渡しつると云募れとも止ハせず、利家被申けるハ、奥村事尾州荒子の城を、信長公御朱印をも用ゐず、渡さ／＼りし者なれハ、城を持遂る事ならずし、(て脱力)假然切腹に及事ハ有共、扱に致し渡す者にてハなきを、唯急き後詰をせんとして、嫡子肥前守諸共ニ物具取て著給ヘハ、簾中御心に思召事もや有けん、熨斗咆擣栗など取すへ、手つからあた／＼め、酒を持出、門出を祝ひ給ふ内にも、なこりおしけなる氣ハ見えなから、門出をいはふことの葉露よハからず、さすか弓取のつまに備り給ふししかたと覺え侍る、前田又次郎利家ハ、利家在京などの時ハ、城を預り居侍りける人なるか、留主にハ別人を御置候へ、某も御供申候はんと望けれハ、いみしくも云つる物かなとて召連けり、又丹羽五郎左衛門尉長秀より村上次郎右衛門尉、溝口金右衛門尉其勢三千餘加勢として參、即可致參陣旨達て望み侍れ共、いや／＼當地に在て一揆等不起やうに頼入なりと殘しをかれ、利家、利長も十死一生に究め給ふ氣象見えし驗にハ、具足の上帶丁としめ、あまる所を小刀して切てすて、立出給ひけれハ、伴ひ出る人／＼までも、思ひ切てそ見えたりける、天正十二年九月十一日戌之刻金澤を打出諸鎧を合せ急けるに、津幡の町にして鐵炮の音聞えしかハ、扱こそいまた落去ハせさりけるよと、とつときほひつ、利家左右をかへり見、誰々早く來り何れかおそかりし事をも記さんかため、又ハ勢の多少を知んかため、著到を付させ給ふ、其内に家

老の人々をよひあつめ、軍評議有けるか、唯是にて末森へ早馬をつかはされ、一左右を閉合せ、をし給へと諫る人も多し、又内藏助多勢を以幾重共なく取巻、我旗本の勢ハ、金澤よりの助之勢を防かんとて、末森より一里計罷出、金澤の方に向て陣を固め待居たり、たゞ是より引返し、金澤にをゐて一合戦有て、勝負を決せられん事可然候ハんと、衆口同音に諫め留しもたれかれなり、去共利家父子仰けるハ、とかく奥村を見殺しなハ、生涯之不覺たるへし、其上金澤にをひて一合戦の勝負を頼み、時刻うつる其内に、居まけになる事出来る物そかし、殊にすへき軍をせずし、(て脱力)よはき心あれハ、軍神も見すて給ふと也、唯後卷を遂、助右衛門を助けんより外ハなしと、重て被申出し處に、徳山五兵衛尉進出申けるハ、義之向ふ所をするハ士之格也、是を義士といへり、仰之趣可然覺え奉る、とく／＼急せ給へ、徳山にをひてハ御供申さんと、馬を乗出したるハ、こゝちよく見えてけり、若き人々ハ内々進み度思ふ所なれハ、我をとらしと乗出したるいきほひハ、寔に天魔破旬も向ふへくも見えさりき、與かしら等も猪武者にくみし、いのちをすつる事今に始めさると云つ、ひし／＼と備を設け、段々にをしたり、是よりして、猶汗馬をはやめゆくに、佐々か陣の備も近づきけれハ、濱手へ廻り、轡のならさるやうに枚をふくませ馳行に、をしまかたの雲山の端に横へ、おほつかなき比なるに、末森の城の東方に著陣せしとひとしく、人數を且々立、佐々新右衛門

天正十二年九月十一日

七三



尉、野々村主水正などか攻口に向て、凱歌を囃と上たりけれハ、敵も内々後巻の用心してや有けん、さつしたりと云まゝに、城を巻ほくし、鑓あつ取く見えし處に、利家小性<sup>(姓)</sup>富田六左衛門尉倫をはなれ進み出しを、山崎彦右衛門尉、野村傳兵衛尉、北村三左衛門尉、半田半兵衛尉見て、こハ口おし、こされけるよとをしつゝき進み行、一鑓參り候ハんと高聲に呼り、鬼神をも欺計にきほひかゝつて進みしかハ、敵にも野々村主水正、佐々新右衛門尉、堀田次郎右衛門尉、齋藤半右衛門尉、野入平右衛門尉、矢島五郎右衛門尉、本庄清七、其弟市兵衛、其勢五百餘騎鑓ふすまを作てをしかけたるに、彼五六人之者共ためらふ氣色もなく、多勢に勝事ハ唯心を一致にし、一度に突かゝり、義氣を存するにあると、眞丸に成て鑓を打入、散々に相戦ふ處に、城中大にきほひあふて、時を合せ突て出、内外より揉合せよや者共と、助右衛門尉下知しけれハ、意得たると云よりはやく、三輪助右衛門尉、前波三四郎、野瀬二郎右衛門尉三輪勘左衛門尉、野崎孫助、其弟與左衛門尉突て出たり、推つゝいて馬廻なる本田三彌左衛門尉、可兒才藏<sup>(才藏)</sup>ゑいや聲を擧揉合たりしかハ、寄手之勢一足も退くな、逆ものかれぬ道に極たるそと、野々村主水正大の眼に角を立、いかりまはり戦ひける、利家父子大音聲を上、鑓にてたゝきあふな、唯つき倒せや者共と、すきまをあらせず下知しけれハ、味方の鑓先つよかりけるにや、鑓下にて敵之物かしらの士多く討れてこそ、諸勢四方八方へさん<sup>(さん)</sup>はけたれ、斯

悉く退散せしに、一備のきをくれたるに似て、又左もなく用有かほに見えたる勢有、溢れ者共いさあの勢を追散し、討捕んと望みけるを、利家いやく度を失てのきをくれたる敵にハあらず、彼ハ齋藤甚介、寺嶋牛之介として兄弟なるか、弓矢取ての名士なり、卒爾に碎れざる者そ、其上思ひ切たる勢を挫けハ、能勇士をあまた失ふ物也とて、一人も出し給はされハ、取しつめたる躰にもてなし退にけり、

或曰、兩年のち聞之、件之時甚介、牛之介方より、内藏助へ使者を以云けるハ、是にてしハし戦侍るへう候、然ハ歸し來り被決勝負候へ、城ハなんなくかつき可申となり、利家此事を夢にも知すして、取掛討んと云しを制し給ひしハ、明將なり、すへき所をハ物し、すましき所をハせさる、是良將の云爲也、味方勝に乗て、追打に討て行けるを、利家長追はしすな、はやく歸り候へと、使番を以再三とめ給ふ處に、案のことく逃る勢をハにけさせ、内藏助旗本七八千之勢を左右にしたかへ、足をも亂さす、まつくろに成てそ歸し來りける、されハこそ長追せし者共、徳山源七郎、堀喜一郎、其弟左太郎、今宿印齋、其外十騎計歸し來る先勢に跡を取きられ、一人も不殘討れにけり、敵これに氣を得、いさみに勇て歸し來たるいきほひハ、ことくしくそ見えにける、利家仰けるハ、佐々も信長公の取立給ひし者なれハ、更に侮るへからず、殊に勝利ハ得つ、まけはら立たる勢にハかまはぬか能そ、唯



天正十二年九月十一日

七六

引歸せと下知しければ、此道になれたる與頭共、尤にこそとて、はやり立たる若武者ともを引と、めにけり、しかはあれと、敵あの節所をこえ來りなれ、よき仕物そとて待居たりしか、佐々も思ふ所の圖まで推歸し、時を舉て引たりけり、其圖の境を互に不出入こそ弓矢取上のほまれなれ、利家翌日滯留有て、佐々家中之與頭的首十二秀吉卿へ持せ進られければ、開喜悅之眉旨、其書簡に曰、

今度佐々内藏助企謀反、以多勢雖成至于能州奥郡可令發向之行、引違推寄於末森城取圍、既及難義之處、奥村助右衛門尉、盡粉骨之働、堅固持靜之處、其方早速爲後攻被出勢、佐々内頭分之首十二到來、當家無二之忠義、大慶甚深之至候、恐々謹言、

天正十二年甲申

羽柴筑前守

九月十九日

秀吉判

前田又左衛門尉殿

○本文書、菅家見聞集、加能越古文叢、碩田叢史、武家事紀等ニモ見ユ、恐ラクハ偽文書ナラン

利家、利長今度佐々内藏助家中之歴々數多討捕、首共秀吉卿へ持せ進せし事、偏に奥村か所爲也、さらハ感狀つかハしてんやと、兩人相議有て、○中略、天正十二年九月十六日附永福宛、利家感狀及ビ同九月十七日附永福宛、利家利勝書狀ニカ、メ、松雲公採集遺編類纂ニ據リテ上ニ收ム、

助右衛門尉兩通之感狀并しようきの馬しるしを頂戴致しつる事も、此城預りし翌日より普

後攻ノ先例

請等油斷なかりし故也、此上猶も普請以下勤め可然とて、下々共之身を慰め、彌油斷なかりしこそ、弓矢取身之勤めなれ、今世ハ士之格皆泯滅し、城を預り侍りてハ、茶之風味 道具之不可、飲食之氣味、或金銀得失之勤、或衣服珍器等に奮志し、あはれなりける末世かな、

評曰、いにしへより、良將の後攻を企て、達本意又不達人々を且記す、如左、

一武田四郎勝頼舊臣飯田唯光寺、秋山晚霞齋、其勢三千濃州岩室(母)の城に天正の初籠置候し、然るを城之介信忠卿打圍み、既落城程も有ましきに依て、甲信の勇士一萬五千之著到にて、後卷を成候へ共不得救、歴々を見捨、何之仕出したる功もなく引退し事、

一秀吉公播州上月城に尼子勝久、其臣山中鹿介等籠をかれしを、毛利右馬頭輝元取圍み、鳥ならてハかよふ物もなく、落城急なるを憐み後卷し給へ共、其甲斐もなく、尼子、山中兩人切腹之事、

一越中小津城に長尾家爪牙の臣六七人、其勢五千にて籠城難義し侍るにより、景勝後卷有けれ共、是亦不遂本意して退、籠城の歴歴討死せし事、

一三州長篠城奥平九八郎籠城せしを、勝頼打圍て落城急なりし處に、信長公後卷し給ふて、開極運、勝頼勢を數萬騎討捕給ひき、是ハ被達本意しなり、

一今度末森之後攻、敵の勢一萬五千、味方ハわつか三四千之勢を以相戦ひ、達本意せし事、古

天正十二年九月十一日

七七



天正十二年九月十一日

七八

今まれなる後卷たるへきか、長篠之後攻は、武田勢ハ二萬餘騎、信長公之勢ハ五萬騎なれば、是ハ不珍事なるへし、其後秀吉公又左衛門尉を同名にし給ひけるか、忠義之程を感じ、羽柴筑前守之五字を賜りけり、是同名はしめなりしとかや、各秀吉公之幸にひかれ、諸臣皆昇殿せられ侍る、中にも利家ハ大納言に任せられし時、利家にも口宣之諸大夫可被召具之旨に依て、高島織部正、中川清六郎を諸大夫に任し給ふへきやと、秀吉卿へ望侍りしかハ、尹鐸をも欺計の忠義を成たる利家なれハ、其望可然旨被仰しなり、人皆いみじかりし任官かなと、浦山さるハなかりしとかや、○下略

越中國鳥越之城明退事

佐々内藏助賀州表動之行思ふ所の圖度々相違せし事を、一度ハ日來之行不疾事を悔、一たひハ我家中にをひて前田方より問者を入、内評を聞れし事もや有と疑ひ、又は遠見を出し利家後卷を不知し事、此彼後悔し、まけ腹立て、此上ハ加賀國へ亂入し、在々所々放火せんと發向し、津幡之町をおし破るへき旨、先備への面々に佐々申付し處に、町を抱へんとせし其勢、在所の茂りを便り備へしかは、越中勢いかハ思ひけん引歸し、吉倉山へ勢を引上、陣をすへたるを、利家より鳥越之城へ籠置し目賀田又右衛門、丹羽源十郎、古澤又右衛門尉見おとろき、明のきにけり、然るをも知す、佐々か内寺嶋甚助、同牛助兄弟、久世又兵衛、其勢二千餘騎

成政吉倉  
山ニ陣ス

木船ニ退  
ク

鳥越之城におしよせ、鐵炮あしかるをかけしか共、靜り反て音もせず、城をもかさらす、さひしく見えしに因て、扱ハ聞にけごさめれと、云もあへす乗入みれハ、如案雞之外生類なし、三人之城守退散せしに、又寺嶋兄弟、久世三人入替り、城守と成しこそ自然なれ、利家ハいまた末森城に在しか、佐々加州へ亂入せし由を聞と等しく、はまへをつたひに、金澤の城へ丑之刻に立歸り、刁之刻に又打出、森本、栗崎邊に至り旗を立て、物ふかう勢のふくらを隠し備し處に、佐々か物見之騎兵五六人走來たりしか、頓て駈歸てかくと告しにこそ、扱ハ上方勢著たるにやと思ひ、内藏助ハ木船之城へ引入にけれ、

其比之老人曰、前田ハ毎度得勝利、佐々ハ度々失利、まけ腹立しかハ、勢をかくし、物すくなに見せて、戰を仕懸よるへしと思ひしか共、互之名將故勢を打納にけり、

〔加越登記〕末森城後詰事

一（天正十二年）同年九月十一日に、末森の城へ佐々内藏介成政押寄責る、我身ハ二里脇ハ坪井山と申所に、切所を前にあて、陣取、城せむる越中衆ハ、山下甚入、佐々平左衛門、前野小兵衛、野々村主水、菊地伊豆、同十六郎、寺嶋甚介、同牛之助、本庄與兵衛、野入平右衛門、齋藤半右衛門、佐々與左衛門、堀田次郎右衛門、櫻勘介、隨分覺の者ともを被向、都合八千餘騎にて押寄、町を放火可仕と存候處、城中より土井伊與守町屋を被損て口惜仕合候間、出て防戦す

天正十二年九月十一日

七九



神保氏張  
陣ス

廣岡ノ名  
水

へきとて、上下貳百計にて突出、無比類働して討死仕、城中にハ奥村介右衛門、子息助十郎、千秋主殿介、瀧澤金右衛門其外歴々の者共下知して、持堅むるゆへ、寄手も雖盡粉骨不及落城に候、成政被申候ハ、定而利家加州より後詰する事有而、押への人數可置と被申候て、國侍神保安藝守、子息清十郎被申付故、四千餘の人數にて、川尻と言所に陣取、加州よりの道をふさぐ、然處に末森より金澤へ注進候へは、利家公被聞召候て、金澤には舍弟兄前田藏人入道、五十魚住隼人、其外名有衆を留守居に被殘、不破彦三、村井又兵衛兩人を先手に被成、金澤を即日十一日の未刻に打立給ふ、利家公御意被成候ハ、末森にハ水乏く、定て城中の者共渴に可及候間、廣岡の名水を汲てさゝいに入、急追付可申、後詰之士産にせんと被仰付、誠に名將の御言葉いづれも感申候由、扱又同國松任と云所ハ、金澤より三里上の方なり、是にハ御嫡子孫四郎利長後肥前守と申候、居城なれば、急御出陣候へ、末森を成政數千を以せむる間、後詰被成候と使を被遣、又能州の人數も、七尾にハ前田五郎兵衛父子被殘置、其外之侍共不殘末森へ出向へしと被仰遣、彼是時刻うつり被打立ければ、未の下一刻に罷成候、同國津幡城迄四里の間を急、程なく津幡に著候へは、舍弟右近將監御向に町はつれまで出被申候ハ、少當城にて人數をも御待合可被成候、其内孫四郎殿をも御待請被成候、尤に奉存候由挨拶なり、利家公も然者先利長も津幡の城へ御著被成、利家公、利

長公御父子、侍大將村井又兵衛、不破彦三其外歴々衆被召寄被仰候ハ、成政とハ、互に若年より數度之合戦にあひ候、然とも利家を越候事一度も無之候、乍去無類の者也、我等を敵にしてハ、成政いか様におもふとも、中々不可思寄、左候得共、夜中の後詰にて候得は、味方の人數ハ小勢、あなたハ多勢なり共、打合候ハ、無二無三に一合戦心かくへし、大利を得ん事案の内也と、大音に御意被成候へは、各夜の明たるやうに心も晴ていさましく御座候、扱寺西次末守軍記、兵衛入道、前田右近將監など、相談して、御前へ罷出被申上候ハ、もはや末森の城ハ落居可申候、殊更川尻へ神保父子四五千人數にて押へ罷出候と承候、左候ハ、味方利を得ん事難成奉存候、同ハ末森ハ被爲捨、此所を丈夫に御持堅被成候而、秀吉公へも御注進被成候ハ、さためて早速御出張可有之間、身を全く被遊、後詰の勝利御取御尤之由被申候處、利家公被聞食、以之外御氣色替り、左様のことハ異見二度無用に候、人ハ一代名ハ末代と有金言不珍、自國へ敵に一足にても踏入られ、剩奥村、土井、千秋捨殺ては、以來天下を知ても、此恥ハすゝかるへからず、成政大勢にてあらは、我小性馬廻り計にてもいさきよく一戦して、勝負を可決と被仰、扱又村井又兵衛を御呼寄被成、是非合戦とおもひ候、如何存候哉と被仰候へは、又兵衛申上る、御意之通乍憚御尤奉存候、有無の御一戦を進め申、利家殊の外御悦被成、村井にしくハなしと御大慶不斜、いづれも罷出候へ



之由被仰、御出可被成と被存候處、右近將監湯漬之御食を被上候、其内重而被申けるハ、當地に上手のはかせ御座候間、時取をハ見せ御立可然と申されけれハ、御氣色よからす候へ共、それよへと御意候ゆへ、五十計なる山伏罷出候時、利家御覽被成、はかせは其方かと被仰候得は、頭を地に付罷在候か、山伏懷より物の本を取出し候、其時御意にハ、とかく後攻とおほしめす間、能々見よと聲高に被仰候得は、山伏物の本を懷に押入、今日は吉日、時分も能御座候とこたへれば、殊外御譽有て、扱々功者かな、能見候、頓而大利を得、歸陣之節褒美可被遣と、御心よけに御發足被成候、孫四郎殿とかく末森後詰をハ御留可被成と思召、御家中の者も町屋へ被遣置候所へ、利家公俄に打出給ふを聞召、利長公御馬印を津幡町まで横山三郎後横山山城守と申、○末守軍記、横山三郎長知ニ作ル、持出さる、扱先手の大將不破彦三、村井又兵衛兩人を押へ、其外原隠岐守、前田又二郎○同上、コノ次ニ繼長トアリ、多那村○同上、種村トアリ、三郎四郎、武藤助十郎、片山内膳、岡嶋喜三郎、前田慶次、○同上、劍ニ郎ニ作ル、近藤善右衛門、青山與三など、申歴々の者共を始、勇み進んで押出す、川尻より一里計此方、高松と申處にて、利家甲の緒を強くしめられ、餘りたるを切て捨られ候へは、何も殿様ハ今日をかきりと思召候と相見申とて、中々生て歸候ハんと存もの一人も無之候、然れば篠原勘六と申利家公御近習の侍、其時分廿三歳になられ候、折節よこね煩起臥不自由故、金澤之城に留守居に置れ候處、色々御供可仕

氏張ハ山  
上ニ陣ス

由申候得とも、是非々々留りて自然我等討死せば、能く城を堅固に持堅め、秀吉公の出陣を待候得、不叶ハ腹を仕候へ之由、達而被仰候故、無力居申候得とも、乗物に打乗、與力侍廿騎召連、川尻近所にて追付、爰にて具足を著、篠原勘六參候と大音にて甲上る、利家公、利長公御大慶不淺、諸傍輩下々まで、あつはれ剛強の若もの哉と譽申候、然は神保父子川尻河を前に、當山の上に備、加州の押へとて居申候、津幡へ遣候目付立歸申候ハ、又左衛門殿御父子ながら、津幡迄御出勢にて候か、中々後卷可被仕躰にて無御座候由相極候と申候へは、流石神保も、尤左様に可有事必定と油斷被仕候、利家公ハ先手へ御越有て、不破、村井に御相談被成、濱はたを一騎うちに馬の舌をまかせて、いな、かさる様に押通被成候、此時たれやらん川端へ斥候に被遣、神保後詰を聞、人數を下し待居候か、見はからへと被仰付候處に、見て歸、敵こそ備て待候と甲上る、次に富田越後に被仰付、勘六物見して歸申上るハ、敵は御後卷不存候哉、一人も人數下り不申候、川杭澤山に候か、人の様に相見へ申候、早々御押通被遊候への由申、利家ハ御意に川杭とハ何を目當に仕候哉と被仰候へは、越後申上候、武者ならば並そろひ申間敷候、其うへ指物なども可有候か、並能そろひ申候、猶々たしかに見届んため、川中迄馬を乗入、心靜に見届申候、是を見ちかへ候ハ、二たひ武士を立ましきと申上る、利家公もいづれも尤たしかなる見様、侍の手本と感し被申



天正十二年九月十一日

八四

候、神保父子御通被成を夢にも不知、漸々加州人數おくれ候者とも、一里計も跡より追々に掛付候を聞付、きもをつふし、さてハ利家只今之通(被)と申候て、俄に鐵炮を打かけさへ申候、其間に利家無何事今濱と云所の右之上なる砂山へ押上被成候へは、ほのくくと夜の明かたに罷成候、利家公御馬を乗廻し被成、各はや兵糧をつかひ候へ、今日の勝利可心易と被仰候得は、何も勇申候、其所にて何も下り立申候を見積候得は、孫四郎殿人數七八百計、彦三人數七百計、又兵衛人數六百計、御旗本千五百には不過候、利家公又被仰候ハ今日の合戦於本意ハ、手柄之面々不依大小上下、一廉恩賞可被遣候、必々無類之働を見せ候へ、若於討死ハ子孫を可取立と、高聲に被仰候得は、侍も下々迄あわれ能大將軍の御下知哉と、をのつから御一言にて、夜の明るやうに勇をはけまし候、御脇に被居候徳山五兵衛御尤なる御意と申時(服アルカ)ハ、御人數六千程ハ可有候、其より備を押し出被成候處、道二筋有之、一筋ハ末森城への道、一筋ハ成政本陣坪井山への道に候、其にて村井又兵衛被申候ハ、つほの山へ押掛、成政をとりこに可仕由被申候得は、利家公被仰候ハ、尤に候へとも、内藏介足かゝりを取て可備候、唯末森へ押懸、先敵を追歸、城中の者共に安堵させんと被仰、又兵衛も御尤奉存候、城中のものとも只今の御意承候へハ、忝可奉存候と申候、無程末森の近所へ押懸候得は、早村井家中間野新之丞首を取來、其外小林○末森軍記、コ六左衛門、三木十

内、屋後大右衛門など申侍頭十一手々に提げ、又兵衛に高名仕候と見せ候へハ、急ぎ御本陣へと被申付故、早々利家公懸御目候へは、手柄を致候由感心被成、一番首の見様有、もはや味方勝利無疑と被仰候、餘大音にて御下知候故、御息切れ候へは如何と、徳山五兵衛入道被申上候付、大形の者共にハ、さのみ御言葉もかけ無御座候、不破家中の者とも、不破十左○同上、左ラ衛門、同四郎右衛門、平野齋宮其外誰々と名乗、首八つ討捕、是も彦三に見せ、則利家公御前へ參、見參に入候得ハ、彌御機嫌能事不大形、扱又末森之城二之丸居候千秋主水助、瀧澤金右衛門其外侍とも越中勢せめ入、おしこみ出し被追入、數度雖盡勇功終討死仕、もはや本丸計に罷成、大將助右衛門猶少しも届する無氣色、利家公後詰を待て持堅むる處、砂山に當て、朝霧の間に利家公馬印相見へ候間、城中の者ともいさみに勇んで悦申候、今少後詰遅れ候ハ、本丸までも踏落され可申所、如此に速の御後巻、偏に利家公御武運強、冥加に御叶被成候といつれも申候、然者大手ハ敵味方入組、村井又兵衛、多野村三郎四郎など自身鎧を入、散々に戦候處に、村井又兵衛と越中衆の先手佐々與左衛門と鎧を合突合、村井上鎧に成、與左衛門を突伏被申候得と、越中先手大將分こ而御座候故、身命を輕して、三十騎計枕をならへ申候、加州衆ハ與左衛門討死するを見て、彌強く突懸押崩し、関をつくる、掛れくと申候故、敵敗軍仕候、利家公御旗本城中へ御入可被成由にて、搦手

天正十二年九月十一日

八五



へ御廻り候處、爰にも越中衆隨分の侍野々村主水、本庄與同上、市兵衛、齋藤半右衛門、櫻同上、甚作、介、堀田次郎右衛門など、申ものとも罷在候故、又戰申候、櫻勘介は鐵炮の上手故、味方手負死人多有之候、利家公御近習御候御小姓笹原勘六、富田兵同上、六、左衛門、北同上、小、村作内、村井又六、木村久三郎、富田源六、御馬廻りこハ、半田半兵衛、山崎彦右衛門、野村傳兵衛、小泉彌市郎、同上、小泉ヲ利、井口茂兵衛、奥野同上、村、彌市郎、阿波加藤八、江見藤十郎、吉川平太、岡本七介、其外侍五十騎靜に懸候處、半田半兵衛眞先に進み、一番鐘を見よと云所を、越中方櫻勘介鐵炮にて打候へハ、半兵衛左の手を肩へかけて打拔候故、鐘をいたひて倒れ申候、敵味方とハ乍申、半兵衛と勘介は從兄弟にて御座候故、打いかり候得共、指物にて見知候故、勘介も半兵衛相果るか不便成儀と及落涙之由、後聞へ申候、然處に利家公下知被成候ハ、加様の鐵炮筋に延々とひかへ、味方に手負死人彌重而無益候、懸れ〜と御馬印をふりかけ下知仕給ふ故、何の會釋もなく進み懸て押崩、越中衆野々村主水、本庄與兵衛、齋藤半右衛門、堀田次郎右衛門、櫻勘介究竟の侍とも七十餘人、枕を並討死仕候、加州勢勝鬨を喧と上申候、此時一番鐘野々村傳兵衛、山崎彦右衛門、笹原勘六、富田六左衛門、北村作内等二番鐘を仕申候、扱こそ利家公城中へ被爲入、先城中の奥村は不及申、其外之者ともまて不殘御言葉被懸、今度之働中々絶言語迄候、利家如何様に存

一番鐘

氏張川尻  
ヨリ兵ヲ  
撤ス

候共、其方共よハくして城を明るか、又下知あしくして城を被落は、口おしき事なるへさか、無殘所仕形、手柄々々と被仰候、野村と山崎一番鐘、二番鐘の争を仕候得は、利家被聞召、則高名の上中下御穿鑿を可被成候、御意にて被仰出候ハ、半田は一陣を拔出先登を仕候處、冥加なくして深手を負申候故、一番鐘を不合、さこそ其身も殘念に可有候か、さりとも侍の志ハあらハし候へは、譽不大形候、然るに野村、山崎一度に鐘を合すると申とも、傳兵衛ハ今日の一番鐘と名乗候間、一番鐘ハ傳兵衛に極候由被仰、御感狀被下候、御恩賞ハ替儀もなく、兩人共に千石宛御加増被下候、半兵衛も御加増被下、本知共に千石に罷成候、歩行之侍十五人與力被仰付候、然處に成政の本城へ利家公の後詰のよし聞候へは、内藏介殿御旗本を以、一合戰可被成由にて、佐々平左衛門其外宗徒の者とも以上八千計にて押出され候、利家公被聞召、此きほひ先には、何百萬騎にてもあれ、おそるゝにたらずと被仰、一番合戰を村井又兵衛に被下、二番を御城代奥村助右衛門、多那村三郎四郎、三番不破彦三、四番孫四郎殿、五番利家公御旗本と軍法を被定候、川尻おさへ勢に罷在候神保父子も、川尻を捨て引返、神保に押られ候加州勢も悉く末森へ來りけり、爰に能州侍長九郎左衛門四百計の人数にて利家公被成御座候所、廿町はかりあなたまで參候、○末森記ニハ、長連龍來援シ軍士共ニ末森へ後卷ニ出馬スル間、夜明方ニ參者候ヤウニ利家卿ヨリ折紙遣サレケレハ、七尾ニハ何レモ馳集リ相談アリシニ、高島織部ヲト、イヤ〜軍ヲ習利家卿後詰ナサルヘキト思召トモ、道マテ敵押可申事モ候テ、末森へ



御越ナキ事モ可有之、能登ワツカニ三千騎ニハ過ヘカラス、敵ニ出合、一戦モ成間敷候間、今一度ノ御左右ヲ侍可申トアリケレハ、何レモ此儀ニ同シケリ、長九郎左衛門尉イヤク、末森ノ後詰有無ノ二ツナリ、利家卿如何ト思召御心アラハ、ヨモ能登ヲ明テ出向候トハ被仰越間敷候、トカク人ハトモアレ、利家卿御判形到來シ候上ハ、長ニヲヒテハ末森ヘ罷越候ト云捨テ、座敷ヲ立タルヲホメヌ者コソナカリケル、手勢千騎計ニテ急レケレトモ、利家卿勝利ヲ得給ヒ候處ヘ、廿町計コナタニ人数、利家公御覽被成、能州之味方勢か、又ハ成政方より能州境目に入置候人数共か、末森城責を聞參候哉、見候得とて物見を被遣候處、長九郎左衛門なり、末森おもて利家公御利運埒明申候を聞、九郎左衛門被申候、扱々無念之仕合、遅く懸付候事、高島、中川清六におさへられ、御合戦にはつれ候、偏弓矢之冥加つきはて候と、物見に參候脇田善左衛門、野村七兵衛前にて、もとゆひを切申され候、兩人罷歸、具に被立御聞候得は、不  
大形御感有て、長一人是まで身命をなけうつて參候事、忠功不淺と御感悅被成候、此時の  
九郎左衛門強みハ、百度に一度の武邊と何も申候、則利家公よりも努ツツと不思召、結句不淺  
譽の由、別而御懇切に御誓紙被下、九郎左衛門落涙を被仕、難有由被申候、同十二日辰刻、  
内藏介殿人数を引廻し、如何被思召候哉、山手へ付引退被成候、利家公村井又兵衛と様子御  
覽被成候得とも、切所故人数をも御付なく候、武者修行者本田三彌などは、無二に御掛候  
而、成政を罰捕候おへと被申候、内藏介殿見事に人数を引のかれ候へは、さすがに能大將哉、  
成政なればこそあの様子に手かるく被引取候と、ほめさるものハ無御座候、扱又討取首數  
都合七百五十三あり、利家公御意被成候ハ、内藏介末森不破落候事を口惜おもひ、引廻躰

にみせて津幡の城を可責も不知、然共津幡不勢成間、可責落も不知間、是より又津幡へ御  
歸可有候とて、如本末森の城ハ、奥村城代に被仰付、歴々六人迄被籠置、何時によらす、重  
ても内藏介此表へ人数出候者、不移時日可注進、然者後卷早々可被成旨被仰、奥村助右衛  
門、千秋主水いづれも御褒美被下、其外の手柄の勝ものとも、重而御吟味可有と被仰、末森御發  
足被成候、其時ハ御人数一万計程と相見へ申候、不破、村井また御先を被仰付、濱邊へさし  
懸り、成政の跡をしたひ、御馬を打入被成候得は、一向成政津幡へハ心懸なく引退被申候、  
一内藏介殿鳥越城の近邊被押通候か、敵城なれば氣遣被成、押へを置、旗本を押被申候か、押  
の備より物見を出し、様子を見候處、城中こハ一人も無之由見て歸、此趣成政公へ申上候  
得は、是天のあたへと悦て、先御入候、是をハ利家公露ほとも無御存知、津幡の城まで御  
著有之、其より近邊の城々末森にて御利運に被成、目出度津幡迄歸城候間、彌堅固に城を  
可相守旨被仰遣候處、小林喜左衛門鳥越へ參候か罷歸、鳥越ハ目加田又右衛門も丹羽源十  
郎も明候て、敵入替り申候由被申上候、利家公御腹立不大形して、是より直に鳥越へ押寄  
可被成と御意候を、彦三、又兵衛、徳山入道、片山内膳など達而被申候は、今朝大利を得さ  
せられ候上ハ、鳥越の小城にハさのみ被懸御心間敷候、先御馬を被入、重而御取返し御尤  
と被申ゆへ、同十二日酉之刻にハ、金澤の御城御歸城、御留守之侍并町人百姓共御迎に罷



出、誠目出度事、中々たとへを申に無言葉候、

一末森表御利運の様子、秀吉公へ可被仰上と有て、御使者を被爲登候處、秀吉公御大慶不斜、則使者に御對面有て、今度利家の働誠に日本國中には、かる計の手柄也、これみな我等への忠節を被思故と被仰候、前々より成政息女九歳になられ候を人質に取置を、乳母諸共に

栗田口にはた物御かけ被成候、見るもの泪をなかし申候由、○末森記、加越戰、  
爭記殆んど同ジ、

〔末守軍記〕

○上

九月九日、今石動道宮嶋内栃谷越をして、能州末守に至、同日の晩より

先手に城をまかせ、(成政)我身へ二里脇坪山といふ所に本陳をすゑられたり、成政人數被向候事、城中にもしらすりけるを、能州、越中の境そうがう村の田島兵衛と申者、末守へ注進申ける、この村へ能越の堺に能登澤川、越中澤川とて並ひ有て、越中澤川より常に能州へ一味して有となり、褒美を給はり、何にても望次第と仰ありしに、百姓の事に御坐候間、近所の柴山を下され度と申上ければ、則安堵の御印を被下、今以所持しけるとかや、扱内藏助殿先手下甚八、前野小兵衛、佐々平左衛門、野々村主水、菊地伊豆守、同十六郎、寺嶋甚助、同牛之助、本庄市兵衛、野入平左衛門、齋藤半右衛門、佐々與左衛門、堀田次郎右衛門、櫻井甚助(物)以下八千餘騎にて押寄、町を放火せんとせし所を、城中より土肥伊豫町をやかれては無念といふまゝ、に、二百餘人を杉の先にそなへていなか懸り、四方八面に切て廻りけれども、多勢もみにま

利家末森  
ノ戦捷ヲ  
報

秀吉成政  
ノ女ヲ  
磔

栃谷越

永福ノ妻

うてせめけるほとに、不殘討死す、城中には奥村(助下同ジ)勘右衛門、子息助十郎、千秋主殿助、瀧澤金右衛門その外勇士とも下知して、目をくはり、持かためける、此城へ俄に拵たる事なれ、わすか堀一重斗にていまた堀をもほらす、兵糧玉薬なども多からず、敵へ大勢にて二重三重に取巻たれ、味方の軍勢雑兵などは氣をうしなひたる躰なり、このあらましをさつし、奥村、千秋も兵の氣をいさめ、殊に奥村か妻女物なれたるかひしき者にて、小具足にて長刀を横たへ、けなけなる女房一人召具して、堀うらを廻り、兵の氣をはけまさんと、銚子盃取持せ、下戸も上戸も酒をすゝめ、今夜へ大事のふせき場を、由斷して敵に乗捕られたまふな、定めて明日は殿の御後卷有へし、つかれたるかたへ、兵糧をつかひ給へとて、奥村か三男因幡守重和其頃十五歳なるを、方々の矢倉、搔楯まわらせ、番のものともにかわらせ、鐵炮をとき、玉薬を込せて、兵の疲れをやすめける程に、下部ともいたるまで勇みをなし、この城を枕にして討死せんと用心聊もちこたる事なし、奥村か譜代のものすゝみ出て、金澤へ注進に參らん由申けれ、勘右衛門尉、我もかく思へとも、ケ様に十重廿重に敵取巻けれ、恙なく加州へゆきつかん事(符カ)をちほつかなし、敵に見つけられ、あるひいけとられ、如何せんと思ふいかにとありけれ、良等(郎下同ジ)いや我か身も君のため討死せん事本望なれ、爰にて浮沈を究め度存れとも、なるへきほと、忍て注進を申とけ、只今の急難を御救ひ候様に仕



度うつたへ候へ、たとひ又敵にとらひれて、骸を軍門にさらすとも、志は君に奉る命成と申せし、奥村父子も感涙を押へて、さらし忍ひ出よ、金澤にて申さぬ様ハ、此奥村におゐてハ、變などにして、無下に城を渡す事ハ仕間敷候、百騎か一騎に成までも此城をふみ堅め可申と申上よとて、良等を注進に遣しけれハ、なんなく忍ひぬけて、加府に至り、此趣を言上しければ、利家卿聞届給ひて、即時に後攻せんとて、金澤の留守には舍兄前田藏人利久入道、魚住隼人以下残しおかれ、不破彦三、村井又兵衛を先手として、同十日の末の刻に討立給ふ、ノコトニカ、ル、加越登記異事ナシ、

〔前田創業記〕

量 ○上略、荒山ノ戦ノコトニカ、九月六日、○加賀前田家譜、八日下爲ス、成政潛兵出富山城、既而悉

國兵到澤川、自此爲宮嶋越而下河井、召農人田島兵衛爲郷導、田島兵衛計之、詐越軍以山澗迫狹可羅絶入地爲善、因是越兵停滯疲勞、公褒美田島兵衛、而賜居宅地及林山、同十一日、○同上、九日下爲ス、進到吾妻野、急欲攻末森屯天神山、縱火於紺屋町、聚群臣重習軍衷、諸臣僉云、此城最高山、然不峻、城壁未全、拔之可運于掌上矣、成政喜領、命攻城之術、而成政卒本陣、陣于坪井山、令神保氏春、(其下同)其子清十郎四千人備北川尻、而設陰陽兵略、是爲金澤之援兵襲來、則氏春當川於前屢拒戰、成政自坪井山直馳下、橫擊夾戰悉虜之也、先鋒野々村主水、久瀨但馬、菊池伊豆、其子十六郎、堀與八郎、山下甚八郎、齋藤甚助、寺嶋牛助、本庄市兵衛、佐々與左衛門、齋藤半右衛門、野入平右衛門、櫻

九月六日  
成政發  
宮嶋越  
ノ下河  
田島兵  
ニ兵衛  
成政難  
誘致ス  
ニ

勘助、堀田次郎右衛門等八千餘人回濱邊、自麥生上駒嶽黒谷、競進破於城下町中、城兵士肥伊豫才卒三千人、(十カ)自以十文字鎧力戰、而騷敵兵數回、見其遂不可勝而將復入城、敵兵追之、因回轡、大呼苦戰遂殞命、堀虎福得首、時十六才、成政深賞之、敵兵乘勝均進圍城、攻撃甚急也、城兵防之、積弩亂發、火炮頻飛、敵軍屢卻亂列、城兵出奮擊之、時敵驍將山下甚八郎、齋藤甚助、寺嶋牛助、出群靡衆、累進累擊、成政聞魁將等不克拔城、而來于此益兵、自執指揮勵兵、因越兵勇進、自谷自峯風起煙至、蜂起蟻附之、城主奥村永福、其子助十郎、(衆明)及千秋主殿、瀧澤金右衛門指揮兵士、奮激勵武功、因城兵疾戰殺傷多、雖以一當衆、然以寡不能勝衆入城、敵兵愈進攻之、寺嶋牛助令力士傾發西城門舉簀戸、而乘其機急攻、遂破二三郭及水手、本朝俗語謂城用水、曰水手、千秋主水、瀧澤金右衛門者二郭守將也、故於此齊刃突戰殞命、兵士死傷者最多、僅守本城而勵武力、糧米雖不匱水乏、因諸卒口乾精神太疲、城危頗如綫、守兵氣衰勢竭矣、粵奥村永福瞋目激聲勵兵曰、雖拒大兵不可有所憂、是吾嚮屢所告諭也、當曝骸於此城、募勳功於子孫矣、卿曹努力、守兵乘其機奮戰、劔頭散火、永福之次子奥村又十郎易英幼能放矢石、時永福妻安、院號更舊衣披花帷子、白イ以自手巾包頭、自對竈煮糜粥、以食群士、令侍女贈酒飲之、謝軍勞、掣長刀遍巡視壁下、大言勵兵士曰、士之臨戰陣也、以進死爲榮、以退生爲辱、卿等可以城枕耳、頗其躰可謂萬夫雄矣、守兵感激百勇力、俱共呼曰、吾屬縱然雖爲骨不去此、貶敵兵累進欲破柵踰壁立拔屠之功、



因城兵突戰太急也、城中城下鬪爭之聲響天、呼號之音動地、眨越兵或僵死于巖上、或轉死于谷中、死傷者蔑可校量、日昃不暇食、因苦辛攻擊頗倦焉、粵佐々與左衛門、齋藤甚助、寺嶋牛助屬謂衆曰、叢爾堡障陷之屈指可知焉、今強攻之則縱雖拔之、羸師勢氣屈則不可也、不如退兵乎、衆皆可之曰、顧夫吾兵依攻擊甚、守兵益剛焉、是弗深考之謬也、今解圍而令城兵縱意所如、則大半棄城逃亡乎、嗟呼是非上策哉、期以明日遂解圍、奧村助右衛門、千秋主殿益勵兵、謝軍勞曰、卿等雖危不有外心、可謂勇士也、猶努力、亦勿勞心、若急發累進可救之、黎明援兵城兵夾敵擊走之、追北取首、受君之深感、則豈不爲大幸乎、永福妻亦挾長刀、巡諸陣勵氣、因是怯夫勵勇、懦夫思義、沉於勇士乎、城兵勇氣愈壯也、今日未尅末森飛夫踵金澤城、最如飛、入驚迎之間、奚自、飛夫疲勞不言、拋笈箱書於玄關云、自末森之飛使、城中驚騷、是日波著寺號空、登城禱祠抽丹誠之眨、空照聞之、不敢動情、靜祈念畢曰、嗚呼有揭示、善哉、君出軍則凶徒倒戈敗亡是明矣、衆皆美談焉、公聞攻末森之急也、蒙兜鍪著鎧、欲出軍、因芳春院殿公室、諫曰、何遽哉、待利勝後號利長而頃之胥議軍事夫然、顯欲罷出軍而且卹焉、如有亡者、公瞋目大叱曰、婦人何知武袁哉、操長刀如有復彊言則斬之、因芳春院殿大駭罷言、既而馳使於瑞龍院殿告之、亦飛檄於能弼諸將、其趣云、當卒兵來末森、俱共并軍戮力援城兵矣、令前田藏人利久、魚住隼人守金澤城曰、吾若武運窮、終命于戰場、則可堅守城乞援兵於秀吉、開運報警者矣、同日未下刻吹螺發金澤、芳春院

波著寺空  
照利家  
出陣ヲ勤

利家農民  
ヲシテ津  
幡ノ山上  
テニ旗ヲ立

殿捧三種肴、祝首途、公召步卒曰、聞末森水手既敗、顧城兵水乏及渴乎、汝等汲廣岡名水入簞、來可飲城兵乎、揚鞭抵掌、馳志于末森、馬蹄如飛、因群士大半不暇登城、直進趣津幡、比至于中條、曜靈俄景、於此公召農人半右衛門曰、汝夜中聚黎民數百人、遲明登津幡邊之峯頭、可飾紙旗設備也、既而戊刻到津幡、公欲不入城直進末森、城主前田右近秀繼、其子利秀又次郎出城諫曰、少焉入城、待瑞龍院殿胥議軍衷可乎、因入城、遣健士數十人於斥候、命曰、可有敵之斥候生捕之、亦令步卒及里人數十人、遣高松邊視敵之軍粧、既而瑞龍院殿發松任來于此、眨群士會評曰、救末森孰與勿救、深進逢大敵是非上策、今亦棄城兵是最難矣、衆口呶々無得一決矣、公招召村井長賴、不破彥三等曰、吾自幼以武道爲業、攻城野戰、或先登或殿、成政無超吾、雖越兵多何爲足恐哉、彼曷得勝哉、如鷓鴣雀狗逐兔耳、衆僉勇歡勵氣、眨城主秀繼及寺西宗與以爲、公強救末森則如抱薪救火、以肉投罽虎也、太諫抑遏曰、成政大兵圍城、累攻急擊、爲沒落也不可疑焉、加之會長神保氏春儔卒數千、陣川尻邊、且成政屯坪井山、而備多勢、這邊爲敵地形最美也、彼衆我寡、何爲當之哉、臣等料之、莫如毋進兵堅守當城也、公欲唇亡則齒夫寒、而怒罵彈斥之曰、唉不足與謀、大丈夫不畏義死、不榮幸生、吾何切敵大軍、棄殺城兵汚武名、爲天下笑哉、匪翹受辱於一時、所以遺謗於萬世也、成政若陷末森、則勢氣滔北羽、吾亦氣力供盡、可無益噬臍、坐待亡孰與伐之、城兵最可憐、不如救之、時村井長賴言曰、唯請速進兵、擊破敵軍、追北取首、與城



兵握手、抑此積懷、立武名於天下、何怖畏之有、加軍怡幸何加於此哉、生前之望云足而已、若援兵遲滯、越兵撥城、吾屬失攻擊守禦之術、遂爲之虜耳、秀繼曰、有知天文山伏、召問吉凶乎、公忿然作色曰、嗚呼夫非通幽明之變、惡識乎天命、況如山伏者何知焉哉、天之利不如人和、不足卜者乎、秀繼獻湯瀆、亦言曰、卜筮有何負哉、公何故而云不可卜哉、因召山伏、公睨大言曰、而知天文哉、吾當必進兵、慎勿誤焉、熟計之、言未既、山伏爲視書、對曰、吉日矣、吉刻矣、唯冀速可進軍、戰勝之功在漏刻耳、公大歡曰、汝可謂知天利也、吾速得大捷可深賞也、勵兵士曰、夫勝敗存亡之機、固已形大將之智中矣、曷拚於衆人言、而以冥々決衷、吾素料敵合變出奇也、汝等知之乎、可得勝於瞬目之中、伐越兵於手裏也、汝等努力、發津幡甚急也、因群兵驚遽、故橫山三郎長知自操瑞龍院殿之馬幟從之、村井長賴、不破彥三爲先驅、原隱岐、前田又次郎、片山內膳次之、多野村三郎四郎、青山與三、近藤善右衛門、前田慶次郎次之、其餘濟々焉、宮川但馬、公之武者奉行山崎勝兵衛長鏡、后改長德、瑞龍院殿之武者奉行、者爲武者奉行、因騎先後重列伍、時公之射士等依出軍之急、而不張弓遽從、因大怒叱之、時大監大海爲雲張、得射藝之妙、公召馬子、本朝之俗語謂驛馬圍人曰馬子、曰、汝等到何處可夜明乎、馬子皆對謹曰、料之、比到今濱、此處與末森近、則可夜明也、公大喜、既到高松、公謂左右、斬首鎧忍緒之餘、而觀必死、顧與揭母衣於臺等者與、歟、可謂勇將也、因是群兵益進、時聚校其兵、僅三千五百餘人、眨篠原勘六郎乘輿卒數十人、追及來此、是依病疴危急、命雖留金澤、依慕公之甚

末森ノ城  
兵鐘ノ見テ  
幟ヲ知ル  
利ヲ知ル  
授ヲ知ル  
鐘ヲ知ル  
田信トノ  
上原トノ  
軒原トノ  
タニ應

也、公感之曰、汝病愈乎、奈何、篠原對曰、吾來于此氣色頓新、云拉鬼、公喜、是日成政遣忍者本朝俗語、謂伏旗鼓曰忍、於津幡、窺公可有援兵乎否耶、眨忍皆告不可有出軍矣、故成政、氏春共輕侮、怠惰而不知公之後援、爲天下笑矣、成政雖有武勇、不知初後三者之誤也、公遣斥候、屢伺敵驍勢、斥候歸曰、敵兵設備待吾兵者矣、公亦令富田六左衛門後號爲斥候、富田歸告、非備、川楸、公曰汝能視乎、富田曰、吾以爲兵士則有高下、川楸則無長短、因深進觀之、乃川材也、君勿勞心、公歡、警戒軍士曰、汝等能捲馬舌而勿敢響音、當潛進海邊、因兵士杜口、武者奉行山崎勝兵衛、宮川但馬騎先後整列伍、既而先陣漸到今濱、氏春夢不知之、十二日黎明公進軍、堅旗於砂山、軍卒雖才三千五百餘人也、意氣揚々、勢氣盛大而視五六千之軍備矣、城兵上原藤五郎從壁上窺視曰、公之援兵勿疑、可視鐘馗馬幟也、是自武田信玄所賜上原隨應軒之馬幟也、因傳來而我所獻公也云々、城兵見之、抵掌大喜勇氣十倍、越兵以發于不意、驚駭亂騷、疇夕強悔不攻破本城、公命群士用糧、亢聲勵諸軍曰、汝等重命與死生、忘家忘親、可謂以一當千之銳卒也、成政何當之哉、彼若戰則忽敵兵敗亡是明、惟恨越兵不能敵戰、散靡班軍矣、汝等努力、有軍功之輩不可撰貴賤上下、依軍忠淺深、可與恩賞、若殞命輩最可憐子孫、勿敢以疑、吾若食言則靈神殛之、越軍覆不可廻踵、當守隊長指揮而戰、勿敢越逐敵勿亂列、衆皆歡、肯哉公之言、時村井長賴勸曰、可進坪井山與成政會戰乎、公不肯聽、因村井長賴、不破彥三、田野村三郎四郎、片山內膳、原隱岐、青山與三



聲ヲ惜ム  
ノ大將軍  
ノ故實

向城面競進、村井長賴、多野村三郎四郎自合鑓、成政先鋒佐々與左衛門與村井長賴交鑓突戰、  
 長賴遂縱僵佐々取首、依一軍魁首、越兵雖欲攢萃扶佐々、金澤軍兵急擊走之、敵兵不顧亡命縱  
 橫衝戰、冒白刃死者不可枚舉焉、(秋)長賴家人間野新丞及小林彌六左衛門、三木十内、野後太右衛  
 門等、不破彦三家人不破十左衛門、不破四郎左衛門、平野齋宮等獲首、各受主命獻公、々曰、  
 汝等高名骨折折々々、本朝俗語謂、取首曰、高名、謂勞曰骨折、有視初首知吉凶之事、吾兵必勝、汝等可勵功矣、公每人  
 褒功、大聲而勵兵也、頗如雷、因德山五兵衛諫之云、惜聲大將軍之故實、公諾、既而與瑞龍院殿  
 共卒軍向城背、俗曰、搦手、於此成政壯士本庄市兵衛、野々村主水、櫻勘助、齋藤半右衛門、堀田次郎  
 右衛門數輩欲與拜刀俱殞命、而不亂列待公之軍兵、公兵士半田半兵衛、野村傳兵衛、山崎彦右  
 衛門、小泉彌市郎、阿波賀藤八郎、江見藤十郎、岡本七助、吉川平太、井口茂兵衛、侍臣篠原勘  
 六郎、富田六左衛門、富田源六郎、木村久三郎、北村作内、村井久三郎各競進爭功、田差物、且悔且悲云々、既半田半兵  
 衛大聲、一番鑓是吾也先衆、然中櫻勘助所放鳥銃、不遂素意、半田與櫻從弟、因櫻粗思半、可謂不幸也、  
 櫻勘助精火炮、透首鑓碎腦骨、得武藝一事之妙、故公兵士爲之死傷者最多、公見之進鐘馗旗、  
 自操金切裂之旄、勵兵累進、瑞龍院殿手節旄先衆、勇氣最盛也、壯士發矢揮刀奮戰太甚、野村  
 傳兵衛、山崎彦右衛門合鑓、二士爭鑓一二、野村名謂以合鑓爲一、山崎次之、依此功授感書及食祿、城兵亦開門  
 戮力、急夾擊之潰圍、因是公軍兵乘機大擊破之、越兵野々村主水、櫻勘助、本庄市兵衛、堀田次

郎右衛門、齋藤半右衛門等七十餘人苦戰殞命、敵軍大敗走、吾兵追止逐北、斬首七百五十餘級、  
 獲隊長首十二級、公乃凱旋而入城、々兵大歡唱萬歲、公感城兵曰、雖圍大兵僅隔本城壁柵一重  
 也、遂不屈勇氣、不有外心、堅拒守之、可謂義士也、此役之勝偏有汝等忠功耳、意氣懇々、亦召  
 奧村永福、褒美守城大功、賜感書及鐘馗馬幟、金切裂之麾、所著之金鎧、兜鍪佩刀大小、瑞龍院  
 殿亦賜感書於永福、衆皆莫不羨慕焉、召千秋主殿感軍勞、與瑞龍院殿共賜感書及食祿、召永  
 福妻太褒其忠勇、稱賢女賜恩裳、(實)依守兵勇士之功勞恩賜各有差、永福、千秋共拜命之辱曰、此  
 城之無恙、越兵之敗亡、君之神靈威武所變化也、(實)成政在坪井山、聞戰已敗越軍敗走、而大怒  
 憤恚、颺言曰、我以武功立英名於天下、未有敗衄之耻、今日折兵受耻、最遺毀於後世者乎、可何  
 面目歸陣、於戲惜哉、氏春怠惰不知多軍援兵也、整軍粧將赴末森大戰、以佐々平左衛門爲先  
 鋒、卒七千人進兵、神保氏春在川尻、不知公軍兵越川、比到今濱邊、聞之大驚駭、與自金澤遲來  
 之兵士、屢拒之放鐵炮、既而引兵到坪井山、恐人口之笑嘲、且憚成政之怒罵、幡然無言、然成政  
 不譴責之、相共進兵、公聞之曰、吾軍勢氣百倍、膽氣愈將也、(壯力)成政與吾戰忽大捷、直入越刃、剪  
 滅割絕佐々氏族枝葉、何怖畏之有、諸將群士勇進復與之戰破軍必矣、公定軍備、村井長賴爲先  
 驅、奧村永福、多野村三郎四郎爲二陣、不破彦三次之、瑞龍院殿繼之、以本陣爲中軍、其餘後軍  
 濟々焉、軍令滋章也、(實)成政頻雖欲戰、觀軍不可利、廻旆旋軍、此時本多三彌、東照大權現之勇士也、  
爲武者修行經歷諸岳、



成政ノ兵  
多ク金殿  
斗ノ差物  
ヲ用フ

長連龍戰  
ヲニ遅レシ  
切ルデハ  
切ル

天正十二年九月十一日

100

數有、勸公曰、唯請可決一戰、頻強之、公思孫子武之歸師勿遏之者與亦知兵法殘勝之心深、而不肯聽、成政兵士大抵以金熨斗爲差物、因坪井山頗如金山、公視之褒其軍粧美麗曰、吾遂擊滅成政畢、令本軍之兵士以金熨斗爲指物耳、衆皆感其大志、貶當白子濱在備、此兵未知自何處來陣也、公使脇田善左衛門、野村七兵衛候視其勢、是長九郎左衛門連龍、援末森觀不背義而死不爲之羞慙、而來于此也、野村、脇田感之、連龍聞戰場畢、大怒曰、吾欲速發兵七尾、諸將頻抑留之、因停滯不遂素意、吾盍耻之哉、手剪髻、二士駭馳歸告公、々大感之、亦馳二士召連龍、奧村永福感之、令吉田右近遣連龍感謝出軍之勞、既而連龍來本陣拜謁公、々瑞龍院殿共褒美連龍不顧万死出軍忠肝義膽、衆皆美談焉、時公謂左右曰、成政爲歸師讜襲津幡乎、末森如故使奧村千秋等守之、卒九千人赴津幡、貶中條半右衛門黎民數百人斬木爲兵、結紙爲旗、登津幡中條邊之峯頭、却越軍、成政班軍到鳥越邊、城主目加田又右衛門、丹羽源十郎等聞成政末森之急也、愕然無意守城、棄城連逃爲空壘、成政數窺之、而無一兵、成政歡曰、不煩一兵、不傷一士、無事而得城者也、諸臣皆歡謂、君武運榮威、因成政心獨自負、公歸津幡城、爲告末森之事、遣小林喜左衛門於鳥越城、小林馳歸告丹羽、目加田棄城逃行、越軍入城、公驚慍曰、不見敵遽逃乎、前代未聞之懦弱也、匪獨一身耻、是吾亦所可恥也、何則使彼矮羸守城、吾弗深悟人強弱之謬也、是兒童走卒何不睡笑哉、莫其耻大焉、吾急進攻破之、汝等夫奚如、群臣僉不悅、諫曰、爲鳥越之地

280331

形也、最險窄也、若強卒兵盡日止攻、士死傷者必多、而不拔之則羸師勢屈、何益之有哉、因同十  
二日酉刻歸金澤、人民來邀皆稱賀、衆皆謂、自古雖有救危急之類、未嘗聞如此之甚、本朝無  
双之後援、大膽大志若此人、不得取四海則孰取之爲、嗟呼善哉、大喜、成政亦令久瀨但馬守守  
鳥越壘、歸富山、○中略、前田安勝、荒山等ノ岩ヲ攻ムル  
コトニカ、ル、本月十四日ノ條ニ收ム、公馳使於秀吉、是爲告末森之後援戰勝之功也、  
時秀吉之使者到金澤、是丹羽長秀越前、若狹、加那能  
美、江沼之主也之家臣村上次郎右衛門、溝口金右衛門在加  
羽小松、而聞末森之役及勝山沒落之事、依馳飛使告之也、秀吉感書其趣云、今日十六日酉刻溝  
口金右衛門、村上次郎右衛門尺素到著、聞佐々成政卒大兵、依攻能羽末森城之急、足下發金澤  
救之、大擊破之、取野々村主水等數輩之渠魁及群兵之首數百級、吾極愉快焉、亦聞能羽七尾之  
諸士攻破勝山壘、取若干之首級、諸方兵事如合符節、貶成政含憤雖在俱利迦羅山、劫足下之威  
風、遂班軍者乎、所不足恐也、吾今於尾羽奈良羽、(新カ) (新カ)  
柴ニ作ル一宮後、幸田構三之砦、修築之功頗成、二三  
日之間積糧貯置玉藥、每壘令兵士四五百人守之、廿五六日之頃歸于岐阜、伺視敵勢、因貶宜  
可應變矣、足下勿敢勞心、亦廿日頃丹羽羽、別本羽  
柴ニ作ル長秀可歸國矣、猶與長秀合心夫可乎、益聞  
足下振武威於北羽而已、九月十六日、秀吉命諸士、礮成政女及其乳母於栗田口邊、視者悲嘆、○噴  
別本  
淚ニ聞者悲歎、時人皆毀惡成政曰、親棄子非人情、天豈不惡之乎、成政亦身死人手、爲天下笑者  
歟、○下略、利家、鳥越附近ヲ火クコト  
ニカ、ル、十月十四日ノ條ニ收ム

天正十二年九月十一日

101



成政ノ兵

○以下、利家、利勝及び其麾下ノ士並ニ惟住長秀ノ援軍等ノコトニカ、ル、

〔寛永諸家系圖傳〕

百三十四

前田利家

はしめは前田又左衛門尉と號す(生國尾張)

天正十二年九月九日、佐々内藏助

俄に一萬人を率て、城をせむる事一日一夜、伊豫守以下城中の士ふせきた、かふといへとも、大敵急にせむる故、僅に屏一重をへたて、翌日未の刻、急を利家か居所加州金澤の城につ

く、利家、長子利長(利勝)と共に津幡に馳いたる、利家、利長鎧の上帯を切、十死一生の意をさため、三千人を率ひ、夜を日につひて進發し、同十一日のあけほのに末森の城にいたり、内藏助か

陣を撃、先陣すてにいたりて敵と合戦す、利家は道をかへ旗本の兵を率ひて急に馳、山崎彦

右衛門、野村傳兵衛、○寛政重修諸家譜、前田利家譜、信貞トアリ、半田半兵衛、富田越後守、北村三左衛門を先登とし、或

ハ鑓をあわせ、あるひは首をとる、凡物頭(ツ)の首十二級を得たり、其餘なを敵おほしといへとも、開きなひし圍をとく故に、利家、利長城に入事を得たり、内藏助か兵やふれて來路を認

とあたへず、加賀路より退て越中にいたる、利家、利長内藏助か加州にむかんとする事をうたかひ、夜中に濱邊より歸り、同十二日の朝津幡にいたる、内藏助せんかたなうして、遂に

退て越中に赴く、その、ち利家伊豫守かよく城を守る事を感じ、秀吉に告て從五位下に敘

〔寛政重修諸家譜〕

千百三十一

前田利長

初利勝、犬千代、孫四郎

(天正)

十二年九月、佐々内藏助成政、太閤にそ

す、○上下略、利家、永福ヲシテ、末森ヲ守ラシムルコト及ビ秀吉、成政ヲ討ツコトニカ、ル、十一年五月十一日ノ條及ビ十三年八月二十日ノ條ニ收ム、

むき、父か所領能登國末森城を圍みせむるにより、父にそふてた、かひ、大にこれを敗る、

○上下略、寛永諸家系圖傳、前田利長傳、コノコトヲ載セズ、

〔村井重頼覺書〕

先日一書被成御越候間、大形及承候通書付進上申候、○中略

一末森殿と申候ハ、大納言様御めいこさま土井但馬殿御内儀に御座候、能州末森城にて、但

馬殿煩て遠行と承及候、但馬殿臣下土井伊與守、末森佐々内藏介殿せめられ候時討死、

一末森殿土井但馬殿御子息與三ヲ青山佐度殿御養子候て、後ハ青山豊後(豊)に成被申候、其弟に

土井四郎左衛門今こ其地居可被申事、○中略

二月四日

又兵衛

兵部殿へ

村井豊後守代越中陣方家來共討死、手柄いたし候もの共、

一吉川平太

一江見藤十郎

一大くほ小一郎

(此三人、末森ノ時、豊後そはこて鑓ヲ付手柄仕、後ハ御馬廻に被成候事、)

天正十二年九月十一日

重頼家臣



天正十二年九月十一日

一〇四

- 一 間野新丞
  - 一 竹下二藏後は彌二右衛門
  - 一 三木十内
  - 一 就波才兵衛（備カ）
- 同末森ノ時、手柄いたし討死、色々物語有之、  
同末森ノ時ハ、未若とう候へ共、其時豊後そはこ手柄いたし候、  
末森こ氣分よく候故、後ハ  
のほり大將こ被申付候、

〔有故家覺書〕 前編

天正十二年九月、能州末森にて討死之人々、

土肥伊豫

柳ヶ瀬にて討死之土肥但馬せかれは、まだ幼少に付、但馬弟の伊豫後見仕候、末森は、越中境要樞之地ゆへ、奥村助右衛門、千秋主殿助を被遣、伊豫と三將にて守らしめらる、九月十日、佐々成政取懸候時、伊豫先祖以來相守候城下を破らる、事を無念成とて、町口へ出て防戦、討死仕候、子孫も無之、奥村、千秋は能守て不出城を持堪え候也、

堀半右衛門

初ハ喜市郎と云、

天正十一年兄堀與八郎、弟堀左太郎同時に被召出、其後名半右衛門に相改、末森御後卷之時

末森合戦  
参加者ト  
其子孫  
土肥伊豫  
守

堀半右衛門

分、御供仕討死、此子孫嫡流は、唯今の堀孫六也、

堀左太郎

堀左太郎

右堀半右衛門弟一所に討死、此者子孫無之斷絶也、

右末森にての討死は、三人之外不承傳候事、

末森之少前八月廿一日、朝日山之取出に村井又兵衛罷在候、見廻に罷越候御馬廻兩人、

阿波加五郎右衛門

江見藤十郎

阿波加五郎右衛門  
江見藤十郎

右兩人之子孫不相知、

末森御後卷之時分御先手、

種村三郎四郎タチムラ

種村三郎四郎

此三郎四郎、以後に淺野家の御招きにて罷越候由、依之子孫無之、但宮川久右衛門家少々由緒有之由申傳候、

片山内膳

岡島帶刀左衛門

片山内膳  
岡島帶刀  
左衛門

右兩人之事、前にも記之、帶刀左衛門は岡島備中守事也、

天正十二年九月十一日

一〇五



天正十二年九月十一日

末森之時金澤御留守居、

篠原彌助

篠原彌助

様子前に有之、

末森にて鑓を合候人々、

山崎彦右衛門

山崎彦右衛門

山崎閑齋甥也、此嫡流唯今山崎彦右衛門也、

野村傳兵衛

野村傳兵衛

此子孫は、野村家多し、野村七兵衛、野村七左衛門等也、

半田半兵衛

半田半兵衛

此者荒子御譜代、前に記之、但鎗折候て刀にて強く働候由、

右同所鎗下高名、

篠原勘六

篠原勘六

前に記之、後出羽守事也、

北村三左衛門

北村三左衛門

此者北村二代八兵衛歟、左候へ前に記之、但し八兵衛と別ならハ、委しき儀不知之、

富田六左衛門

富田六左衛門

前にも記之、荒子以來御奉公仕候由、此末唯今富田久米之助也、

末森之前夜濱通にて雲張仕候弓之衆、

大鹽大海

大鹽大海

此者之子孫相知不申候、

末森之前後村井又兵衛與力之内にて御用に立候者、

間野新丞

間野新丞

此者子孫不相知、

小林彌六左衛門

小林彌六左衛門

此者之子孫唯今村井主膳家來に有之、

屋後太右衛門

屋後太右衛門

此者之末與力之内に有之、

末森之砌、鳥越之城明退候者、

目加田又右衛門

目加田又右衛門

丹羽源十郎

丹羽源十郎

天正十二年九月十一日

一〇七

一〇六



此兩人直に欠落仕り、子孫無御座候、  
右久敷儀故、少々相殘候趣を書集置也、  
猶天正十二、十三兩年、越中との御取合に骨折候衆多く可有之事也、

〔有故家覺書〕

後編

從大阪御陣以前之御譜代之人々子孫有無等之品相考置分、

有澤森右衛門考之、

一御夜話之書に出る所之人々名、

與十郎と申細工人、

此者之事前後不相知候、

住善坊

山崎住善坊也、此末今之山崎久兵衛也、

高昌金左衛門

此子孫高昌金左衛門歟、

瀧津金右衛門

末森之城に籠る歟、後は大西金右衛門と云、寛永廿年之頃迄存命歟、知行千石、

細工人與  
十郎

住善坊

高昌金左  
衛門

瀧津金右  
衛門

魚住隼人

博士

利家公御いとこほと御つゝき有之と云、子孫等不知之、

魚住隼人

末森之時御留守、子孫不知之、

はかせ

末森之時津幡にて御用相勤候、此者後金澤にて御屋敷被下之、其身一代は百俵御合力被下之  
候由乾貞寺之始祖と承傳候事、

〔國初遺文〕 大西金右衛門覺書

一能州末森は城代に奥村伊豫父子三人罷在候處、佐々内藏助罷出攻被申候刻、内藏助河尻に  
陣取罷在被申候處に、爲加勢私に御馬廻衆二拾人御添被遣候、内藏助多勢に而攻申に付  
而、利家様末森後卷被成、河尻表を御掛通被成、末森は被爲入候、敵數多御討捕被成、則内  
藏助をひに而御座候野々村主水、堀田二郎右衛門兩人物大將御討捕被爲成候、此御手柄天  
下之御勝に罷成、太閤様御感に而御座候、猶以奥村因幡守存可被申候御事、

〔可兒才藏誓文日記〕

一右十二年之末森陳ハ、佐々内藏助奥村氏ヲ攻メンタメ末森エ押  
寄、既ニ奥村危段、利家公被聞召、末森迄御出馬ニ付、某モ御供被仰付候、達者剛強之者御  
ヨリ、人數八騎ハ御急ギニ付、御馬廻之御供ト被仰出、道ニテ大切之人留ニ御先エ某ヲ物

天正十二年九月十一日

一〇九

可兒才藏  
從軍ス



天正十二年九月十一日

一一〇

見ニ被遣、其首尾ヲ相勤、預御褒美、

○中略、夜廻祕法ノコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一末森之城主奥村助右衛門尉ヲ佐々内藏助取懸リ、手痛攻戰フ、勿論大守公モ後見ニ被爲成御出馬、各御供申者火花ヲ散シ、行懸リニ相働、面々有戰功、又ハ不幸ニシテ打死、手負候者モ有之、大手エ敵方馳集リ、竹楯其外盡軍慮、無間無透、平攻ニ攻ル時、助右衛門尉大手ノ角矢倉ニテ下知ノ在リ、子息助十郎搦手横相ヨリ打テ出、自身働ニ及フ、其時佐々氏家ノ子佐々勝五郎ト申傳無隱勇力之者ニテ有之兵モノ、奥村助十郎ヲ見懸、無二無三ニ打合せテ暫勝負ヲ決ス、大守公被及御覽、助十郎ウタスルナト蒙御意、折ニ幸ト思ヒ、入亂レタル真中一散ニ馳敗リ、可兒才藏蒙上意、助情仕ルソト、云フヨリ早ク、勝五郎ヲ鑓ニテ一ナグリナクリスエタレハ、鑓ノ柄程ヨリ折シタリ、助右衛門尉是ヲ見、矢倉ヨリ鑓ヲエイヤウト投越、見タルヤ可兒殿トヨバワリタル、大音耳ニ入、則彼鑓ヲ戴、彌氣ヲ得テタ、ミカケ、勝五郎ヲ捕ヲサエ、助十郎ニ遂本望サセタリ、内藏之助是ヲ見、ソレモラスナト下知ヲスル程ニ、ウン蚊ノ如クタカリ懸ル、其足双ヲ見合せ、彼勝五郎ガ馬ヲ引寄せテ、則飛乘リ、無二無三ニ懸敗リ、御本陳エ參ケレハ、味方ニテ城中迄吐氣ヲ舉タリ、時之面目ト申、預御感美キ、其時奥村ヨリモライタル鑓ハ左衛門尉金房政定之作鑓也、于今所持之傳

才藏牢人トナル

ル者也、

一自末森御歸陳後有自餘之妨、賀州牢人仕、尾州以來之御芳恩ヲ令忘却ニ似リト雖、某達存念御家ニ居候時ハ、御爲ニ不罷成品々有之ニ付、無是非罷退、牢人ト罷成候、根本之御主君ナレハ末代忘却仕間敷事、

成政ノ馬驗

一佐々内藏助馬驗ハ管笠三盖ニテ有ヲ、奥村助右衛門尉鐵炮ノ名人ニテ、三盖ナカラ射落シ、諸輩吐氣ヲ舉ル、弓鐵炮之名人ニ一陳ニテ指物等射敗レテハ、殊之外見苦敷事ヲ節々見及故、某シハ切竹ニ少枝ヲ殘シ、指物ニ一生人双ニ相勤ル也、○下略

岡本七之助

〔壬子集錄〕村井又兵衛手紙

岡本七之助と申者、佐々内藏助殿馬廻こ而御座候處、越中御取合之前年、不足を申暇を乞上洛仕處、金澤こ而利家様被召抱四百石被下、末森之時分もよき働仕候、勇士之聞へ御座候もの候處、後病者こ罷成御暇申上、越前織田庄へ引籠罷有もの、よし、故又兵衛爲申聞候、

末森記ト岡本七之助覺書

一關ヶ原記、大田和泉記録仕置申候書物寫置申候、自然いまた不入上覽候者、重而可指上候、一岡本七之助加越御取合之一卷、越前長見右衛門所望こ而、織田庄こ而致覺書出申候書ハ、板行仕候と相見へ、末森記と題號御座候書、故又兵衛存生之内板本一覽仕候、手前へうつ

天正十二年九月十一日

一一一



天正十二年九月十一日

一一三

所持仕候と文言替儀者無御座候得共、惣別七之助覺書少相違之儀御座候由、故又兵衛爲  
申聞候御事、以上、

七月十四日

村井又兵衛

横山志摩様

〔加能越古文叢〕四十

覺

割符

- 一 御鑓もち百參拾人割符之事、
- 一 鐵炮衆之内より御歩衆こ成へきものゑらみ出候事、卅人の事、
- 一 御のほり并小指もの、御馬しるしもたせ可申候事、
- 一 御泊へ米調被遣可申候事、
- 一 御泊御宿與右衛門尉之事、
- 一 御泊きへめの事、
- 一 御先へ被遣候御荷奉<sup>(調カ)</sup>候事、
- 上包書付
- 末森御陳之時分被遣候御目錄

元祖半右衛門<sup>22</sup>御渡被下候、

右北徴遺文載之、

原書加賀國河北郡北中條村半右衛門所藏、

寛文四年閏五月、半右衛門由來書左の如シ

覺

一 先年於筋谷我等祖父、稻川主馬丞三千計之勢こて押寄候を、鐵炮持掛追散、親十八之時す  
み出、矢嶋治大夫と申敵之首を討取候義、無紛事候、其時親を隼人と申候、其後中條へ  
ハ聳入之事、

一大納言様賀州<sup>22</sup>御入國始之比、御分領所々御城佐々内藏介端々被入手、筋谷<sup>与</sup>申こ堀才記  
右衛門<sup>与</sup>申て五千石取仁と、我等伯父勘之丞兩人こ仕置申付被置候處、大納言様拙子親半  
右衛門を被召寄、此時之事候條、勘之丞、才記右衛門を何とそ引込くれ候へ、越中手こ入  
候半、千石可被下と御直こ堅被爲成御意こ付、慥こ御請いたし、内藏助筋谷<sup>与</sup>鳥越其外近  
邊諸口こ伏兵を置、用心きひしく、中々通も不成様こ仕置申處を、半右衛門中條<sup>与</sup>筋谷へ  
夜々忍ひ入、勘之丞こ逢、致逆心くれ候へと頼申候へハ、勘之丞以之外しかり、よせも不付  
候を、數度參種々申て、終こ兩人者共こなたへ引込、扱内藏助手立次第親日々こかよひ、

天正十二年九月十一日

一一三

稻川半右衛門利家  
ノ命ニヨ  
リ稻川勘  
之丞等  
之丞内應  
セシム



兩人承知、毎日大納言様へ様子を直々可申上由、就御定、日々申上候へハ、殊外被爲得大利候義被成御感、其様こハ草臥候而成間敷候間、今日よりハ中條其方か所迄岩出才平、屋後多右衛門彼等兩人之者替可遣置候間、其方ハ四日五日ほどあひを置て參候而、直口ヲ爲聞くれ候へと、御直こ御意こ付而、如御誼相勤申候處、はや越中被爲入御手こ、追付親こ貳百石之御折紙被下候を、乍憚其御一行指上申由候へハ、勘之丞子ハなきかと被爲成御尋、歲十四之時、勘之丞子松本角大夫と申者被召出、御小性こ被召仕、御前御奉公仕處、奥村攝津守殿備前へ被爲遣候時、能者持不申由御斷候由候へハ、松本角大夫御指添可被成と被仰出候故、被致御請、扱攝津守殿と御同道こ而、備前へ罷越、三ヶ年目こ替を被遣、攝津守殿も御歸こ付而罷歸候へハ、それより攝津守殿與力こ被成、攝津守殿御死去こ而、越前へ罷越、本多伊豆殿へ先知こ而有付、其孫共今越前こ多有之候、松平主馬殿こも中西作右衛門と申て、孫掣五百石取居申候事、

一大納言様末森後卷被爲成、無比類御作法之旨、其上伊豫殿御裁許殘所無之由申傳候、内藏助そなへを早速引申義、金澤明城こ而可在之間、引足こ乗り可取と、吉倉野迄人數押寄候へ共、其以前度々夜討入申こ付而、大納言様、不破彦三殿へ親申上候、旌百本、大身の鎗百筋、半右衛門屋敷廻りハ山岸目通り分段々こ立置候處、先手勢是を見て、内藏助へ其旨注

成政利家  
ノ留守ヲ  
野ノ出ツ  
トノ説

進申候へハ、さすかの大納言殿明城こハ仕間敷、定而上方人數加勢入候半間、其段之内こ急キ引取候へと悉引申由、其時金澤ハ徳山五兵衛まで御城代こ御入候而、あふなき事之由、

一大納言様も其節金澤無御心許被爲思召、從末森御急キ、朝四ツ比こ津幡御懸付被爲成、五兵衛殿も津幡へ被罷出、親も其場こ而致御目見有之候へハ、親を御ゆひさし、五兵衛殿へあのものハかなめの用事こ立候、惣而北口ハあれに懸り候と、津幡辻こおゐて、御馬之上こて五兵衛殿へ被成御意候義、則津幡清左衛門、新右衛門、加兵衛かれら家まへにて就御意、此者共直こ承候由、折々咄候を聞申候、其上親ケ様こ物語仕候義、せかれより承届候、右之如く被成御意、いそぎまた末森へ御乗返シ被成候へとも、敵悉引申こよつて、又濱通被爲成御歸陣、宮腰主計所へ御腰被爲掛、扱金澤へ御入城被成候由承申候、右之通親粉骨を盡シ御奉公之義こ候へハ、兄勘之丞御奉公故ニ内藏助搦捕相果申候、才記右衛門ハ致手向候旨、則子息爲知勘承こハ一言不及聞、急キ中條へ其身壹人計立退、不屈之旨、大納言様被爲成御意、御目見ハ不被成様承候、

一親系圖之事、本地ハ佐々木之筋、紋ハ丸ノ内こ四ツめゆい候、いつれとも佐々木一年被構天下牢人こ付、富樫殿ハ近江へ迎ヲ被爲參、加州松任へ御よひこし、則町屋こ御入候を、

半右衛門  
ノ家系



是ハ餘り端近く御座候間、當分名字をも御除、在郷被成可然と被申候、石河郡之内松本といふ在所見立、居館普請被仕候處、富樫殿被見廻、盃被成候由こ候へハ、佐々木殿前々(江カ)いづく共不知幕之内へ柏葉吹來候を、佐々木忝と取て戴き、それより四ツめゆいを除、則丸之内こ三葉之柏、名字も除キ、在名をつき、松本こ被成候と申傳候、已後富樫御申候は、越中と加賀界こ筋谷と申て、此在所草深キ能在所こ而、堺目之事こ候間、あれへ御越可被下と申され、以御指圖引越、則城郭被拵令居住、其代々我等祖父松本宗左衛門と申まで、八九代目かと親申候ひつる、如此承申分あら〜書記置申候、乍去今時分かやうの義いらさる事こ候へとも、右之ことく親粉骨つくし申たる儀、爲其方こハ祖父之事こ候間、聞置苦しかる間敷候と書置候、他人こハ必〜見せも語りも仕間敷候、以上、

寛文四年辰閏五月十六日

半右衛門

形見こ八重郎方へ書之置、

八十郎ハ今の北中條村半七郎、幼少之時分親半右衛門死去仕候こ付而如件、

右國事雜抄載之、

原書北中條村松本半右衛門所藏

按こ、右半右衛門家傳由來書ハ、一家の傳聞書にて、其徵證も如何敷といへとも、祖先の傳話

をその儘書綴りたりと見ゆれば、舊記の缺文を補ふに聊補益なきにあらず、故に長文といへとも、全文を爰に載す、但し書中傳聞の誤りと覺しきものなきにあらず、中にも末森後援の時などの事とも、外記録に載さる事多し、虚實如何、尙勘考すへし、おもふに、前田安大夫記に、佐々ハさる勇將也、留守を心かけて、加州へ亂入せん事案の内也、いさや歸陣せんとして、利家加州へ趣き給ふ、利家の下墨の如く、佐々河北郡こ發向して、已に津幡の町口押破ぬ云々と載たり、是も傳聞の誤りなり、成政此時津幡まで來りたるにハあらず、されハ中條村邊へその時出勢すへきよしなし、世を經るに隨ひ、追々過聞したるを聞取て、傳説のまゝを記載する故也、

〔長對馬守續連事蹟〕 伯父長九郎左衛門續連并父九郎左衛門連龍事跡

同十二年、佐々内藏助、神保安藝ト謀ヲ合セ、能州末森ヲ攻ントホツス、因茲先氏春其勢三人ヲ

シテ、連龍カ徳丸ノ堡ヲ攻メシム、連龍出丸ヲ構へ、窪田カ館ト號ス是ヲ防キ、間人ヲハナツテ、氏春

ヲ欺キテ引退カシム、退ニ及ンテ數輩ヲ討捕ル、

同年、佐々内藏助來テ末森城ヲ圍ム、

利家様嘗テ連龍及七尾ニアルノ諸士ニ命シテ曰、若末森ニ事アラバ、汝等宜救之、予亦急ニ救ハン、且金澤御出陣之時、連龍及七尾ニアル諸士ニ御書ヲ賜テ曰、成政ヲ逐ヒ討ン爲ニ、末



森城ニ向フ、汝等亦速ニ末森ニ來ルヘシ、因茲連龍手勢千餘人ヲ卒シテ、末森ニイタル、金丸湖邊ヲ過ルノ時、末森城益危急ナリト聞テ、馬ヲハセテ徑ニススム、利家様速ニ是ヲ御救、因テ佐々兵ヲ引テ歸去ル、連龍自ラ遲參ヲ憤テ、利家様へ言上シテ曰、嚴命ヲ受奉リ、御合戦ノ手ニ不合コト、可恥之甚也、須ク武事ヲ捨テ、山林ニ入ント、利家様是ヲ諭シ玉ヒ曰、汝一人抽テ來ルコト、可謂武ニシテ又勇ナリト、何ソレツレ恥之ヤ、是以強テ自寛フシテ歸ル、

尾州小牧、同竹鼻ノ戦ニ連龍秀吉公ノ御軍中ニ在リ、

〔丹羽家譜〕

長秀

（天正十）

同年九月、加州末森ノ城主奥村助右衛門前田利家ノ家臣、佐々内藏助成政カタメ

ニ圍マレ、急難ニ遇フ、因テ利家之レニ向フ、時ニ長秀家臣村上義明、溝口秀勝ヲノ兵三千ヲ率ヒ、利家ヲ援ケ、佐々ノ軍ヲ破ラシム、○丹羽歷代年譜、丹羽系譜并年譜、丹羽家譜傳異事ナシ、

〔寶廟記〕

○武藏

（天正十）

九月、佐々内藏助成政の方より、前田家の領地末森の城を攻ければ、長秀君

より援兵をさしむけられ候へと仰せ越されければ、（溝口秀勝）則候ならひに村上次郎右衛門尉と、都合三千餘兵にて、末森へ御發向ありしに、利家君の頼みにまかせ、金澤の城を守り給ふ、

〔祕笈叢書〕

○加能越古文叢四十一所收

堀覺左衛門高名覺書

乍恐以書付申上候、

堀與八郎  
同覺左衛  
門ノ戦功

一先年（和略）高岡様松任（和略）被成御座候刻、我等兄堀半右衛門、同弟左太郎御奉公仕候處（和略）、末森御後卷之時、兄弟ながら御用に相立討死仕候事、

一私兄堀與八郎、まへかと佐々陸奥守所（和略）奉公仕候、其後關東御陣之刻、高岡様へ被召出御供仕、八王寺御攻被成候刻討死仕候、其せかれ堀久右衛門被召出、殿様御代迄被召仕、大坂御陣（和略）にて、是も討死仕候、跡目御立被下候義難有奉存候、何も如御存知、拙者兄弟八人御座候内、はや六人討死仕候事、

一先年私陸奥守所（和略）有之刻、陸奥守末森攻申時、我等兄與八郎先手仕候（和略）付、私一番乗込申處、土肥伊豫と名乗返申、則彼伊豫我等討取申候、此伊豫と申仁ハ末森（和略）にてかた大將にて御座候、其上三ヶ國へかくれなき覺の者（和略）にて御座候へハ、陸奥守大方ならず悦申候、其時私十六歳（和略）にて御座候、其刻陸奥守所（和略）有之衆今御家中（和略）可有之候、御尋可被成候事、○下略

○利家、永福ヲシテ、末森城ヲ守ラシムルコト、十一年五月十一日ノ條ニ、成政、加賀朝日山ヲ襲フコト、本年八月二十八日ノ條ニ、利家、鳥越附近ヲ火クコト、同年十月十四日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕

ヤ之部

山下正久

天正十二年九月十一日

花押



# 山下甚八郎

○護國八幡宮文書(國中)  
八月三日附、殖生民部丞宛山田  
藤右衛門尉、山下正久連署書狀

成政富山  
時出發ノ日

## 〔越登加三州志〕

十 變餘考十

成政攻末森、奥村永福等固守、二公急援得捷、

八月十日ト、世本、十日ト

日トス、並非也、寛永十八年官へ上ラル、由緒ニ、九日、佐々俄卒一萬人、攻城一日一夜トアリ、然レハ、九月ハ攻城ノ日ナルヘシ、左レハ、富山發旗ノ日ハ八日ニシテ、富山ヨリ能州マテ里數モアレハ、其夜ハ坪井山下營、翌九日、晝夜攻城、十日、國祖後接トシ、金澤ヲ發シ、成政能、賀ノ通堡末森、又作末守、在羽咋郡吉田村領、今猶ヲ攻メ、能、賀ヲ十一日ノ曉、末森へ至ルナリ、  
間斷セシト、去夏ヨリ末森ニ公ヨリ勇將及ヒ兵五百許置ト云、置奥村、富山ヲ發旗シ、能州奥郡へ出軍ノ形勢ヲナシ、末森問答ニハ、俱利加羅マテ人數ヲ押出ス體ニシテ、一萬五千ノ軍兵ヲ率トアリ、然レトモ當月十九日、秀吉公ヨリ國祖ヘノ書中ニ、内藏介企野心、多勢ヲ催シ、能州奥郡へ可向體ニ變シ、不意ニ末守ニ押寄トアルヲ以テ證トメ、景周、一萬五千アリ、小瀬市巷ノ大閣記、其它皆一萬五千トアリ、ノ甲兵ヲ率キ、夜ニ入、此夜小瀧ル、行軍ヲ進メテ、礮波郡ノ宮島ヨリ、宮島谷道ノコ、澤河ニ至リ、澤河能越二州ニアリ、佐々、農夫田畑兵衛ト云者ヲ變導トメ、牛首、二出テ、是ヨリ西方菴ヲ導引トメ、險路ヲ經、ノ間道ヨリ押水

坪井山ノ  
形勢

成政ノ陣  
立

へ出軍、村々ヲ旅火ストアリ、又一書ニ、此時成政加州ノ鳥越堡ヲ攻ント、富山ヲ發シ、澤河ヨリ下河井ノ地ニツキ、小川驗之助ヲ郷導ノタメ、田畑兵衛ヲ求メテ、行軍ヲ押ケルニ、兵衛我公ニ傾心アルニ、却テ險難ノ險道へ成政ヲ導キ行ホトニ、越兵困苦時刻ヲ費シ、漸ク十一日、吉妻野ニ著ス、成政此所ニテ軍議シ、末森ヲ拔ント、壺井山ニ下營ト云、斯テ末森ノ役公利軍ノ後、此礮波郡澤河ノ田畑兵衛へ、兵衛是マテ能州口郡先領主三宅彈正家秀ヨリ與へ置所ノ羽咋郡志雄堡南山ノ内蛇崩、十八尾并泉原三ヶ所ヲ、天正十二年十一月六日、此恩賞トシ、公判書ヲ以テ、永代賜之、被扶持也、自夫代々印書ヲ賜リ、今ノ兵衛ニ至テ無別義、其御書今猶家藏ス、但シ長十年一紙檢地ノトキ、右關山ノ内關田ヲ置高上ノ石三、(前註)景周曰、古者項羽垓下之敗、至陽陵迷失道、問一田父、田父給曰、左右則陷大澤中、以故漢追及之、今佐、先鋒吾妻野、今作東野、々成政亦爲一田父欺、險難難所窘、蓋祐仁者、惡不仁者、雖人情之常、如此二田父不亦甚哉、  
十町、天神林ニ今猶有、陣ヲ取レハ、本陣ハ坪井山麓ニ據テ下營ス、坪井又作壺井、末森ヨリ一里半強アリ餘、四里トアリ、可參考、高澤忠順云、坪井山成政陣跡ハ、末森ヨリ南一里餘、山上ニ其延三十間計ニ、表七八十間許ノ地アリ、今其山麓ニ農家アリテ、即之ヲ坪井山村ト云、景周、末森古岡ヲ按スルニ、成政坪井山本陣ヨリ、能州寶達山通リ峰ヲカキリテ、越中ノ地界マテ道程五里、或ハ四里、或ハ險シキヲ厭ハサレハ、捷路三里奇アリ、此ニ軍配アツテ、一書ニ越中ハ元ヨリ皆成政領分ナリ、左レハ敵地へ此度三四里踏入也、坪井山今ハ皆畑トナル也、  
妻野ニテ軍配トアリ、末森問答云、其備配ハ、先ツ大手ノ籠城戸へ前野小兵衛、佐々平左衛門、本庄清七、矢部五郎右衛門之ニ向フ搦手ノ長坂通へハ野々村主水、本庄市兵衛、齋藤平右衛門、櫻勘助、堀田次郎右衛門攻寄、東ノ方若宮九ト三丸ノ後虎口へハ野入平右衛門、寺島甚助、同牛之助山ニ沿テ押寄ル、旗本ノ前備ハ佐々平左衛門、山下甚八等也、又相輝ノ神保安齋守、其男清十郎ハ三千餘ノ人數ニテ、金澤衆ノ後援ヲ押ヘトメ、河尻ト高松トノ間沙山ノ松原ニ陣ス、  
神保父子ハ兵四千ニテ北川尻、へ出張シ、陰陽二隊ヲ設ク、是尾山ヨリノ援ヲ防カン爲メ、  
河流ヲ陣前ニ當ルト云、神保、河尻ト高松ノ間沙、斯テ九日、成政ノ前軍野々村主水、二百二十石野々村勘左衛門及傷斷絶、貞享四年、千石大小野々村忠左、久世但馬、成敗スルコトアリ、然レハ此但馬ノ子孫越前ニ仕ルカ、衛門追放ス、按ルニ、是等此主水ノ後孫ナルヘシ、  
今本藩ノ久世ノ祖ニハ非ス、(前註)慶雲カ末森記ニハ、久世ヲ久瀨ニ菊池右衛門、其子伊豆、藩臣、大堀與八郎、作ル、一書ニ、初名ハ又兵衛ト云、慶雲カ事タルト末森記跋ニ見ユ、  
藩臣、今ノ山下甚八郎、本庄市兵衛、我舊臣ニ千八百石本庄主馬アリ、浪花役後、乞骸ノ京へ去ル、若クハ此市兵衛與八郎祖、  
佐々與左衛門、與一、齋藤半右衛門、半一、櫻勘介、櫻一作櫻井、別人也、櫻モ成政没後本藩ニ來仕ス、然ルニ、或天正十二年九月十一日



伏見斬殺、堀田次郎右衛門等、堀田ハ、今富山ノ臣、其兵八千、麥生ヨリ駒ヶ嶽、黒谷以上三所、在羽咋郡ニ上リ、競進ノ末森城下ヘ、鼓譟雲聚シ、燔炳セントス、末森問答云、明發ノ比、北村平五郎ヲ初メ、物見ノ武者大手近クセントス、因テ奥村父子三千餘騎ニ足輕少シク從ヘ、龍城戸ヨリ出戰ストイヘトモ、敵猛攻當リ難ク、家士野瀬次郎左衛門、三輪勘左衛門、同彌十郎、馬印持新四郎等二三度返合、助右衛門ヲ小丸ヘ引取、其時、城門懸シ櫓、上ケ簀戸ヲ卸サス引取ニヘ、敵尾シ來ルヲ、助右衛門家臣野崎孫助、同與右衛門槍ヲ入、撞掛リ、押崩シ、助右衛門人、又野入平右衛門、數ヲ引取、上ケ簀戸ヲ卸シ、城ニ入ト云云、以上永福家士六人ノ末孫奥村家臣ニ今一人モナシ、

寺島甚助、同半助甚助、牛助兄弟ニテ並ニ後本藩ニ仕フ、甚助ハ、西野準人子也、瑞龍公二千石ヲ賜フ、初仕、尾三改ムルトナリ、今ノ次大夫祖也、牛助ハ、姓ヲ改メスシテ、千五百石ヲ賜フ、今ノ藏人祖、山ニ沿テ、若宮丸末森城中三丸、ト外羅城ト、後突門ヲ攻ム、其勢ヒ甚タ猛タリ、外羅城ノ守將土肥伊豫國祖ノ先鋒將土肥但馬去年柳ヶ瀬ニテ戰死ス、其子四郎左衛門此時三歳也、但馬末森ニ在シ、既ニ天文十九年ニ注由、方人今ニ口碑ス、但馬ハ今ノ四郎左衛門ノ後見トシ、此時末森ニアリト也、伊豫屋敷末森大手ノ下田子村邊ニ在シ、郎左衛門祖、(眞註)伊豫實名茂次、之ヲ追拂ント、兵二百ヲ率テ、長明筆記ニハ、三十人許ヲ從ヘ、伊、出擊、末森半里許アルネリコト云所マテ出ルト也、ネリコハ今ノ吉田村垣地ノ名、(眞註)政春古兵談ニ、門口ヨリサ、ラ城戸マテ二町四十間ナリ、城戸ヨリ押水海道マテ四町廿間アリ、押水海道ヘ出、ネリコ山マテハ八町五十間アリ、此積ナレハ本城ヨリネリコ山マテ合十五町餘也、吉田口苔ヶ丸ト云、苔ヶ丸不詳、若クハ、門際ニテ戰死、敵土堀虎福享年十八、首ヲ得ル故ニ、伊豫カ從兵七八十人塵ロサル、景周按ルニ、此若宮丸ト三丸ノ後虎口トハ、坪井山ヨリ上田、河原、吉田ト山路此邊二百年許ノ間遺跡崩缺ノ、道脈古今ノ變シレヘシ、越兵愈ヨ銳氣凜然トノ挫ク可カラス、特ニ寺島等奮進シ、成政モ此吉田口ヨリ來進シ、自カラ指揮ノ兵氣ヲ勵マス、城中ニハ、奥村永福、傳在天正九年、後拜伊豫守、此時守福於末森要害者固有故、何則嘗國祖賜令兄利久君所據之荒子城於信長、公至荒子欲受城、永福曰、不見利久君可讓之手書、易讓之、於是國祖得利久君之手書、與之而受城、以故國祖怒黜、永福放食祿、然國祖心陰有感其守節者、故此使永福守末森要害耶、嗟乎誠心之美終雖一旦遇厄難、天、其子榮明、初號助十郎、後拜河内守、同姓采女、五千石、即源左衛門祖、此何掩其美與秦西已、以時被用捨者一般、後賜一萬三千六百五十石、同姓采女、五千石、即源左衛門祖、此時十五歳也、世本爲因幡、

然トモ因幡碑、千秋主殿助範昌、次郎吉祖、コノ瀧澤金右衛門一書ニ、瀧澤後ニ大西ト改ム、大西金右衛門初メ仕文ニ見ヘス、時守二ノ丸、瀧澤金右衛門信長公、公生害ノ後、國祖召ノ賜千石、實子ナキニ卷昌興ノ筆記ニ見ユ、等死力ヲ盡メ防守ストイヘドモ、越兵果進シ、生兵ヲ代テ急攻ス、羅城ノ守將範昌禦キカネテ、羅城モ破レ、此時城埒僅ニ一重ニナリ、防死スル兵百許、僵屍莽ノ如シ、已刻ヨリ申刻ニ至ルト云、此時堀半右衛門及ヒ其弟左太郎モ戰死ト、然トモ下注亦見ユ、可併考、

因テ範昌剩兵ヲ引テ牙城ニ保ム、本庄清七、矢部五郎右衛門藩臣七左衛門、等愈ヨ銳ニ乘シ、外羅城ノ門ヲ破ラントスルヲ、永福及ヒ其弟加兵衛、其餘藁科新助、三輪勘左衛門、同彌十郎、野崎新六、同孫助、高崎次兵衛、前波三四郎、今存ル前波井四郎右衛門、高野瀨左近、藁科以下九人ノ末孫及ヒ由來傳シレス、但シ藁科ハ浪華役ニ藁科瀧澤金右衛門等強防シ、敵首ヲ斬、或ハ重創ヲ被セ引トル、追考、奥村助右衛門家傳ノ寫ニハ、此防戰武功ノ臣名ハ三輪原内記、下田新五郎、岩田作内、野崎新六、小泉勘右衛門、古田與左衛門、三輪勘左衛門、野崎與左衛門、磯部仁右衛門、中村小左衛門、前川與五左衛門、原八左衛門、此外藤崎某トアリ、按ルニ、此内藁科權丞ハ新助ト同人カ、蓋此家傳ニ從フトキハ、本注ノ高崎次郎兵衛、白井四郎右衛門、高野瀨左近ハ、奧時ニ霧雨冥濛、山路滑泥、往來不便ナレハ、成村家臣ニハ非スト見ユ、瀧澤ハ尤公臣也、他日ノ徵書ヲ俟、

政モ一旦坪井山本營ヘ退ク、世本ニ、此時既ニ本丸界一重ニナレハ、成政安堵ノ思ヲナシ、今夜ハ諸士ノ軍勞ヲ取ニタラス、然レトモ城中ニハ軍儲之シク、末森ノ卯辰ノ山麓ニ人馬ノ糧營五所アリ、之ヲ佐路モ斷シ、下文ル者ノ應説、

公廣岡ノ水ヲ持セ來ツテ與ヘ玉、窘蹙既ニ窮マル、一書ニ、此時城士永福ヲ初メ、各先祖ノ系譜等ヲ焚ステ、死ヲ決スフト云コト、此文ニ牽強スルカ、此時永福ノ妻手自カラ粥ヲ炊キテ、守兵諸人ノ勞ヲ勵マストナリ、奥村氏碑誌ニハ、永福内子加藤氏持長刀、率侍女、巡城擁盾、士皆感激、勇氣百倍トアリ、一説、範昌ハ東ノ丸ヲ守ル、時ニ成政ノ方ヨリ、河村平四郎ヲ以テ、北村平四郎ニハ、範昌ヘ金千兩ヲ贈テ、若シ反心アラハ、能州二郡ヲ與ヘント也、範昌此旨ヲ永福ニ告、永福、範昌ノ節義ヲ感シ、奥村加兵衛ヲ、範昌守ル處ヲ代フト云、北國大平記ニハ、範昌此成政ヨリノ贈金ヲ悦ヒ、永福ヘモ反心ヲ勸ム、因テ永福守口ヲ餘人ニ代トアリ、此說妄誕也、若シ此時反心アラハ、



天正十二年九月十一日

一一四

子孫豈今日存センヤ、其上此時公ヨリ永福ト同文ノ感書ニテ、當月十六日、千俵ヲ賜フ也、其書文ハ舊記ニ載ス、見ルヘシ、千秋家傳ニハ、北國大平記選述ノ時、作者ヨリ屢範昌ノ傳ヲ需レトモ與ヘス、因テ之ヲ憤リ陣壽貶臥龍ノ狡ニ倣フト云、**粵ニ末森ヨリ急ヲ告ル羽書、十一日**、末森攻ノ即日ナリ、公ノ由緒ニ、未刻告急於利家所居加州金澤城トア使ハ、永福ノ家人山田仁左衛門トモ、亦ノ午後ニ尾山ニ届ル、公披緘シ、即下ニ令ヲ下ノ出軍、申刻ト野崎孫介トモ、飯倉孫兵衛トモアリ、時トアレトモ、咄時成ヘシ、藤田安勝覺書云、佐々人數ヲ出シ、先手ヲ以テ攻ル旨、金澤へ晝八時過ニ開ユトアリ、門ヨリ馬ニ鞭ヲ加ヘ玉フ、此時公ノ兜ハ、トツハイノ烏帽子形ニテ、長三尺、鍔共惣金也、甲ハ金札白絲ヲトシ、兼日夜進發、十一日黎明至末森云、一説、公著甲ノ時、上帶及ヒ鉢巻及兜ノ忍緒ノ先キ切捨玉ヒ、鎧ノ日釘ヲ抜キ、鐵針ヲ打コミ、其先ヲ打返シ、決死ノ態ヲ示シ玉フトアリ、然レトモ、按ルニ、是只上帶ノ端ヲ絶テ、決死ノ態ヲ示シ玉フ成ヘシ、兜ハ著ニ節アリ、四夫トイヘトモ戰ハサルトキハ、高紐ニ留ルノ議アリ、況ヤ大將ヲヤ、如此ノ急事ニハ、騎馬ノ隨兵ニ持サルヘシ、是古ニ所謂著替ノ武士也、然ルヲ鎧ノ目釘ニ及フハ蛇足ニシ、軍事ヲ知サル者ノ云所ノ説也、高松ニテ被甲ノコト下文ノ本文ニアリ、是ニテ知ヘシ、即チ藤田安勝覺書ニモ、公草鞋ノ緒ヲカナ結ヒニシ、其餘分ヲ小刀ニテ切、再ヒハキカヘシト獨言シ玉フトナリ、世ニ之ヲ冒ノ忍緒ヲカナ結ヒニシ、其先ヲ小刀ニテ切玉フト云ハ誤ノ由、微妙公御意トアリ、君夫人公ノ鑑ヲ著セルトキ、祝盤ヲトアルニ、公ノ乳母アハテ、黒米ヲ三方ニ載出スヲ、君夫人、尾山城ニハ、前田利久君號藏人、國藏人入道、扱ハ魚住隼人、此者其昔ヨリ存ル仁ニ候、此兩人末森蓮田ノ時、金澤城代被置候處ニ、心妙ノ禮聞及ヒ候、老テノ武備ト感シ申トアリ、此魚住後胤イカ、ナリシニヤ、今藩臣ニ此子孫ナシ、元利ノ士藪ニ二百石魚住與右衛門、又軍兵衛見ニ、是等此族ナルカ、(前註)追考、隼人ハモト信長公ノ臣也、天正八年四月、勝家ノ加賀在陣中ヘ安土ヨリ木下助右衛門ト此隼人ト兩使下サレ、勝家能登、加賀ヨリ仕付タル體、安土ヘ歸リ言上、公祝著ノ上此兩使ヲ賞シ、御服ニ帷子ヲ副賜メト、太田日記ニ見ユ、然レハ公生害後、國祖ノ臣トナルト見ユ、篠原彌助勘六一孝ノ父也、年譜即一孝トス、非也、ヲ留守タラシメ、不破彦三、村井長賴傳在上文、後拜豐後守、賜一萬四千石餘、ヲ先驅トス、問答ニハ、一ノ先驅村井、不破、二ノ先利秀、青山、多野村、原、三番利益、片山、武部、岡島、近藤、旗本ノ前備ハ瑞龍公也、旗本ニハ、徳山五兵衛等召具セラレト定メラレ、國祖同日申時出軍、自カラ駿馬ヲ馳テ急カセラレト云、且檄ヲ飛ノ、松任、瑞龍公、七尾、安勝君父、徳丸長連龍居城也、ヘ急ヲ告ケ、公戊ノ下刻津幡城、景周按ルニ、世

大槩四里ト云、然レトモ、密ニ之ヲ論スレハ、河北門ヨリ河北郡山上村一里塚マテ十七町五十間、此一里塚ヨリ津幡マテ二里三十三町十二間也、之ヲ合セ三里七町二間也、然ルニ申時ヨリ發シ、戌ノ下刻到著ナレハ、三時ノ間也、サレハ、一時一里二町二十間四尺ノ積リニ當リ、急援ニハ實行ナレトモ、是ハ此間ニ騎歩ノ諸兵ノ追從ヲ待調ヘ故ナルヘシ、ニ到ラセラル、城主前田秀繼君號右近將監、街頭ニ出迎ス、此時追々金澤ヨリ馳付兵七百許ト云、コノトキ初更ニ及テ、世子介士ヲ從ヘテ、一本ニハ單騎トア、津幡自松任ニ來リ玉ヘハ、相與ニ軍議アリ、此時公曰フ、成政トハ弱冠ヨリ戰場ニ同ク出テ、弓矢ヲ比ラリモ易シ、只我令ヲ負クコト勿レト、大音ニ曰玉ヘハ、諸兵百頭、英氣揚々トノ勇ムト云、時ニ秀繼君暨ヒ寺西宗號治兵衛、後賜五千石、今ノ九左衛門祖、以爲ク、今末森ニ到ルハ、肉ヲ抱テ、饑虎ノ谿ニ赴ムク也ト、即チ私ニ謀テ曰ク、末森ハ既ニ陷ルノミナラス、神保父子帶甲四千ニテ、出張ノ外議アリ、公末森ニ向ハモセ玉フトモ、恐クハ利アラシ、不如末森ヲ棄テ、此津幡城ノ壁ヲ固クシ、塹ヲ深メ自守シ、秀吉公ヘ檄ヲ飛シ玉ハ、大援不日ニ來ラン、而メ我軍ヲ併セ、末森ヲ陸城センコト、兩可ノ手段ニ非スヤト、此諫秀繼君暨ヒ寺西ノ弱氣ニ非ス、甲州流ニ所謂家老分別也、然レトモ、時ニ取テ公ノ氣機ヲ揣ラス、其言甚タ拙ノ、卑辨ヲ後世ニ遺スニ似タリ、公聞テ勃然トノ曰ハク、畏縮ノ卑辨、我闔兵ノ銳氣ヲ鈍ラス者也、今滯援ノ爲メニ、義將永福等ヲ徒死セシメ、世嘲ヲ取ンコト、寡人顔甲スル所也、生ハ涯アツテ、名ハ涯ナシ、縱令此援大敗ヲ取り、中越ノ鬼トナルモ、君臣其節ヲ失セス、風雲千載遺名赫然タランコト素願也、其上成政、氏春ノ甲兵百萬モアレ、我親兵衛士ヲ以テ當ランニ、何ソ摧破シテ齋粉トナサ、ラン、寡人心既ニ決セリ、又言コト勿レトテ、長賴ヲ別室ニ延フ、擅ラ末森後距ノ命令アリ、長賴ノ方略其揆一也、軍議了

天正十二年九月十一日

一一五



テ末森へ發セントス、此時秀繼君食膳ヲ薦メテ曰ク、此地ニ良トアリ、出師ノ占聞玉ハンヤト、公諾ス、即チ半百ノ解魔法師趨リ前シテ蛾伏シ、袖裡ヨリ一小冊子ヲ出スニ、公ノ發旗止へカラサル風色ヲ察シ、冊子ヲ收テ、良時嘉刻進シテ大ニ利アリト、以聞ス、景周曰、嘗讀史行、卜者知其指、是下事皆成有功、今此解魔師之言、與之爲暗符奇々、公誠ニ良ト也ト拊笑シ玉ヒ、亥ノ下刻發旗也、末森問答ニハ、公津幡城ニテ秀繼君及ヒ寺西宗與等ト内議シ、末森ハ既ニ陷城シツラン、後授其益ナカルヘシトテ、使者ノ士一二騎ヲ指江、狩鹿野邊へ進マセ、足輕トモ弓弦ヲ外シ、火繩ヲ消シ、急キ津幡へ歸ルヘシトナリ、因テ、先陣ノ者ト云津幡城へ引マドメ歸ル、而ノ兵糧ヲツカヒ、人馬ヲ息ヒ、其内金澤ヨリ來ル軍兵ヲ待ウケラル、是レ公絶妙ノ奇計トアリ、而ノ其夜ノ亥ノ時ニ至リ、急ニ後援ノコトヲ命ジ、直チニ出馬シ玉フト云云、景周按スルニ、此說鑿セシニ似タリ、然レトモ、後註ノ反問ノ說ニ依ルトキハ、妙計トモ言ヘシ、又一書ニ、秀繼君末森ノ後拒ヲ止メ玉フヤウニ類謀メラル、ト、衆兵傳へ聞キ、皆心怠リ坊店ニ入テ休息シケルカ、俄ニ公出馬ユヘ、瑞龍公ノ馬印ヲ津幡ノ街尾マテ横山長知持シ出ツ、大鹽大海ト云者、弓ヲ空張シテ從フトアリ、空張ハ雲張ノ傳成ヘシ、國祖黑印ニテ天正十一年八月十五日與力分ト書ノ、二十三人へ各恩賜アル一紙寫ノ中ニ、二百六十俵大鹽大海介ト有テ、隨一ノ大賜也、然レトモ末森役ハ十三年九月ナレハ、此恩賞ニテハ非ス、寛永二年大鹽傳左衛門罪アリテ、公事場ニテ責殺サル、若ハ此後カ、景周曰、此一段古來有兩說、一則如所立本文、顯以公進也、一則如謂註文、顯在公奇謀也、二說未識孰是非也、雖然爲奇謀則歸公軍慮深遠也、取之爲尤耶、然則安勝君、寺西宗與說公者、卜者告利者先軍歸、不破、村井、前田利秀、號又次郎、前田利益、號慶次、利久君ノ養子、實ハ瀧川一益從子、種村、武部、岡島、青山、號與三、後賜一萬七千石、今ノ將監祖、近藤善右衛門長廣、後賜一萬千石、而號大和、傳既見天正三年、等之ニ次、公ノ司兵ハ宮川但馬、按ルニ、但馬ハ越前刀根山ノ役ニ氏家左京ノ臣ニ宮川但馬アリ、齋藤右兵衛ノ首ヲ取、信長川與左衛門アリ、是ハ伏見ニテ石川右馬助ト刀傷立退ト三壺記ニ見ユ、又宮川七兵衛元祿六年追放アリ、是ハ今ノ繁藏族ニテ別苗（眞世）美濃國明細記ニ但馬兄吉左衛門ハ土岐ノ幕下也、但馬ハ美濃ノ岩林ニ住スルヲ、信長屬氏家ト全妹嫁也、後屬前田利家トアリ、世子ノ司兵ハ山崎長鏡、號庄兵衛、後號閑齋、モト朝倉氏ノ臣也、義景滅亡ノ後明智光秀ニ仕ヘ、七兵衛祖、（眞世）關原記大全ニ山崎長門ハ元ト山城國山城ノ油賣ニシテ、家紋モ油筒ノ形ヲ用ニト云ヒ、夫ニ種々ノ評論ヲ載ス、東遷基業亦追テ、之ヲ實ニス、是戰國ノ野諺亡論者也、亡慮銳甲一千爭ヒ進

利家ノ將士

ム、此時篠原勘六ハ公ノ内臣タリシカ、乃者横疾發シ、起居不自由ナレハ、公ノ首途ノ時、尾山城ニ利久君ト俱ニ留守自燒シ、死スヘシトアレハ、勘六反命ニモ及ハス、是非ニ屬從セント云シカ、果テ從騎二十許ト公ヨリ屬シ置官健一火ヲ引率シ、輜ニテ川尻近ク來リ、此所ニテ甲冑ヲ蒙シ、勘六（眞世）コソ是マテ來ルト名謂テス、ム、是ヨリ先キ、神保ハ川尻へ出張、探士ヲ出シ、加賀ノ援軍ヲ量リ視セシムル、探士歸テ援兵津幡マテハ發旌ノ由ナレトモ、急ニ此地へ來ラサル形勢ヲ告、神保、佐々此言ヲ聞テ心惰タル、公鵜毛河ヲ間ニアル河ナリ、涉ル時、高松村民一人來リ、成政カ軍狀ヲ具サニ報進ス、公聞玉ヒ先此者ヲ縛メテ、鵜毛河濱ニ人ヲ副テ置、但シ此時ハ此者ヲ疑ヒ、縛メ置トイヘトモ、戰後其食言ナラサルヲ以テ、七窪ヨリ今濱マテ續キタル松林悉ク伐シメラル、トキ、是木ヲ此者ニ賜ルト也、其民人ノ名シレズ、公ヨリ一塘二塘ヲ出ノ、敵軍ヲ見量セシムルニ、各歸テ告テ曰ク、敵既ニ陣ヲ張リ、堂々トシテ公ノ來ルヲ俟ト、公又富田六左衛門後拜越後守、賜一萬三千石、即チ景周祖、ヲ斥候將トメ、踏勘セシムルニ、富田歸テ以告ス、張陣ニ非ス、水柵也ト、公問フ、爾チ何ヲ以テカ之ヲ知ル、富田對テ曰ク、兵陣タラハ左右前後ノ法アルヘキニ、長短モナク一齊ニ羅列セルヲ以テ、臣深ク進ミ、近ク觀ルニ、水柵也ト、公曰ク、善シ、此捷既ニ我術中ニ在トテ、高松ニテ津幡ヨリ指江マテ一里、指江ヨリ狩鹿野マテ十町四十八間、狩鹿野ヨリ外高松マテ一里二十二町二十四間、通計二里三十三町十二間ナリ、擐甲アツテ、高松ニテ擐甲ノコト、即チ異本年譜ニ見ユ、然レトモ夜中ニ、中古誤テ甲ヲカブト、訓スレハ、津幡馬舌ヲ卷シメ、竊ニ海濱ヲ單騎ニテ馳一本ニ、七窪ノ沙山ヲ土子越キ、今濱ニ至セ、河尻川ヲ坪井山本陣ヨリ二十六町許、涉リ、今濱郡羽咋ニ到ラセ玉ヘハ、從軍モ續テ河尻川ヲ涉リ、五更ニ今濱ニ抵ル、圖ヲ按ルニ、此間ニ河尻川、采田川、寶達川、今濱川ト四川アリ、此四川涉リ玉ヒテ、鐵槍ノ旗ヲ濱村マテ二里、立サセラレシハ、今濱川ノ彼方ノ沙山也、蓋外高松ヨリ大海川尻マテ一里十町、河尻川ヨリ今町三十間ナリ、然レトモ氏春等之ヲ知ラス、眞世「今枝直方云、今ノ高松驛ハ、中古ト別所ナレトモ世人其ヲラシラス、天正十二年ノ取合ノコトニ不審ヲ起スユヘ之



ヲ記ス、佐々成政、末守攻ノトキ本陣ヲ坪井山ニ居ヘテ、神保安藝父子ヲ金澤ヨリ後詰ノ兵ノ押ヘトシ、面田川尻村ノ沙山ニ備ヘサセシム、然ルニ夜中海端ヲ、追追金澤兵ノ逼ラシラテ末守ヘ通シヤリケルヲ、今不審スルハ今ノ高松邊、カノ沙山ヨリ海ヘ二三町ノ内外ナルニ、アマリナル由斷ノヤウニ思フニ、按ルニ今ノ高松驛ハ、三度目ノ轉地ナリ、天正後、海浪ツケヨセ末守攻ノ時、驛ニテ居住ナリ難ク山ノ手ヘ居所ヲ移シ、數十年ヲ經ルニ、又海浪ツケヨセ其驛堪カタク、又山際ヘ數十間或又其後百餘間立退タル也、サレハ今ノ驛ハ末守攻ノ時ノ驛トハ轉地三度目也、天正ノ高松驛カ用水ノ井筒海際ヨリ三四丁餘沖ニアリ、海底ニ入見レハ顯然タリト云、然レハ此井筒ノ所ヨリ海端ヘ又幾程アリシモシラス、量ルニ浪打際マテハ七八丁モアルヘキヤ、然ラハ浪打際ヲ夜中ニ忍ヒ過ル、人皆知ル所ナリ、公ノ後軍五六百騎ハ猶一里所後レテ、河尻川ニ到ルニ、長明筆記ニ、川尻ニテ公顧ミ玉フニ、兵子二千五百許ナラデ續カス、然レトモ此兵皆此時氏春等始テ知リ、驚破加賀ノ援ヨト云マ、ニ、諸卒噪キ擾シ、佐々ノ臣北村平次郎、後ニ陽廣公此援軍ノ到ル次第ヲ問セ玉フニ、北村對テ曰ク、氏春等、指江、狩鹿野マテ兵ヲ出ストイヘトモ、此夜大雨ナレハ、後拒アルヘカラスト思ヒ、其備ヘテ設ケサルニ、公濱通テ後拒、氏春案ニ違ヒ破膽スト云コト、景周雜錄中ニ於テ見ル也、景周又一書ヲ按スルニ、氏春之ヲ知サル做作ハ、神保方ヘ公ヨリ姦細ヲ入レ、中道内高松通進ミ玉フト、敵方ヘ開ニルヤウニ上下外議サセ、又ハ末森既ニ陷城ノヤウニ、成政方ヨリ姦細ヲ以テ風聞セサスルニ依リ、其間ニ就テ津幡ヨリ金澤ヘ引返シ玉フト、反間ヲナサシムルニ、神保ハ中道内高松通テ張軍ヲ待ノミナラス、其心モ情タルナリ、然レニ公ノ後軍ノ過ルヲ聞テ、公ノ旗本ト思ヒ、急ニ之ヲ拒ヘ、放銃スト也、是說ノ所見甚委シ、然レトモ餘リニ穿鑿ニ墮テ、其實ヲ得ル者ハ勝、勢ヒ得サル者ハ謀ラル、ハ、是レ定理ナリ、鳥銃ヲ累放ノ拒ストイヘトモ、既ニ今濱ノ左ナル堆沙頂ニ、今濱ヨリ五六ノ旌旗搖々トシテ喊聲ヲ發ス、此マテイカナル故アルヤ、坪井山麓、是十一日ノ曉天也、公ノ由緒ニ、十一日黎明至末森城、擊内藏介陣トアリ、世本、十二日トス、非也、此時末森城シ、喜躍スト也、年譜ニ、此時我兵三千五百、本陣ノ前後ニ備フトアリ、愚按、自金城至津幡、并ニ自津幡至外高松道算ハ既辨上注也、此ニ又自外高松至加能境松三町三十間、或云、自境松至川尻廿二町三十間、自川尻至今濱二里一町三十間、此分合テ六里八町四十二間ニテ、是三時ノ間也、之ヲ割配レハ、一時二里二町五十四間ニシテ、自金城至津幡路程ハ其歩算倍數也、蓋シ自金城至今濱總計ハ、九里十有五町四十四間也、而シテ七時ノ間也、但シ此内一時ハ津幡城路下軍議ナレハ、行中ハ六時也、如斯辨析スレハ、此救援取テ其道算急迫ナラサルヤウナレトモ、夜軍潛行ト云ヒ、神保モ川尻ヘ出張ナレハ、敵方ヘ援體不洩密略等、彼是遅々モ有ヘキコト也、必シモ方今昇平ノ凡下ニテ戰國ノコト一槩ニ論定スリヲ憚ルトイヘトモ、是非ナク坪井山ノ營ヘ兵ヲ引取トアリ、是ニ於テ、佐々モ大兵ヲ進メテ、喊聲ヲ合

彫城戸

平野齋宮

セ、急ニ又城ヲ圍攻ス、其勢ヒ強猛也、按ルニ、此時城兵防クニ堪ス、千秋範昌ノ臣千秋佐助二ノ丸ノ門續キ暫ク進ミ得、此時村井、不破、青山、種村ハ、今濱ヨリ直チニ坪井山ノ本陣ヲ進攻セントイヘトモ、公之ヲ許シ玉ハス、末森城面正門ノ彫城戸ヘ、按スルニ、惣テ取出附城ノ類、篠虎落ヲ結タル城戸ヲ彫城戸トアル、非也、是ハツラ折ノ坂下、向進セシメ玉ヘハ、村井ノ臣間野新祐、孫今ナシ、小林彌六左衛門、見、三木十内、即今ノ祖、屋後太右衛門、問答ニハ、之ニ吉川平太、江見藤十郎、大窪小五郎ヲ加フ、屋後ハ村井家者、末森後卷ノトキ首ニ取トアリ、按ルニ、此時等敵首十一級、不破ノ臣不破十右衛門、作左、同四郎右衛門ノコトナルヘシ、此末孫ハ清八トテ今猶アリ、孫權左衛門ニ至テ絶炊也、其詳ハ天正八年及十八年ニ解ス、等敵首八級各提挈シ、沙山ノ本陣ニ來テ、公ノ効首ニ備フ、公欣然タリ、此時公馬上ニテ、此敵賊ヲ見玉ヒテ、一番首ニハ見ヤウアリトノ曰フトナリ、按スルト也、混目抄ニ、末森ノ後詰ニ一番首取來ハ、又村井ハ鎗ヲ交ヘ、佐々與左衛門、成政先鋒將也、混目抄ニ、與左衛門種村ノ手兵杉立九郎兵衛トアリ、可追考、又村井ハ鎗ヲ交ヘ、佐々與左衛門、門宗能ハ本姓良峯氏也、成政姉子ニテ甥也、武功アル者ナルニ、ハ、ヲ擲殺シ、其部下ノ士可三十之ニ死ス、又我ニ公神兵ヲ驅テ、城背佐々ヲ名ノラセシトアリ、景周按ルニ、是即チ長坂口也、此坂本丸ノ脇曲輪ニ通スル道也、本丸ヨリ坂下ノ池畔マテ、坂ノ間四五町アリト云、路幅古ヘ二間許ト云、道條ハ本宿ト云ヨリ通ス、一説、公此トキ末森城東ノ山ノ平ニ陣スト、地圖ニモ亦アリ、但シ此說非也、東ハ幽谷、通路ノ地ニ非ス、敵ハ専ラ南ヨリ來攻スル、公ノ後詰ハ西北ヨリヨスルナリ、蟻附シタル越將野々村主水、佐々新左衛門カ軍ヘ進攻シ玉フニ、公ノ由緒ニ、利家易道、卒旗本之兵、急馳トアリ、(童遊)政春古兵談ニ、成政旗本坪井山ナリ、種村其旗本ヘ先簾戸敵ヨリ取、野々村以下爰ヲ專ト防ク、富田味方一先ニ進ミ、太刀ヲカサシ堀切ヲ鑿ス、時ニ野々村槍タケ富田六左衛門後ヨリ進ム、又山崎其後ヨリ進ミ、ヒクナ續ト呼ハレハ、各陸續シ、野々村討死、夫ヨリ敵敗北トアリ、富田六左衛門最先ニ鎗ヲ入テ、敵將小川鯨之助ヲ擲殺ス、北村市右衛門、末森記ニハ北村作内ニ作ル、或ハ三右衛門トナスハ、公ノ褒書ニ從フ也、今ノ北村三郎左衛門篠原勘六、彌助ノ子一孝是也、後ニ半田半兵衛、後賜八門ノ祖ト見ユレトモ、此家ノ祖ニ此名トモ見ヘス、萬七千石ヲ賜フ、賴母祖、千石、



此本家ハ天明六年子孫半兵衛、山崎彦右衛門、後賜八千石、村井又六、長頼、野村傳兵衛、賜千石、伊井口茂兵衛、賜千石、勇小泉彌一郎、助祖、奥野彌市郎、後賜五千五百石、左膳祖、阿波賀藤八郎、江見藤十郎、吉川平太、岡本七助、富田源七、木村久三郎等五十騎續テ進ム、此數人ノ内此時無比類勳トテ、明年乙酉九月廿七日、ル、感書ノ文特ニ半田鎗ヲ捫テ先進セシカ、櫻勘介カ放銃子ニ左肩ヲ破ラレ倒ス、因テ二公衆ヲ勵マシ、銃道ニ踟躕セハ、銃痕ノ者多カラント、認旗ヲ採テ指揮シ、進メト曰ハ、富田、篠原、野村、山崎、北村等競ヒ進撃シ、烟塵俱ニ起テ酣戦ス、北國太平記ニ、城ノ搦手野々村等ノ隊ハ撃テニ鎗ヲ入ル、北村、山崎、半田、野村ハ富田ニ越レタルヲ遺憾ニ思ヒ、各激テ進メハ、越將佐々新左衛門、本庄清七、野々村主水、小川餘之助、本庄市兵衛、野入半右衛門、立田菊丸、齋藤半右衛門、堀田次郎右衛門、矢島五郎右衛門防戦勇ヲ振フ、此時城兵モ城門ヲ開テ出、夾撃スレハ、餘之助ハ富田ニ討レ、越軍崩レタツテ篠原等進テ戦フトアリ、又一書ニハ、半田一先ニ進ミ、山崎、野村一番鎗ヲ合セ、篠原、北村、富田鎗下ノ高名トアリ、然レトモ富田一番鎗ノ高名ニヨリ、加恩俸賜アルコト、景周家譜ニ明了也、又一書ニ、後日山崎ト野村ト合鎗ノ前後ヲ争フ、公穿鑿ノ上、同ク合槍トイヘトモ、野村ハ諸人ノ眼前ニ合セタル鎗ナレハ、一番鎗トテ褒書ヲ賜リ、二人共ニ加俸千石ヲ賜フ、半田ハ褒書ナケレハ、心服セストイヘトモ、同加俸ニ母衣十五人アツケ玉フヲ以テ服ストアリ、又一書ニ、我先鋒ノ一番鎗ハ野村傳兵衛、城中ニテノ一番鎗ハ奥村助十郎榮明トアリ、此時合鎗ノ次第諸記一歸セス、然レトモ其夾ヒ匿々已、(前註)政春古兵談ニ、末森ニテ一番槍富田六左衛門、二番野村傳兵衛、三番山崎彦右衛門也、此三時ニ城將永福等城門ヲ開テ出、越軍ヲ挾撃ス、越將野野村、本庄、齋藤、堀田、櫻等奮闘スレトモ、前後ノ敵ヲ禦カネ、之ニ死ス、其它宗兵僵尸身腰處ヲ異ニスル者七十餘騎、我軍膽氣益ス豪壯ニシテ累進ス、北國太平記ニ、此時前波三四介、弟與左衛門、三輪勘左衛門、同助右衛門、可兒才藏、本多三彌左衛門勇擊ノ下、暨ヒ敵士立田菊丸、林野源内、加々田大八等奮勇ノ下ヲ載ス、按ルニ、此内可兒才藏ハ加州ノ士也、末森役後諸國武者修行ヲナシ、福嶋家ニ任フ、其後神祖赤坂ヲ立玉ヒ、野上、關ヶ原ノ間ニテ首實檢シ玉フ時、才藏九月朔日ヨリ十四日マテニ首十七級ヲ得、其鼻耳ノ中ハ篠葉ヲ入置タリ、神祖之ヲ感テ、是ヨリ篠ノ才藏ト呼セラルト云、景周又西遊雜記ヲ見シニ、安藝ノ海田市ト廣島トノ間ニ、可兒才藏ノ墓アリ、其上ニ假名ニテサ、ノ才藏ト記ス、馬ニテ乗打スレハ必ス落ル由、福嶋家ニ任ヘテ、軍功アリシ人ト書タリ、可考、(前註)此役成政方戰死ノ士ハ野々村主水、本庄清七、舍弟市兵衛、佐々新右衛門、齋藤半右衛門、堀次郎右衛門、野又半右衛門、矢部五郎右衛門、越兵敗績ノ走ルヲ尾撃ノ首ヲ斬コト七百五十級、一作七、隊長ノ首十衛門、櫻勘介都合九人ト云、

越兵敗績ノ走ルヲ尾撃ノ首ヲ斬コト七百五十級、一作七、隊長ノ首十級ヲ獲、秀吉公ヨリ國祖(當月十九日)返書ニ、佐々人數、公乃シ此背門ヨリ入城ス、公ノ由緒ニ、利家易山崎彦右衛門、野村傳兵衛、平田半兵衛、富田越後守、北村三郎左衛門爲先登、或合鎗得首級、凡取物頭十二、其餘猶多、敵乃開解圍、故利家、利長得入城トアリ、又一說ニ、末森城大手口ハ田子ト敷波トノ間ニアリ、道スチ初度合戦先鋒此所ヘ攻入シカトモ、敵軍備ヘ厚ク、敗リ難ケレハ、敷波ト子浦トノ間ニモ道アレハ、回シ佛ノヤウニ子浦ヲ越ヘ、能登口ヘカ、リ、搦手ヨリ城ヘ乗コミ玉フトアリ、但シ是ハ應説、後詰ノ勢ヒヲ知ラスト云、先鋒ハ敵ヲ撃テ、大手口ヘ至リ、旗本ハ敵ヲ破テ、搦手ヨリ、城中雀躍拵舞ノ萬歳ヲ唱フ、此時公永福(此日用ヒ玉フ鐘)ノ馬、金裝ノ腰章、リ城ヘ乗コミ玉フナルヘシ、城中雀躍拵舞ノ萬歳ヲ唱フ、金装ノ甲冑、大小ノ寶刀三鞘、黃金七兩、米一千俵ニ感書ヲ副テ、但シ、千俵ト云、賜ヒ、梅輪内ノ紋ヲモ賜ヒ、但シ、改メ、世子ヨリモ無比類ノ由感書アリ、又秀吉公ヨリ公ヘ、當月十九日、書ヲ以テ、奥村父子盡粉骨ヲ賞スル也、其文面皆舊記ニ載テ詳也、斯テ永福一時士林ノ面目ヲ開キ、其馬、腰章、甲冑、寶刀ハ即チ永福傳ヘテ家什ト珍製ス、永福晚年此甲冑ヲ以テ、次子因幡易英ニ傳與シ、易英ヨリ壹岐庸禮之ヲ傳ヘ來レリ、某年微妙公ヘ之ヲ以テ告シ、相公閣下入封ノ始メ、周ノ嘉例ヲ以テ之ヲ獻スト云、是ヨリ再ヒ官庫ニ藏ム、鐘

鐘 槍ノ馬

鐘ノ馬、職以下ハ嫡孫伊豫傳(來ルト云、寛文辛丑閏八月、今枝近義ニ命スル甲匪記併記ス、亞相利家公、天正十一年築堡於能州羽咋郡末森郷、今奥村伊豫守永福爲留、後翌年秋九月、佐々内藏助成正自越國率大軍圍末森城、告急加賀府、利家公及利長公即日發駕、挫成正之兵、振武威於國、利家公褒賞永福守戰之忠功、其日所賜旗鐘槍馬、金切裂腰指、所著鎧、兜、薙、太刀、童子悉以賜永福、永福退老之後、以鎧、兜、薙與次男因幡守易英、至曾孫因幡利豐傳來爲家藏、和豐預經黃門利常公之高聽、待新君網利公之入國、初奉獻之、收納公庫、代周之赤刀者也、于時寛文辛丑歲閏八月吉辰、應新君之鈞命、今枝氏戸部近義謹記焉、景周按ルニ、奥村河内家傳ニハ、此外ニ與力士三十人ヲ屬ス、且馬、太刀、腰刀、河内家ニ傳藏シ來ルノ處、右二刀ハ、寛永八年、金澤火災ニ燒失ス、馬、今河内守爲實ノ家ニ存ス、馬、職乳ヲ除キ、大サ堅一丈二尺許、横五尺三寸許、鐘、槍ハ古書、筆力甚勁逸、但シ畫者不知、二刀金裝也、甲冑ハ即チ因幡家藏シ來ルノ處、寛文元年進獻也、感狀、腰指ハ奥村主水隆振ノ代マテ傳來ノ處、寶曆九年ノ災ニ單リテ今ハナシ、可惜ト也、前田創業記ニ、此鐘槍ノ馬、職ハ本武田信玄ノ旗ナルヲ、信玄之ヲ上原隨應軒ニ附與ス、而ノ上原藤五郎ニ至テ、之ヲ公ニ獻ストアリ、按ルニ、上原隨應軒ノ時ハ、カンハラト訓ス、上原藤五郎ハ即チ清兵衛ニテ、今ノ民五郎家也、今ハウエハラト訓ス、其訓ヲ更ル子細シレズ、信玄ノ旗ノ軍鑑ニアレトモ、鐘、槍ノ馬、職ノハ見ヘズ、尤軍鑑ノミニモ非ズ、其外ニモミヘズ、可怪、有澤貞幹モ此ニ有疑ト云、上原民五郎家譜ヲ見ルニ、十一世ノ祖上原隨應軒武田信玄ニ仕ヘ、武者奉行ヲ勤メ、信州ニテ軍功ノ感狀ニ通今猶家藏ス、其子能登モ信州佐久郡ニテ鎗下ノ首取、其時ノ感狀一通今猶家藏ス、其子清兵衛武田勝頼滅亡後加州ヘ來リ、天正十二年七月、國祖ヘ仕ヘ、三十石ヲ賜ヒ、小姓タリ、末森役永福ニ屬シ、城ニ保ムトキ、十二日未明、濱手ヨリ公ノ鐘、槍ノ馬、職見ユルヲ、清兵衛見覺アルニ、公ノ後卷ノ由永福ニ告ル、因テ城兵競ヒ進ミ勝利トナ



天正十二年九月十一日

ル、公歸陣後、六十石加俸、元和六年、清兵衛及老年病死ト云云、因ミニ記ス、國祖著領ノ鏡甲高家業織田主計頭信由家ニ傳來アルヲ以テ、享和二年壬戌五月三日、當公ヘ指上ラル、其作様前胴三枚、後胴四枚、堅作銀綴也、前胴正中ニ天満宮ノ三字、左ニ松、右ニ梅ノ圖、右ノ下ニ前田又左衛門ノ六字アリ、皆影上也、前胴ノ左右ニ銃丸ヲ抱ヘタル痕アリト云、此甲傳來ノ委曲ナシトイヘトモ、尊名顯然タレハ、尤眞正不可疑、二百年ノ春秋ヲ歷テ再ヒ公ノ武庫ニ復收スルト、是武德ノ偏ニ盛ナルニ依者也、年譜ニ、公此時末森城水乏キヲカネテ推知シ玉ヒ、出軍ノ節、廣岡ノ水ヲ竹筒ニ入テ持セ、永福等ニ與ヘ玉ヘハ、城兵千萬金ヲ賜シヨリ百倍ノ思ヒヲナストアリ、按ルニ、水ヲ持セラルコトハ有マシキ事ニモ非ス、然レトモ廣岡ト云フ、甚ダ迂遠也、但シ、廣岡ハ源平盛衰記ニ所謂平岡野ニテ、其比ハ小立野ニアリシヲ、後ニ今ノ廣岡ノ地ヘ轉スト云好事家ノ説アリ、此事既ニ壽永二年、平岡野ノ注ニ記ス、若此説是ナラハ、只金城邊小立野ノ水ヲ汲セ持セラ、ト云フカ、然レトモ此説何レニモ駢拇蛇足不足信トナリ、景周又一書記ヲ見ルニ、此後我公樂樂ノ郎ニテ諸侯會盟ノトキ、上杉景勝ニ謂テ曰ク、君向ニ越中魚津城ノ後距トシテ、險難ヲ歷テ、天神山マテ出軍ノト、世以テ奇稱、人口ニ膾炙スル所也、然レトモ寡人能州末森ノ後距ニ、佐々成政ノ巨軍敗績セシハ、君カ後距ニ比スレハ、十倍ノ顯功タルヘシト曰マヘハ、景勝及ヒ滿座ノ諸侯默然タリト云、小瀬浦卷道喜太閤記ニ評ノ曰ク、前田公末森後攻、敵一萬五千、味方三、四千ヲ以テ戰ヒ、達本意事古今希ナル後卷也、長篠ノ後攻、成政驚キ、佐々平左衛門ヲ先鋒將トシテ騎歩八、八武田勢三萬餘騎、信長公勢五萬騎ナレハ、不珍ト成ヘシ、

千ヲ 微妙公夜話録ニハ、佐々進メ來ル、此時河尻ニ在シ神保末森ヨリノ急告ニ驚ロキ、末森ヲ援ヘント馳來リヨレノ人數既ニ八千、公爲ニ渾ヲ五隊ニ作り、一番村井、二番與村、種村、三番不破、四、且先鋒隊中へ行テ村井俱ニ敵軍ヲ見量シ玉フニ、佐々敢テ進撃スルコト能ハス、亦來路ヘ退クコトヲ得ス、加賀路ヘ沿テ緩ク、敗軍、來路ヘ退ク能ハス、加賀路ヨリ退クトナリ、後説是トスヘシ、由緒ノ文ハ下注ニ載ス、照見スヘシ、

本多三彌正重 三彌、此時武者修行トシ、公ノ隊中ニ在ト云、藩翰譜ニ、正重ハ佐渡守正信ノ弟也、初メ三彌ト號シ、後ニ利家カ足輕大將トシ、末森ノ後卷シ、佐々内藏助成政ノ勢ト戰フトアリ、今ノ駿州田中ノ豐後守正意ノ先祖也、景周按、此兄彌八郎正信ハ、天正八年ヨリ十年マテ三ヶ年、末森、山中兩堡ニ在テ、十年壬午、神君召ニヨリ、加州ヲ去ル、此三彌ハ天正八年ヨリ今年マテ五ヶ年、加州ニアリシナリ、公ヲ勸メテ之ヲ擊ヘシト云、然レトモ越軍列伍嚴重ナルヲ以テ、堅ク制ノ兵ヲ出サシメスト也、相傳フ、此時成政ノ本陣ノ兵子皆金色ノ鬘斗ノ指物也、公遙望シ、其軍統ノ富麗ナルヲ賞シ、寡人成政ヲ伐亡セハ、我本陣馬回ノ士指物是ヲ用ント曰フ、果テ後ニ用ヒサ

セラルト也、又末森問答ニ、成政黃羅紗ノ羽織ヲ著シ、馬ヲ千鳥ニ馳ケ、金ノ分銅ノ馬轡ヲ揚ケ、引取際ニ成テ、黒キ羽織ヲ著シ、將卒ヲ指應シケルニ、兜ノ立物東西ニ閃メキ、其粧麗我諸軍見テ賞ストナリ、又混見録ト云書ヲ見ルニ、此戰後國祖世子ニ語ラセラルハ、三彌カ諫ヲ用ヒサレハ、思量ノ有シコト也、惣テ武者修行人ハ己カ功ヲ賣ルヲ主トシ誠ナシ、己カ一言ヲ以テ敵ヲ追ヒ、大利ヲ得タリト、他家ニ譽レヲ擧ンタメ也、若シ追テ不利ヲ取テモ、三彌カ負ニハナラス、其上成政一昨日末森ノ城ヲ圍ミタルニ、今曉後援ニ向ヒタレハ、飛脚道ノ往來ニテ考ヘテモ、我兵三四千ニ過シ、其積リナキハ、成政未熟也、若シ成政後援ノ人數ノ寡キヲ先知セハ、我レ追ストモ返スヘシ、況ヤ之ヲ急撃セハ、總返シニ返サレテ、必定我兵ノ敗ヲ取ヘシ、是ヲ以テ部伍ヲ固メ、追サルト曰フトナリ、(重註)成政ハ何事ニヨラス物數寄スタレタリ、此指物ノミニ非スト云、有澤武貞云、御當家江戸往來長柄持ヘ御ワタシノ番刀多クアル内、三分一許ハ、鞘ノ探リノ所ニ、大ナル三圓子ヲ青貝ニテ付ルアリ、御細工所ニ於テ、修覆ノ例也、是ハ富山城ニ在シ者ニテ、利長公分捕ニトラセラル者也ト云、三圓子ノ附ケヤウ中々物數寄ナル者ナリ、

十日ノ羽書飛來、急ヤカニ各末森ヘ發向アルヘシト也、因テ安勝君ヲ首メ、七尾城ニ聚會シ、出軍ノ當否ヲ議ス、高畠定吉等前ンテ曰ク、越兵巨大ニノ驍勇也、公之ヲ援スルモ利アルマシ、今能登州中ノ兵ヲ舉テ向ハンモ、僅ニ三千ニ過ヘカラス、重テ羽檄ノ來ルヲ竢テ、可否ヲ決シ、出軍センニ、敢テ晩シト云可カラスト、諸將此義ニ一定ス、長連龍獨此議ニ從ハス、直チニ手兵千許ヲ提テ行ニ、白子濱羽作ニ到ル比ヒ、既ニ公大捷ヲ得テ入城スル所也、一書ニ、連龍同日ノ曉七尾ヲ發シ、已時ニ荻野、公遙ニ一彪ノ軍馬其旗海風ニ翻リ來ルヲ望ミ、脇田善左衛門帶刀、野村傳兵衛世本、之ヲ七兵衛ニ作ル、即ヲ斥候タラシムルニ、連龍ナレハ、公其節ヲ失セス、速カニ來ルヲ勞ラヒ、即チ末森ヘ迎ヘ、此時連龍七尾ノ疑議ニ依テ發行遲滯、公ノ姑ク情話アツテ、連龍秀友シテ、速來ノ志ヲ賞シ、七尾口モ其備ヘ嚴重アルヘシトテ歸サセラル、公又以爲ク、津幡城守兵寡シ、越兵恐クハ襲ント、乃シ奧村ヲ末森ニ置、村井、不破ヲ先鋒トシ、海濱ヨリ此時加州ノ兵追々ニ加リ二萬人許ト云、

天正十二年九月十一日



十二日、朝津幡城ニ班軍ナリ、公ノ由緒ニ、利家、利長入未森城、内藏介敗、不能認來路、自加賀路退到越中、利家、越中トアリ、問答ニハ、公班軍ノ時、成政引取殿軍ヨリ一里許後レテ、津幡マテ附ケ歸リニシ玉フトアリ、按スルニ、敵我地近ク來ルニ擊サルハ無勇也、シカシ其間ニ瀉ニテモアルヤ、景周、思フハ、是ハ附歸ニハアラサレトモ、後ニ其体ヲ考レハ、附歸ニテモアリシニヤトノ察言ナルヘシ、又一説、此時山陰ニ敵兵一陣見ヘタリ、我旗本ノ壯士之ヲ擊ント爭フ、公之ヲ制シ、是ハ齊藤甚介、寺島牛助兄弟末森ノ敗レテ憤リ死戦セント、此ニ備ヘタル者也、士力ヲ費サス、只管引取ト、濱通リ粟崎ヘ押シメ玉フニ、之ヲ喰留ント追來ルヲ、我後軍ノ徳山源七郎、堀喜市郎、今宿印齋等はヲ斬拂ヒ、敵首十餘級ヲ得テ、綏ヲ收ムト云、然レトモ問答ニ、末森大手ノ戰ニ、徳山源七郎、堀喜市郎、今宿印齋討死トアリ、參考スヘシ、又一書ニ、面田諏訪ノ森ニ小島、寺島ヲ統テ設ケ埋伏ス、然レトモ公之ヲ不擊ヲ過ルニ、西士靜ニ引取トアリ、又北國太平記ヲ按ルニ、此戰中ニ我兵ヲ今宿、徳山激マヌニヨリ、越軍ノ諸隊崩レ走ルヲ、急ニ之ヲ追テ、多ク討取ル、然ルニ越將齊藤甚介、寺島牛助ノミ圓陣ヲ作テ動カス、我衆此處爾タル圓陣一跳ヲ懸サント、旗ヲ進ムルヲ、公之ヲ制シ、此一軍擊テ我兵ヲ苦シマシムルヲ勿レ、此死地ニ備フハ其故アルヘシト、軍ヲ進メサルニ、果シテ成政七千餘騎ニテ進來ル、因テ今宿、徳山、堀兄弟(前註)云「此二堀兄弟ト云ハ、堀市郎、左太郎也、堀市郎ハ即チ上注未森城防戰ニ擊死ト」秋山矢之次郎等十騎許公ノ下知ヲモ用ヒス、進ンテ是ニ當ルニ、却テ之ヲ爲ニ皆死ス、今越兵之ニ氣ヲ得テ來ルヲ、公之ヲ切所ニ引テ、悉ク擊ント、士卒ヲマツメ引取玉フヲ、成政モ其機ヲ察テ綏ヲ收ムト云、大閤記ノ説モ同之、諸説不一、襲没巴鼻ニ、之ヲ折衷スルヲ能ハス、景周姑ク併載テ後ノ識者ヲ俟、此末森後援トシ公金澤發旗ノ時、丹羽長秀ヨリ溝口金右衛門、村上次郎右衛門二人ニ三千餘兵ヲ助メテ、溝口ヨリ上ノ村トシ、副ヘ、公ノ加勢ノ爲メ野々市泉野ニ著陣アルヲ、公ヨリ之ヲ押ト、メ、若シ我出戰ノ後、金澤邊土寇ノ難ナトアラハ、卿等宜シク討シ玉ヘトテ、辭テ從軍ニ加ヘ玉ハス、此丁公ノ遠圖アルトニテ、後ニ老練ノ良將之ヲ感スト云、

成政取鳥越

十一日、既ニ前文ニ記スル如ク、成政末森ヘ重テ進撃スルコトナク、却テ加賀路ヘ沿テ津幡城ヲ攻ント、内高松ノ池畔ヨリ横山ヘカ、リ來ルカ、津幡ノ方ニ旌旗多ク翻リ、巨兵群備ノ形勢ナレハ、成政津幡ヘハ向ハス、太閤記ニ、此時成政負腹ヲ立テ、此上ハ加州ヘ亂入シ、在々所ヲ放火セントセル其勢在所ノ茂リヲ便リ備シカハ、越中勢イカ、思ヒケン、引返シ、吉倉山ヘ兵ヲ引上ケ陣ストアリ、又津幡邑老甚丞傳記ヲ見ルニ、此時甚丞末森陷城ノ風聞ニヨリ以爲ラク、成政此勢ヒニ乘シ、金澤ヘ必ス横力、リニ打入ヘシト察

シ、實家ノ中條村半右衛門ト談シ、士民四五百ヲ聚メ、木ヲ伐テ竿トシ、帟ヲ接テ旌トシ、疑旌ヲ多ク山王山ノ松ニ結付ケ、金鼓ヲ鳴シ、多兵ノ形勢ヲ見ス、越兵押來ルトイヘトモ、成政此疑旌ヲ惟シメルヤ、津幡ヘハ向ハスヲ去トアリ、舊記ヲ按ルニ、天正十二年、澤河村田畑兵衛ヘ是マテ持傳ル山々ヲ永代恩賞アルトキ、加賀郡津幡村右衛門ヘモ三反六町ヲ永代賜ハルトアリ、是即チ恩賞ナラン、ルトアリ、少右衛門ハ二代目ナリ、又中條村半右衛門家傳記ニハ、公末森後卷トノ出軍、中條ニ至リ玉フ時、半右衛門ニ命シ、明曉此邊ノ峯々ヘ疑旌ヲ立テ、多兵ノ形勢ヲ見スヘシトノ曰ヒ、津幡ヘ急カセラ、依テ其如クナスニ、成政津幡ヲ避去ル、公金澤凱旋ノ後、半右衛門ヘ中條村ヨリ見ヘワタル山々ノ分是ヲ賜ルトアリ、當時ノ半左衛門ハ此半右衛門ヨリ七代目也、當時ノ甚、加茂社ヲ燒拂ハセ、相傳、古ヘ大社ナリシカ、此時社林等丞、半左衛門俱ニ瑞龍、微妙ニ公ノ御書傳藏ノ家寶トス、悉ク燒失ト云、成政之ヲ焚ワケハ、此社林大ナレハ伏兵ヲ置、前後挾撃ヲ疑ヒ、四五騎先ヘ遣シ、放火セシムルトナリ、(前註)此社ヘ即チ延喜式ノ加賀郡加茂神社ニシテ、緣起ニ、延喜帝ヨリ三百六十町ノ神田ヲ寄附シ玉ヒ、其比十三坊アリ、社人モ多ク、神事不懈ト云、然ルニ今年成政社林ヲ盡ク燒拂ヨリ、山間ノ路ヲ押テ、吉倉山、西ノ交ニアリ、南ニ至リ陣ヲスエ、景周、此道條ヲ按ルニ、今今ハ小社名ノミ殘レリ、山間ノ路ヲ押テ、吉倉山、西ノ交ニアリ、南ニ至リ陣ヲスエ、景周、此道條ヲ按ルニ、今今ハ小社名ノミ殘レリ、カス、不審也、何トカ此時分此處ニ問道アルヲ求メテ至ルナラン、末森古圖ヲ按ルニ、此戰後末津、高松川尻、今濱マテ沙山ノ上松林ナルヲ、殘ラズ伐捨サセラル、高松、今濱ナトノ村屋轉地アツテ、道條ヲモ替サセラルトアレハ、強テ今見ヲ以テ論スヘカラス、猶下文公ノ津幡、鳥越城、河北郡七黒村領ノ山峯ニ今三百歩許ノ平地アリ、土人之ヲ鳥越城ノ遺ヘニ歸リ玉フ處ノ注文ト照見スヘシ、鳥越城、跡ト云、津幡城跡ヨリ三十三町アリ、城山ノ高サ坂ノ間三町ト云、使ヲ立ルニ、寥然トシテ空城也、鳥越堡守目賀田又右衛門、丹羽源十郎末森陷城、公ノ後援不利也トノ風聞ニ驚衛門トアリ、然レトモ古澤家譜ニ、尾州ニテ仕ヘ、稻生合戰ヲ初メ、從軍不洩トマテ有テ、鳥越ノ一ナシ、有澤武貞筆記ニ、成政退クトキ、津幡山入ノ道ヲ通リ、僞ツテ末森一戰勝利ヲ得ルノ間、鳥越城ヲアケ渡スヘキ旨使ヲ越ユヘ、丹羽等恐レ城ヲアケ渡ストアリ、(前註)政春古兵談ニ、日賀田、丹羽、古澤三人ノ内日賀田、丹羽二人城ヲ明ケ退ク、古澤ハ其頃劊ヲ被ル「有テ、能州浦浦ヘ湯治ヲ留守也、古澤家人ノ留守居ノ者日賀田、丹羽ノ明退クヲ口惜ク思ヒテ、跡ニ殘リ討死ラナス、因テ兩人ハ追放、古澤ハ今以テ勤仕ト古澤勤六語ルトアリ、」成政是ヲ天ノ賜ト喜ヒ、亡失遺鏃ノ費ナクメ、即チ城ヲ得テ其將久世但馬ヲ置テ之ヲ守ラシメ、俱利伽羅ノ壘、俱利伽羅古隸磯波郡、今隸河北郡、此堡、ニハ佐々平左衛門ヲ置キ、(前註)政春古兵談ニハ、成政ヨリ小島甚助、寺島牛助、久世又兵衛ヲ置トアリ、是ヲ勝利トシテ越中ヘ引歸ル、按ルニ、當月十六日、秀吉公ヨ栗柄山ヨリ北ケ候由、先是二公末森ニ在テ以爲ク、成政今日敗ヲ取ヲ憤リ、一旦退クトイヘドモ、必承ルトアルナリ、



ス却テ津幡城ヲ攻ンコト案ノ内也、然レハ津幡寡兵ニテ之ヲ防ンコト難カルヘシト、即チ末森ヲ發旗、西濱通リ津幡へ著陣アリ、此ニ公ノ津幡へ著陣ト云者、上文ノ末森ヨリ津幡へ歸ルト云ト別事ニ非ス、一書ニ、末森ヨリ加州へ來ルニ大湖アリテ、其東西ニ道二條アリ、公ハ西ノ道濱ヨリ歸リ、成政ハ東ノ道山ヨリ過ル也トアリ、又一書ニ、寺島兄弟及ヒ久世久兵衛兵千五百ヲ鳥越ニ置テ、成政ハ夜中ニ木舟マテ引取トアリ、景周此註文ヲ考ルニ、公ハ西ノ濱道ヨリ歸ルトハ、外高松宇野毛、狩鹿野、指江、津幡ト歸リ玉ヒ、成政ハ東ノ道トアルハ、末森城ノ堅守侵スヘカラサルヲ以テ、却テ津幡ヲ攻ント思フニ、幸ニ鳥越空城ナレハ之ヲトイヘトモ、疑旌ノアルヲ以テ取カ、ラス、間道ヲ求メテ吉倉山ニ至リ、鳥越ヲ攻ント思フニ、幸ニ鳥越空城ナレハ之ヲ取リ、夫ヨリ竹橋森、俱利伽羅ト夜中ニ木舟マテ引取タルナルヘシ、景周又按ルニ、成政才將ナレハ、末森ノ戰ニ後レヲトリ、其儘越中ニ歸ルトキハ、兵ヲ費ヲ益ナク、外ニハ恥辱ヲトリ、内ニハ諸士ニ侮トラル、因テ鳥越七鐘（前カ）ノ森人ヲ遣シ、末森陷城、大將不殘討ル、由言フラス、故ニ日賀田、丹羽恐ル、所ヘ、西北ノ山々敵ノ旗先見ユルニヨリ、城ヲアケ退クナリ、之ヲ幸ニ城ヲ得テ、成政末森ニ不利ヲ取トイヘトモ、勇氣屈セス、却テ敵地へ踏入、一城ヲ取テ歸ルヲ内外諸士ヘノ解言トフ、後日世人ニ見ラ

目賀田又右衛門ノ經歴

者ヲ馳ラルノ處、小林喜左衛門鳥越ヘノ使者也、今ノ藩臣馳歸リ、鳥越ハ陷城シタルト見ヘ、越旗既ニ翻搖スト以告シケレハ、公、目賀田又右衛門等ノ節義ヲ守ラサルヲ怒ラセ玉ヒ、（頭註）此後數年目賀田流浪セシヲ、天正十六年、我公邸へ同盟ノ諸侯饗會ノ時、蒲生氏郷、淺野長政等徳山五兵衛、齊藤刑部ヲ以テ日賀田免許本國ヘ召返シ玉ハルヘキ由ヲ公ニ乞ハル、ニ、公對テ曰ク、彼ハ源氏ノ裔ユヘ姓名ヲ耻テモ、城ヲ固守スヘキ者ト、守城セザスル處、武道ニ闕タル大膽病ノ士也、然レトモ彼カ命ハ各ヘ進ルトテ事スムト也、按ルニ、日賀田先祖正忠信良ハ佐々木六角判官氏頼家人ニテ、藤井寺合戰ニ安肥肥前守忠實ヲ進メ、和木楠ノ陣ヲ破ル、無雙ノ剛者ナリト云、（頭註）景周曰、如日賀田等子古武門ノ大罪臣也、然蒲生氏等再薦之何哉、公對之言不啻寬仁、亦是土病之鏡也、是ヨリ速ヤカニ鳥越ヲ一舉ニ攻屠ルヘシトアルヲ、村井、不破、徳山、片山言ヲ一ニシテ諫テ曰ク、公ノ神武英威既ニ今朝ノ大捷諸人目ヲ驚カス所ナリ、今此葛爾タル一堡ニ兵力ヲ費シ玉ハシコト益ナシ、它日生兵發旗シテ陵城アランニ、何ノ晚キコトノ在ンヤト、公之ニ從ヒ、一説、公一先金城ニ歸ラセラレ、十三日、公金城ヲ出軍、森下、栗崎ニ備ヲ立サセラレ、鳥越ヲ一時ニ攻取レトノ玉フ、其時村井、不破是ヲ

強テ諫止ヲ奉ルニヨリ、又歸城アルト云ヒテ、又同書、同月十四日、公鳥越ヲ攻ント出馬トアリ、此ト重復也、按ルニ十日ニハ、直ニ金澤へ還城アツテ、十月十四日、再ヒ公發旗アルコト疑ナシ、此説誤ル、太閤記ニモ、公末森城ニ在シカ、佐々加州へ亂入ト聞ト等シク、濱邊ヨリ金城へ丑刻ニ歸リ、寅刻又打出、森本、栗崎へ至ル、佐々ノ物見ノ騎兵五六人馳來ルカ、是ヲ見歸テ斯ト佐々ニ告レハ、上方勢著タルニヤトテ、木舟へ引入トアリ、此説モ尤非ナリ、十二日ノ始夕見開集ニハ、サルトキ尾山城ニ凱旋シ玉ヘハ、士農商賈盡トク街尾ニ出、簞食壺漿シ、喜躍シテ迎ヘ奉ル、而シテ公即チ秀吉公へ聘使ヲ以テ、末森ノ捷ヲ告ク、秀吉公聘使ニ見ヘ、公ノ忠戰ヲ嘆賞ア薄行ノ狀ヲ憎ミ、向ニ成政カ質トシ出シ置處ノ女並ニ乳母ヲ粟田口ニ於テ磔ニスト云、

〔越登加三州志〕三十三 能登羽咋郡

末森 押水北ノ庄吉田村領ニアリ、末森トハ城地ノ名也、或ハ末守ニモ作ル、今猶此城地東ノ方ニ平地八間ニ十一間餘、其西ニ五間ニ十一間許、其南ニ八間ニ十三四間、是ハ一段低シ、其上ニ三間餘ニ三十間計或ハ五間、其西十三間ニ三十五間許或ハ二十間、其西二十間餘ニ廿間餘、其西二十三間許ニ十九間許、此所并アリ、其西ニ八間許ニ七間餘、其西ニ九間許ニ十一間餘、此所櫓門跡アリ、但シ武者屯ナシ、其西ニ七間計ニ十五間餘等ノ平地アリ、東ノ方ニ道アリ、愛宕山ノ續ク尾也、峯通次第ニ卑シ、搦手ハ宿並ニ出ル坂、大手ヨリ長ク急也、大手口峯續キ尾先長シ、今濱へ出ル、此下ニ町口ノ跡アリ、南北前後ハ皆谷也、尤土居壘跡所々ニアリ、此地吉田村、麥生村領ト云、加登ノ界也、又一本ニ、本丸四百六十坪許、脇郭本丸ヨリ二寸五分下ル、後郭本丸ヨリ七寸下リ、三丸ヨリ二寸下ル、二丸ハ本丸ヨリ三寸下ル、三丸ハ二寸下ル、若宮丸ハ三丸ト等シト云云、又一本、本城三十間許ニ幅十一間、二郭十九間ニ幅十一間、三郭二十二間、幅八間ト云云、是皆時代年ヲ歴ルヲ以テ此違アルト知ルベシ、此障徼其古ハ不可考、天文十九年五月、遊佐美作續光加州松根ノ洲崎兵庫ヲ勾引シ、能登へ襲入ノ時、末森城主土肥但馬川尻ニ出張、前途ヲ遮ルコトアリ、此時但馬四萬石ヲ領ストアリ、是末森城主名見ハル始也、次テ天正八年、柴田勝家加州ノ劇賊ヲ攻撃ノ時、佐久間盛政加州車ノ山ヨリ竹橋ニ出、夫ヨリ末森ヲ攻ム、堡主本多三彌、西郷新太郎等防クニ堪ス、走テ加州鳥越ノ弘願寺ニ入ヲ、盛政尾撃スト本記ニアリ、續本朝通鑑同之

末森城跡



天正十二年九月十一日

一三八

北國太平記ニ、天正ノ初メ、越前ノ柴田勝家加越追討ノ頃、河北郡ヨリ末森マテ押ツクムトアリ、疑クハ是此本文ト一事ナラン、又太田日記ニハ、天正八年三月九日、勝家加州ニ亂入、夫ヨリ能登末守ノ土肥但馬ノ籠ヲ攻テ、歴々ノ者數輩討取、在陣ノ處ニ、長九郎左衛門飯山ニ陣シ、手ヲ合セ、處々放火ストアリ、一書ニ、今年、末森ノ堡主土肥但馬土肥傳、我國祖ニ隸ストアリ、按ルニ、今年國祖能州ノ州事ヲ掌、十一年、但馬柳ヶ瀬ニ於テ戰死ニヨリ、國祖但馬ノ弟一爲、伊豫ヲ在城セシメ、要害ヲ修補アリテ、本丸ニ奥村助右衛門、二丸ニ千秋主殿助、瀧澤金右衛門、三丸ニ土肥伊豫ヲ置、十二年九月、佐々成政此城ヲ圍攻ノ、鐵桶ノ如シ、然レトモ奥村等墨守ス、十二日、國祖急援、越兵解圍ノ去リ、城兵萬死ヲ脱ス、

坪山陣營

坪山 又作壺井山、坪井山、末森ヨリ南方一里強、山上ニ長サ三十間許、幅七八間ノ地アリ、今此禁ニ民戸有テ、即チ是ヲ坪山村ト云、（領註）坪井山ハ、或ハ古記、末森ヨリ一里半強ト云、末森問答ニハ二里傍トアリ、然レトモ前説ニ因ヘシ、蓋シ營跡也、一本、長可八十間、幅可十一間、高下五六間トアリ、押水中庄内也、天正十二年九月八日、或作九日也、又作十一日者非也、佐佐成政能登ヲ略セント越中富山ヲ發旗シ寶達山後ノ間道ヲ經テ下河井（領註）下河井今作下河今、ニ抵リ、九日曉、坪井山ニ下營ス、

〔越登加三州志〕三十二 故墟考四 河北郡

鳥越

鳥越 在井上庄倉見村與笠野郷七黒村之領界、鳥越村ヨリ十町許南ナリ、遺跡跡異ヨリ乾ヘ細長キ地勢ニテ、其狀大氏毘毘様也、長コト三百歩許、幅僅ニ五間、其廣平ナル所ハ乾方ニテ形六角也、一周六十九間アリ又俱利伽羅ノ方ニ一區、一周十二三間アリ、又津幡ノウヘニ二區、一ハ一周、十八間、一ハ一周、十四五間アリテ、段々津幡ノ方ヘ下ル、自金澤四里、圖別ニ有之、文明長享ノ頃、此所ニ一向宗旨ノ弘願寺アリ、後ニ此寺ヲ津幡ヘ移ス、釋賊ノ兇魁也、天正八年、盛政末森ノ守將本多三彌等ヲ尾撃メ弘願寺ニ入トアリ、又今年勝家陷イル諸城ノ中ニ鳥越アリ、七國志ニ見ユ、十一年、國

祖此地ニ築堡シ、目賀田又右衛門、丹羽源十郎等ヲ置テ、加越境成トス、十二年、目賀田、丹羽、成政ニ恐レ、此堡ヲ棄テ逃亡ス、因テ成政、久世但馬一説、作小鳥甚ヲ置、十三年、但馬ヲ引トル、

内高松

内高松 在金津庄内高松村領山與池之間、

○上 末森問答ニ、十二年、國祖末森後援ノ時、神保氏春之ヲ拒ント、内高松ヘ出張ノ待ト云、今校直方云、今ノ高松驛ハ中古ト別所ナレトモ、世人其コトヲ不知、天正十二年ノ取合ノコトニ不審ヲ起スユヘ記之、佐々成政末守攻ノトキ、本陣ヲ坪井山ニ居テ、神保安藝父子ヲ金澤ヨリ後詰ノ勢ノ押ヘトシ、面田川尻村ノ砂山ニ備サシム、然レニ、夜中海端ヲ追々金澤兵ノ過ルヲシラテ、末守ヘ通シヤリケルヲ、今不審スルハ、今ノ高松邊カノ沙山ヨリ海ヘ二三町許ノ内外ナルニ、餘リナル由斷ノヤウニ思フユヘ也、按ルニ、今ノ高松驛ハ三度目ノ轉地也、天正後海浪ツケヨセ、末守攻ノトキノ驛ニテハ居住ナラス、山手ヘ居所ヲ移テ數十年ヲ經ルニ、又海浪ツケヨセ、其驛モ堪カタク、又山際ヘ數十間、或又其後百餘間モ立退タル也、サレハ今ノ驛ハ末森攻ノトキノ驛トハ轉地三度目也、天正ノ高松驛ノ用水ノ井筒、海際ヨリ三四町餘沖ニアリ、海底ニ入テミレハ顯然タリト云、然レハ此井筒ノ所ヨリ海汀ヘ又幾程アリシモシレス、推置スルニ、浪打際マテハ七八町モ有ヘキヤ、然ラハ浪打際ヲ夜中ニ忍ヒ通リシヲ聞ツケサルコト、其理リ無ニ非ス、凡テ北海ハ近ヨリ、南海ハ地廣ナルコト人皆知コト也、

津幡

津幡 在井上庄、東鑑作都幡、理盡抄作津波多、北條九代記作津旗、皆同、

○上 天正 十一年、前田秀繼君父子此城ヲ守ル、十三年今、十三年、國祖此所ニテ調兵アリ、事ハ本記ニ詳也、

〔新撰豊臣實錄〕十二 佐々成政欺ニ加州附能州末森城并越中國鳥越將驚走部

九月上旬、成政先欲レ拔ニ末森城、使其甥佐々喜右衛門今按、喜右衛門者成政之甥、又姪婿也、生涯武譽籍甚、時占越中國小井手城、天正九年二月十二

佐々喜右衛門

天正十二年九月十一日

一三九



日、成政依（根下同）信長之命、與（門院力）三則神保安義守氏晴、喜右衛門留守在（長門）小井手、越中松倉城主河田豐前守告（長門）之越後上杉喜平次、景勝悅竊其隙、自率多兵、攻（小井手城）喜右衛門克守城、輕命重義、數回競戰、遂使（景勝）空歸于越後、成政歸後、大感賞曰、今般之武勇其歷（鬼神）耶、自今改（汝名喜字）可書（三）鬼字（云々）、人皆膽（炙之）、後歷進祿（三萬五千石）、其子數輩各有（美譽）矣、北仰（中）上杉景勝、成政率（一萬五千）兵、自陣于坪井山、（在越中）就中魁將菊池伊豆、同十六郎、佐々平左衛門、野々村主水、前野小兵衛、佐々與左衛門、堀與八郎、（時祿三五）同虎福、（今按、與八郎弟、時十六歲、後號三角左衛門長仍多武譽）山下甚八、佐々新右衛門、寺島甚助、同半助、寺庄市兵衛、野入平右衛門、齋藤半右衛門、堀田次郎右門、櫻勘助等分（八）千兵、圍（末森城）、主奧村家福指（揮兵於町外）欲防之、軍前越中兵俄辟易、奧村蚤察、有（淮陰之井徑之術）、曾不追之、只燒其比屋、退于壁、果越中兵急進欲入壁、城兵千秋主殿助及三好勘左衛門、野瀬次郎右衛門、野崎孫助、同與左衛門等怒反戰、且土肥伊豫師（二百餘人）而奮擊、佐々平左衛門、前野小兵衛令兵與之競爭、伊豫雖勵聲大擊敵、以其兵悉死亡、不（得）已欲退于城、然為（越中）城中急襲之、伊豫不（得）入城、與堀虎福突戰于城門、虎福遂擊伊豫、得（其首）、成政大感賞之、越中兵愈勇將入壁、城兵三好勘左衛門、野瀬次郎右衛門支（鑰於木戶口）而力戰、突敵二人、終進（數兵）、奧村出（于三九之外）曰、猛兵不漫接、宜速去、三好等應聲而退、以下城兵不下三丸之揚實戶而入、越中勢忽認蹤來、野崎孫助、同與左衛門（共末森士）、竭來合鑰、遂拂敵下揚實戶而后歸、人皆稱之、城兵高野瀬左近、瀧澤（或號大西）、金右衛門悉燔（所）近于丸（三脫力）之比屋、避其邪妨、以禦敵之火矢、越中勢又劔戟輝天、鯨波轟地

市庵太閤記ノ批判

而襲繞、銃射之響、螺鐘之音無（一一）不消魂、奧村父子、千秋主殿等不恐之、整兵正令嚴守之、成政自坪井山出馬、使其兵代魁兵、以攻奧村數回突出自力戰又潛守、為（藁科新介）、三輪勘左衛門、同彌十郎、野崎新六、高崎次兵衛、前波三四郎、白四郎右衛門（以上皆城兵）、等悉粉骨而戰、成政亦不（得）容易破之、奧村之妻克佐家福、而守城之暇、晝營衣食、親勞戰士、夜巡城匝、嚴勵疲兵、或代夫決籌於帷屋之內、或先衆振勇於城壁之外、者既數回、可謂其功不讓涼錦織夫人矣、為奧村父子亦晝夜遶城而迭守、撫士示義、以定羣志、城兵一趣、皆欲死乎此、成政不堪倦屈、潛千秋主殿助曰、吾子倘變志與我則我必以能州半國、（今按、二郡）黃金千兩而賞之、吁夫合掌、則速致誓書、吾儕之固望不（外）之、千秋嘗不肯却告之於奧村、以愈全義、（今按、市庵之記以千秋為叛逆之士、余今及編此書、精問具尋紕之、則甚不然、其孫千秋外記傳、彼書於今、而千秋從來與奧村共守城能立功、故軍後利家摺感書及加祿於千秋、以稱美之、為家寶、豈其如市庵之言哉）成政謂神保氏晴父子曰、利家定救末森耶、吾子今陣于川尻而拒之、故神保父子率四千兵、山行以遮其路、雖末森合情而克守戰、為籠城急遽失便宜、糧竭水乏甚苦之、至若越中勢能知一丸之櫓門共不日築營而不全備、既欲破根闢而闖入、城兵提鑰長刀、自本丸突出忽退之、然以多勢交替存斷圍、城兵不（得）已避一丸、固一門、（在二本丸）欲枕干以死乎此、雖奧村幾度欲告金澤、（指利家父子、今按、此時利家在金澤、利勝在松任）四面如發楚歌、難得隱形之術、一人（今按、家福諱代者云々）進請往金澤、奧村大喜、使謂利家曰、今般佐々



氏圍末森、荐攻擊、雖臣等守城克苦戰、糧盡兵疲、既不堪相支、公甚速救之、縱令雖城拔而慶死、臣等要不傲、季陵之事、乃命使曰、吾子見危授命者、絕倫之忠功何事過之、以利家從來知汝、不及別呈書簡、請克委我情、我亦待汝棗龜、勸孟以出之、十日、月、九、晚、使遂至金澤、告之、利家深感奧村等之忠義、而勞彼使、欲救末森、忽促之、時浮說區曰、奧村既致、拔寄城於敵、利家不信曰、昔年奧村守尾州荒子城、今按、荒子利家父前田之居城、之日、曾背信長之朱印、而不捧城、矧於今哉、假令雖勢盡及切腹、彼本非計、拔捧城者、吾豈不救之、先遣使士於松任、招利勝、馳脚夫於能州、使七尾之兵、速向于末森、俾前田藏人入道、今按、利家兄、及魚住隼人、留于金澤、守城、十一日、未刻、或作戌刻、利家既首途、自切甲冑之緒、餘而示死戰、蓋依重今般之勝破也、世傳、斯時利家夫人摘髮斗鱖魚、搗栗、自携溫酒、故諸兵亦悉究志、時丹羽長秀、今按、時長秀城、越前北庄、俾村上次郎右衛門、溝口金右衛門、寄加兵三千、利家大喜謝、二士剛請赴于末森、利家不許、使之殘金澤、以備于國中之一揆、自率數千兵、出金澤、不破彥三、村井又兵衛爲魁將、通宵馳驅、側聞銃響於津幡之町、諸軍知末森未敗、利家先入津幡城、而休憩、使記諸軍之著倒、今按、倭俗謂署兵之多少、爲記著到、以考兵之多少與遲速、今按、斯兵兵千五百人、利勝兵七百人、不破、村井等士卒千三百人、都合三千五百人云々、果利勝亦馳來于此、利家集諸臣、暫評談、或曰、自此馳使者於末森、聞得軍事、而後救之、或曰、成政示多勢於末森、而不餘尺土、且張堅陣於末森

之外一里餘、以禦金澤之救、豈其得入于末森、不如此速歸陣待敵於金澤、而決一戰、前田右近、寺西治兵衛、今按、二士共津幡之假主、諫曰、成政斯際之重催、豈不敗末森、縱令雖不敗、神保既扣四千兵於川尻、則我兵定迷于半途乎、臣請、願堅守當城、津幡城、以達事於秀吉、利家皆不肯曰、軍中有如此之諫、則兵士必失勢機、今也令蹈破自國于敵陣、而不佐奧村以下、則吾儕生涯之過謬、雖他後得居多之功、有何益、且歸于金澤、而待敵之理甚拙、軍將閣要戰、有謙退之氣、則時去神離、必招自亡、直饒雖成政率數萬騎、我豈避之、單騎死戰救末森耳、世傳、此時前田右近又進曰、城下有陰陽師、克卜事、不如此使之考、時刻證吉凶、以發、而呼三五十歲餘之山伏、利家見之曰、博士者耶、吾既究志、汝占之、山伏不披笠書、忽答曰、時既至、速之則則軍得三大利、利家喜曰、汝克察、時宜、歸陣則吾、德山五兵衛入道、今按、德山者法師武者也、進曰、制事之宜者士之格也、指爲得之一賞、汝、而出馬云々、故世號五兵衛入道云々、進曰、制事之宜者士之格也、指爲得之一者、爲義士、公言今至極于理、曷不忽之、如臣從其命、既出馬、軍中或有下不辨是非、從悅向于敵者、或有與任俠將捨命不可始驚、而進者、利家父子出津幡、不破、村井爲之魁、屬之者原隱岐、前田又次郎、今按、又次郎與父秀繼共守津幡、多野村三郎四郎、今按、多野村或上京、號勝入、武藤助十郎、片山内膳、岡嶋喜三郎、後號、前田宗兵衛、今按、宗兵衛者利家之弟、後號、近藤善右衛門、青山與三、以上皆利家士、等列行至川尻邊、利家扈從篠原勘六、後號、爲頃間病惱、苦起居、利家殘于金澤、使與藏人入道、共留守、勘六不肯之、乘駕率屬兵、與力、二十騎、追隨川尻、曰、篠原勘六來於此、利家大感之、今按、爲斯時勘六有功于末森之軍、後利家以姪神保氏晴雖陣于川尻、妻之、昔年列三武州八王寺之役、尤有譽、人皆知之、神保氏晴雖陣于川尻、







五騎、利家爲一、陣村井長賴、二陣奧村家福、多野村三郎四郎、三陣不破彦三、四陣利勝、以備之、成政臻于此、窺軍機、舉鯨波、終山行而空去、利家亦察、佐佐之武略、不追之而送納兵、時一千餘兵自七尾邊馳參、利家使游偵脇田善左衛門、野村七兵衛見之、則長九郎左衛門今按、時長與諸士共守七尾城也、長聞軍既了、而大悔曰、今被羈于高島織部、中川清六今按、二士與長之愚議、而不預斯陣者、遺恨藉甚、我今放於軍、何忍在士、而乍薙髮、脇田等反命、利家感曰、今也長匪諸士抽而一人馳參而已、又悔其洩于軍、而乍落髮者、信勇著然、吾克知其不拙矣、今按、今般七尾城主等聞利家使而胥議曰、縱令雖利家拖加勢、向未森亦不可知、然則七尾兵僅三千、舉城往者甚訝、不知今一聞告而後發、而不決之、長進曰、利家若訝未森之救、則豈曰捨七尾而來、今判形既至、則易及疑之、始我從先使而獨出云々、成政大恚其謀之齟齬、亂入加州、先欲破津幡之町、然爲津幡兵屯町外之茂林、而支成政察其不可急破、聚兵陣吉倉山、越中鳥越城主目賀田又右衛門、丹羽源十郎今按、利家昔時使彼徒守鳥越城、等今般誤聞利家輸于末森之軍、而甚驚懼、今又見敵之攀于吉倉山、而不堪倉皇、捨城而悉逃散、今按、使奧村之徒守之、則枕城而忠死必矣、吁其義士難常得哉、成政隊長齋藤甚助、寺嶋牛助、兄弟久兵衛後號但馬、率二千兵、雖圍鳥越、爲城主既出犇、各取城告成政、成政大喜、先入彼城、欲攻加賀、利家父子不知知之、翌日向留于末森、大賞奧村父子、千秋等、勞諸士正功罪、目獻今般所擊之成政之隊長之頸十二於秀吉、今按、時秀吉在大坂、利家使奧村、千秋等、彌守末森、曰、成政定禍乎津幡、吾欲往救之、鄉曹相懋莫怠、敵又出張則吾必急救之、乃至津幡城、使

告諸壘曰、吾今全勝利於末森、諸將堅志克守城、小林彥左衛門利家自鳥越歸云、城鳥越、既拔敵徒之、利家父子驚大怒悔、雖成政既欲攻加賀、留齋藤兄弟久等於鳥越、自出馬粗焚加賀之民舍、聆利家父子至津幡、班兵入貴布禰城、成政附城、利家欲追伐之、爲不破、村井等強諫之、利家父子遂歸金澤城、果利家撰感書於奧村家福曰、今般遂末末森籠城、苦戰持定候段、無比類、忠節令大慶候、雖爲少分、爲加增、以押水地名之內、千石令扶助、畢、並與力之者三十人附與之、如件、天正十年甲申九月十六日、利家下奧村助右衛門云々、今按、雖感書文字稍淺拙、爲乃日自加州得彼書之寫本、上不改二字、直記之、以爲後證耳、下倣之、利勝亦別賜悃牘、以褒美焉、利家又畀感書於千秋主殿助曰、今慶末森籠城無異儀、持定候段無比類、勳候、雖爲少分、爲加增、以押水之內、千石令扶助、今按、千石今之五百石也、昔日利家祿品頗以千石數、名之云々、後倣之、令扶助畢、全可知行者也、仍如件、天正十二年甲申九月十六日、利家下千秋主殿助云云、以上求千秋之孫所相傳之感書、而寫之、故不改一字、直記與此感書、且聞年將小松中納言利常、金澤少將光高父子閱彼狀、甚感千秋功云々、故今舉之以爲後證耳、利勝亦有別簡、今略之、十九日、秀吉寄書於利家曰、雖今般佐々成政率多兵、不意襲攻能州末森城、城主奧村助右衛門等粉骨大勝、寄成政之隊長之頸十二於此者、當家無二之忠功勳、何事過之、向來彌申令可使慎、其不意云々、果秀吉擒成政之質子今按、成政之女、時九歲、與其乳母共、磔于洛外栗田口、以報其叛逆、入皆無不憐焉、



天正十二年九月十一日

一四八

〔川太閤記〕<sup>五</sup>

○舊南葵文庫本 東京大學所藏 一同年九月八日（天正十二年）こ、又内藏介殿能登へ打出、末森之城

を被攻候由を、九月九日之節句こ、能登が又左衛門殿居城（尾十間）へ注進也、日之比ハ四ツ時分也、末森こ被指籠物頭ハ奥村助右衛門、子息助二（十）郎父子也、近年高野領こ率人仕罷居候つる奥村休巴親之事こて御座候、末森之城を被攻候事、翌日九日四ツ之比ハ八ツ時分迄攻被申候、火矢を懸被申候へハ、城落城可仕物を火矢ハ無用也との子細ハ、其比内藏介殿人を數多被抱候故、國こ兵糧とほしく相聞へ申候、燒崩候へハ、兵糧以下すたり申候、城之兵糧を我國へ可取籠と、よく○別本コノ間心ノ一字アリ、故落城不申候を後悔と聞へ申候、二時計之城攻こ内藏介殿手前之者も手負、死人數を盡と相聞へ申候事、

一又左衛門殿分別こハ、内藏介殿とせりあい四度也、其内三度は我手前失勝利者也、此度末森之城被乗捕候ハ、無面目次第也、十死一生之有無之一合戰こ覺悟を被極、内藏介殿陳被取候所へ之中間之積を能工夫し、明十日之ほのく明之合戰と被相定、家中へ一言も觸不被申、日之程をさけすみ、はや時も能とやおもはれけん、おすへこて、具足を著被申候處こ、不慮なる夫婦いさかい出來す、其○別本、コノ間ニ子ノ一字アリ、細者、肥前守殿御袋江戸人質こ御座候時者、ほうしゆいんと申候つる、又左衛門殿おすへこて、具足著被申候時、女房達を被召連、かね藏をあけ、しやうぶかわの袋こハ金子、なめし袋こハ銀子、金銀之皮袋を御内儀も手

成政末森  
城ノ兵糧  
ヲ奪ハシ  
トシテ火  
矢ヲ禁ズ

利家成政  
トノ合戦  
四ケ度ノ  
中三度ノ  
北三度ノ  
説スト敗

出陣ニ際  
シ利家夫  
婦相争フ

こ持御出候、御内儀言葉こハ、又左衛門殿よく御聞候へ、秀吉様御意こハ、内藏介おさへ之爲こ、當國半國、能登一國被下候也、信長様之時、女之身こても聞及まいらせ候ハ、佐々内藏助殿ハ武功かさなり、其上手づまのき、たる上手人と、誠也下々以下迄も清須より安土之御城こても、其沙汰朝夕聞及まいらせ候、女之身こてもそれを思出、金銀之御たくわへ唯今ハ先御無用こて候、大事之敵被指向候上ハ、先人を御抱可被成事尤こ候、さて世間も御國之しつまり候時ハ、又金銀も不入物こてハ無御座候、其時分ハ能々國之しまつをも被成、金銀御たくハ被成候へと、朝夕異見申候、此度此金銀を被召連、鑓を御つかせ候て可然候とて、金之かわ袋を又左衛門殿へ御打付被成候と相聞へ申候、又左衛門殿ハ、出陳之門出いわんとハ不思して、我身こ腹を立さする事則敵そとて、かづかを引付、軍神こ祝ハんとて、被指たる大脇差をぬかんとし給ふ所を、そば廻之上臈衆取付、つかみつきおし歸候處こ、年寄之つぼねの上臈御門出目出度候、佐々内藏助たぶさを御手こ懸られ、御引付可被成事ハ、明日之内こて御座候ハ、めてたしこて、御門迄其つぼね悦事を被申なから、打送り被出と相聞へ申候事、

一又左衛門殿ハ城を御出候て、子息肥前守ハいかに、未不出哉と御尋候處こ、岡崎備中守、はや御進被成と相見申候、城ハ一里相隔り、宮のこしと申所こ備を立、御親父を御待候

宮腰

天正十二年九月十一日

一四九



備を見付申、はや御先にそなへ見へ申候と披露申候へ、そこにて機嫌ヲなをし、實也、あの備ハ肥前守也と、事満足けに見へ申候と相聞へ申候事、

一夫御人數打續くり出し被成候、先手ハ肥前守殿也、猶行くて内藏介殿陳取と一里計隔り申候、未夜ふかかりけれハ、人馬之息を休メ、暫やすらい、兵糧をつかひせ被成候つるか、時ハはや能そとて、十日之ほの明に押寄せられ候處、内藏介殿陳取ハ山也、城下にくすやの町御座候、其町を陳取候人數千四五百も御座候處へおし寄、時を作り懸候へハ、敵ハ取物も不取敢敗北す、頸を取候へハ手ふさがるもの候間、切捨させよとて下知し給ふ、夫ハ内藏介殿方ハ鐵炮大將野々掃部其外取合、山半分程内藏助陳取よりおりさかり、中こ攻上れハおもしろし、火花を散らしたる合戦と相聞へ申候、内藏介殿方之鐵炮大將野の村を始として、はや物頭二三人討死也、又左衛門殿方ハ子息肥前守殿鐵炮手二ヶ所、され共深手ハ相聞へ不申候、徳山五兵へ惣領討死也、夫ハ少々鑓も打捨く、太刀討と聞申候、又左衛門殿左之股ハ太刀疵、夫ハ被攻上候へハ、内藏介殿も不叶とやおもハれけん、北を指て、海道こか、り敗北す、城之内ハ、奥村助右衛門父子切出、一手こ成付送り候、又左衛門殿ハ手負なからさいを取付所、是ハ先ハ無用也とて、夫ハ六七町追討ヲ討せ、馬を立、味方之勢を制して、跡へ被追戻候、其所ハ四五町ありさかり、廣場有所ヲ、内

徳山五兵  
衛ノ惣領  
死ス

利家成政  
ノ尾山攻  
撃ニ備ヘ  
テ竹橋ニ  
兵ヲ伏ス  
高島石見  
守

々又左衛門殿被見及候、氣轉早ク出申候と相聞へ申候、定内藏助人數を集、備を立、夫ハ又可追返と、内藏介分別可有之候、如案其廣ミ之場ハ人數備、又左衛門殿人數を被待懸候處、五六町前かとて又左衛門殿味方之人數を跡へ被追戻候事、

一又左衛門殿居城ハ山を御出之時、合戦ハ勝候ハ、定而内藏介内々心を知候、其一合戦ハ負候とて、苦こ不持、すきまかそへの者也、目聞氣轉ノ早キ人なれハ、我居城ハ山之城へ北海道を竹の橋へ懸り、留主をねらふべきおうちやく者也とて、竹ノ橋之峠、又左衛門殿姉聳高島石見守物頭ハ鐵炮をかけ相待候へ、内藏介合戦ハ負なば、彼道へ可指懸也、待請くたりさまに鐵炮を討懸よと被言合、彼峠ハ待懸候處、又左衛門殿推量少も不違、合戦ハ負たりといへと、又左衛門居城をさへ取ならばと被懸懸、竹之道ハ被指懸候處ヲ、高島石見人數を伏せ、矢比こ引かけ討懸けれハ、なしかハたまるへき、内藏介殿先手谷をくたりこ敗北す、夫よりつくならば又可追返と、高島分別、一足も付不申候、備之前こ、其儘有かまハぬ様もてなし候故、内藏介殿取付無之、越中之居城戸山へ引取被申候、又左衛門殿大勝、右之三度之勝利を被失候よりも五さうはいも上之勝と相聞へ申候事、一さて又左衛門殿二ヶ所之軍ハ打勝、御心地よげに居城へ歸陳して、家中之者之一番鑓、二番鑓、其次第く穿鑿して、加増褒美それく被行候、然所ハ篠原出羽と申者、其比大事

篠原出羽



之腫物を相煩、存命不定之躰家中こも其隠無御座候處、乗物にて罷出、合戦之時ハ、侍共こ乗物をか、せ、一番鑓、二番鑓ノ相申所迄、少もさからず乗懸申候、行歩不叶故にや、乗物より罷出事ハ不成候、敵方ハ、又左衛門殿乗物かと相心得、目懸、鐵炮頻こ討懸申候、され共不起候故歟、鐵炮ハ一ツ股こあたり申候と聞へ申候、又左衛門殿吟味こハ、行歩不叶故、乗物ハハ不出候へと、家中之侍共へ之令見、又ハ心懸神妙也とて、一番鑓こ被相定候、加増五千石被遣候事、

〔武家事紀〕

續集 戰略

前田利家能州末森後責

○上略、成政ノ兵、朝日山ヲ攻ムルコトニカ、ル、八月二十八日ノ條ニ收ム、九月九日、佐々成政外山ヨリ兵ヲ出シ、坪井山ニ本陣ヲスへ、川尻ニ神保父子ヲ備へシメテ、金澤後責ノ押勢トシ、山下甚八、佐々平左衛門、前野小兵衛、野々村主水、菊池伊豫守、同重六郎、寺島甚助、同牛之助、本庄市兵衛、野入平右衛門、齋藤半右衛門、佐々與左衛門、堀田次郎右衛門、佐倉甚介彼等ヲ大將トシテ、都合八千餘ノ兵ヲ以テ、一日一夜末森ノ城ヲ攻ム、城兵町口ヲ放火セラレテハイカ、ナリトテ、逆寄ニ出向、土居伊豫守上下二百餘力戦ノ戦死ス、奥村、千秋、龍澤金右衛門等堅守リ、後責ノコトヲ利家ニ告、利家金澤城ニハ、前田藏人入道、魚住隼人ヲ大將トシテコレヲノコシ、不破彦三、村井又兵衛ヲ先手トシテ、十一日ノ未刻金澤ヲ出、津幡城ニ入、馳來ル味方ヲ待

合ス、松任ヨリ子息利長モコ、ニ馳付テ、後責ノ次第ヲ議ス、成政大勢ニテ、一日一夜ノ力攻ナレハ、城ハモハヤ可陷間、直ニ只津幡城ヲモチコタヘラレ可然ト、津幡城主前田右近ヲハシメ、各コレヲ諷諫ストイヘトモ、城ノ後責ヲイタス法、如此手ノビナルコトハ軍ノ令ニアラズトテ、村井又兵衛ニ示合セ、津幡ニライテ、士卒ノシタ、メヲイタサセ、利家湯漬ノ飯ヲ食シ、夜中ニ兵ヲ押出ス、不破、村井先陣タリ、原隠岐守、前田又次郎、多野村三郎四郎、片山内膳、武刀助十郎、岡島喜三郎、前田慶次、本多三彌、青山與三、徳山五兵衛入道ヲ初トシテ各馳付、成政方ノ押勢、神保ハ山取致居タリシカ、利家津幡ニテ評議シ、後責ハ不思寄ト云沙汰ヲ聞テ、油斷イタシケレハ、利家下知ノ轡ヲユイ、馬ノ舌ヲマカセ、濱ハタラ一騎打ニ押通り、今濱ノ右ナル沙山へ夜アケカタニ著、コレニテ人馬ノシタ、メヲナシ、軍令ヲ改タム、神保ハ利家打通リシヲ不知、雜人ヲクレハセノ者ノトナルヲ聞付テ、利家ナラント、兵ヲ催トイヘトモ、軍勢ヲシトアルアトナレハ、不及力、此沙山ヨリ道二筋アリ、一筋ハ末森ノ海道、一筋ハツホイ山成政カ本陣へ出ル道也、村井己カ手勢ヲ以テ、坪井山ニ至テ一戦ヲ遂ンコトヲ乞、利家不肯、惣勢六千餘ヲ以テ末森へ押ツムル、城兵寄手下力戦シ、百騎計打死シ、既ニ二三丸ヲ攻ヲトサレ、本丸計ニナリケル所へ、後責勢カケ付、村井不破カ家人初首ヲ手ニ提テ、本陣ニ來、村井又兵衛城ノ大手口ヨリカケ付テ、成政カ先手佐々與左衛門ト鎗ヲ合テ、コレ



ヲ打捕ル、利家、利長ハ搦手ノ方ヨリマワツテ城ニ入ント欲ス、寄手城中ニ入テ、城ノ方ヨリ  
 簀戸ヲヲロシテ、後責ノ兵ヲ拒、成政兵野々村主水、本庄市兵衛、齋藤半右衛門等力戦ス、櫻  
 勘介鐵炮ノ上手ナレハ、アダ矢ナク後責勢ヲ打ヲトス、利家兵野村傳兵衛、山崎彦右衛門、富  
 田六左衛門等野々村主水ヲ討取、其外成政兵將本庄市兵衛、齋藤半右衛門、堀田次郎左衛門、  
 櫻勘介ヲハシメ戦死ノケレハ、利家父子城中ニ入合、寄手コトクク敗北ス、凡ソ城兵後責  
 敵首ヲウルコト七百餘、佐々成政坪井山ヨリ末森近所迄兵ヲ出ストイヘトモ、寄手敗軍ナレ  
 ハ、神保父子トモニ山陣ニヲリ、要害ヲカマヘテ兵ヲカヘス、シカレハ利家モ付慕ニ不及、ソ  
 ノ内ニ、能州勢コトククカケアツマリ、アト勢追々加テ、利家既ニ一萬ノ兵ニ及フ、此時成  
 政直ニ津幡ヲ攻ハ危シトテ、利家父子ハ兵ヲ津幡ニカヘス、シカルニ末森ニハ、奥村助右衛  
 門、千秋主殿介加勢ノモノトモヲサシソヘ殘置、シカルニ成政津幡ニハ不寄、鳥越城邊ヲ押  
 トラル、鳥越城主目加多、丹羽末森落城トキイテ、其夜ノ丑ノ刻ニ城ヲアケテノキケレハ、成  
 政ヤカテ入替リ、久世但馬守ヲ以テ守ラシメテ、兵ヲ外山ニ入ル、利家末森後責ニハ大利ヲ  
 得トイヘトモ、鳥越城ヲ敵方ニトラレ不安思、一戦ヲ志トイヘトモ、徳山五兵衛、片山内膳等  
 シキリニ諷諫シテ、十二日、酉刻ニ金澤へ還ス、此旨乃秀吉へ註進、九月十六日、尾州へキ  
 コヘ、秀吉大ニ悦、利家ニ感書ヲ賜リ、且丹羽長秀ヲ越前へカヘラシメ、利家ニ手ヲ合サシ

メンコトヲ下知アリ、成政此度ノ不義ヲタ、サレ、人質ノ女并乳母トモニ、粟田口ニ磔罪セ  
 ラル、十月十四日ニ、利家兵ヲ鳥居ニ出シテ燒働ヲナストイヘトモ、久世但馬守堅守テ速ニ  
 可陷ニアラサレハ兵ヲ入ル、其後ハ寒風ニトチラレテ、互ニ戦ヲ止、○利家、鳥越附近ヲ火クコト、十月十四日ノ條ニ見ユ、  
 末森後責ノ時、利家能州七尾へ使ヲ發シ、兵ヲ末森へ可出コトヲ下知ス、時ニ守將高島等  
 議シケルハ、成政大軍ヲ以テ出勢ノ上ハ、後責ノ押勢ナクンハアラス、能州勢ワツカノ小  
 人數ニテ、後責ハイカ、ナレハ、只七尾ヲ守ニ不如ト云、長連龍キイテ、利家既ニ後責ノ告  
 アルニ、私ノ思慮ヲ以テサシヤメンコトハ不可然、イツレモハ面々ノ心得次第也、連龍ハ  
 可行向フト云テ、乃兵ヲ出ス、シカレトモ諸將ノ長詮議ニ時刻ノヒテ、佐々敗北ノアトへ  
 出來ル、利家モノミヲ出シ、成政カ兵ナリヤ、又能登ヨリ來ル勢ナリヤトミセケレハ、連龍  
 也、連龍斥候ノ兵脇田善左衛門、野村七兵衛ニ向テ、高島、中川等カ不入臆病異見ニヨツテ  
 如此延引、無念ノ至也トテ、兩人ノ前ニテ、モトユイヲ切テ棄、此旨利家聞テ大ニ感シ、其  
 志ヲ褒稱ス、

此戦ニ、利家近士篠原勘六病氣甚シテ供奉不叶ニ付、留守ヲ命セラレケルヲ、不肯シテ、乘  
 物ニテ川尻マテ先へ出テ、乃供奉イタセリ、利家大ニ感賞、○本書十續集、佐々成政攻末森城、前田  
 利家救之、成政敗績ノ項異事ナシ、ナホ

武徳編年集成  
 異事ナシ

天正十二年九月十一日



〔北國太平記〕

九

佐々成政末森城攻事

爰ニ北畠中將信雄卿ハ、故信長公ノ二男ナル故、右府公薨去ノ後ハ、我コソ天下ノ大將軍ナ  
ラメト思ハレシニ、左ハナクシテ、甥ノ三法師殿ヲ信長公ノ嗣トナシ參セ、秀吉天下ノ政道  
ヲ執行ハル、是執權ノ名ノミニシテ、日本ノ主將タリ、去ルニヨツテ、信雄卿憤ホリ骨髓ニ徹  
シ、如何ニモシテ、秀吉ヲ攻滅サント、便宜ノ大名ヲゾカタラハレケル、此時越中ノ守護佐々  
内藏助成政ハ、故信長公ノ高恩ニヨツテ、數箇所ノ領主トナリシコト、身ヲ報ジテモ盡シガ  
タシ、何ゾ不義ノ名ヲ蒙ンヤトテ、忽チ信雄卿ノ催促ニ應ジ、秀吉誅伐ノ謀ヲゾ巡シケル、茲  
ニ徳川源公ハ信ヲ守ラセラレ、信雄卿ニ頼マレサセ玉ヒシカバ、秀吉雌雄ヲ決センガタメ、  
大軍ヲ卒シ、尾濃ノ間ニ發向シ、小牧、長久手等數度ノ合戦アリト云ヘドモ、徳川家勇威盛  
ンニシテ、秀吉毎度利ヲ失ヒ、其上秀吉ノ股肱ト頼ミ思ハレタル池田信輝入道勝入父子、森  
武藏守モ討死ノ由聞ヘシカバ、内藏助成政天運時至レリト悦ンデ、天正十二年八月、一万三  
千餘騎ヲ卒シ、奥村助右衛門尉ガ居城末森ニ押寄タリ、奥村ハ思ヒ寄ザル哀ナレドモ、少シ  
モ驚ク氣色ナク、士卒ヲ從ヘ、城下ノ町口ニ打テ出、備ヲ堅メテ防ダリ、成政ハ謀ヲ以テ付入  
ニシ、城ヲ一時ニ乗取ント、兼テ下知セシコトナレバ、先手ノ寄手突立ラレタル風情シテ、我  
先ニト敗走ス、前波三四郎逃ルヲ追ニシカスト云ヘリ、續ケヤ者共ト進ミケルヲ、助右衛門

尉大ニ制シテ、必ズ敵ヲ追ベカラズ、其故ハ多勢ノ寄手味方ノ小勢ニ對シ、弱々ト引退クハ  
虚逃ト覺ヘタリ、無謀ニ掛ツテ敵ノ術ニ乗ラル、ナ、早ク城中ニ引入ヨト、民家ニ火ヲ掛、自  
燒シテ煙ノ紛レニ引入レバ、寄手咄ト取テ返シ、付入ニセント追カケタリ、既ニ城中ヘ込入  
ントシケル處ニ、後殿シテ引行ケル野瀬次郎右衛門尉、三好勘左衛門尉、城戸ヨリ取テ返シ、  
真前ニ進ンダル敵二人討取レバ、其勇氣ニ辟易シテ、寄手バツト引退クヲ、野瀬、三好直モ進  
ンテ相戦フ、城主奥村助右衛門尉又三ノ丸ノ外ヘ取テ返シ、敵ハ多勢ゾ過チスナ、引取レヤ  
ト下知シテ、二人ヲ引連入ケルガ、何トカシケン、三ノ丸外構ノ揚簀戸ヲヲロサズシテ引シ  
カバ、寄手究竟ノ幸ヒト、我劣ラシト込入シヲ、野崎孫助、同與左衛門尉、惡キ奴原ガ舉動カ  
ナ、イデ物見セント引返シ、突出々々、難ナク敵ヲ追退ケ、揚簀戸ヲ引立テ、扇開キツカフテ、  
兄弟打ツレ引入ケリ、斯テ奥村、高野瀬左近、大西金右衛門ヲ呼デ、二ノ丸ニ續キタル在家  
ニ、敵方ヨリ火ヲ掛ナバ、悔ルトモ益アルマジ、今風直リヌ、早ク此方ヨリ燒拂ヘヨト下知ス  
レバ、畏テ候ト兩人馳出、二ノ丸ニ近キ民屋一字モ殘サズ燒拂フ、是ヨリ火矢ノ用心ノミニ  
シテ、城兵心易ゾ成タリケル、去程ニ佐々内藏助成政ハ老臣等ヲ集メ、是程ノ小城一旦攻ニ  
攻ルトモ、容易ク落サント思ヒシニ、奥村能防ギ守ツテ、隙ヲ取コソ安カラネ、四方ヨリ取圍  
ミ、一攻々テ見ヨト下知シケレバ、諸勢城ヲ十重二十重ニ取卷テ、息ヲモ續セズ、攻寄々々、



貝ヲ吹立、太鼓ヲウチ、士卒喚キ叫ンデ、鐵炮發貢ヲ打掛々々、攻立タリ、去レバ、大山モ是ガ  
 タメニ働キ、坤軸モ碎ケヤスラント夥タシ、城ノ大將奥村助右衛門尉小敵ヲモ侮ラズ、大敵  
 ニモソレザル智勇兼備ノ者ナリシカバ、持口ノ手配理ニ中リ、堅固ニ防キ守ラセケリ、寄  
 手ノ大將佐々成政先手ニ來ツテ、追手ノ仕寄、町場ノ躰ヲ見渡シテ、先手大ニ戦ヒ疲レテ見  
 ユルゾ、浦野津太夫、佐々平左衛門尉ガ勢入替ツテ戦ヘヨト下知スレバ、浦野、佐々一高名シ  
 テ、大將ノ恩賞ニ與ラント、曳ヤ聲ヲ出シ、持楯ヲ被キツレテゾ攻寄タル、奥村思フ圖ニ敵ヲ  
 偽引寄テ、嫡子助十郎ト父子二人、進メヤ者共ト云フマ、ニ、真前ニ馳出レハ、是ニ續イテ、  
 前波三四郎、三輪勘左衛門尉、南部荒次郎、白井四郎右衛門尉、藁科心介、高崎次兵衛尉、野崎  
 新六面モ振ズ、敵ノ真中へ突テ入り、義ヲ金石ニ比シ、命ヲ鴻毛ヨリ輕ンジテ、死生知ラズニ  
 戦ヘバ、寄手叶ハデ引退ク、城兵ハ敢テ敵ヲ追フコトナク、敵退ケバ引入テ、又矢炮ヲ飛シテ  
 防ギケル間、寄手モ攻僅ンデゾ居タリケル、

千秋主殿助叛逆事

茲ニ奥村助右衛門尉カ妻女ハ、美目形チノ世ニウツクシク、類ヒナキノミニ非ズ、心モイト  
 優シキ女房ニテアリケルガ、今大敵ニ圍マレナガラ、自ラ如何ニ女ノ身ナレバトテ、引籠リ  
 テ、安ク日ヲ送ランヤトテ、甲斐々々シキ女房二三人引連、小長刀ヲ横タヘ、夜毎ニ城中ヲ打

平成河村  
 四郎千秋  
 誘ハシム

廻リ、番兵ノ眠リ怠タレルヲ禁メ、堅固ニ番ヲ勤メヌル者共ヲバ、其勞ヲ問ヒ、名字ヲ書記サ  
 セ、引出物ナド與ヘテ通りヌ、其外或時ハ粥ヲ大キナル桶ニ入、荷ハセ連、士卒ニ是ヲ與ヘ、  
 又或時ハ樽ヲ數十荷カ、セユキテ、番兵ニ飲シメテ、其疲勞ヲ慰メケレバ、城中ノ士卒女姓  
 ノ類ヒナキ舉動、又ハ其志シノ程ヲ感ジ、彌忠戦ヲ勵マサントゾ勇ミケリ、爰ニ城中東ノ丸  
 フ預リシ千秋主殿助ト云シハ、生國越前ノ者ナリシガ、前田殿府中ニ在城ノ初メヨリ、其手  
 ニ屬シ、數度ノ忠戦ヲ顯ハセシガ、寄手ノ中ニ河村平四郎ハ渠ガ舊友ニシテ、其交リ深カリ  
 シ由ヲ聞、寄手ノ大將内藏助成政、是コソ究竟ノ便リナリ、如何ニモシテ千秋ヲ味方ニヒル  
 ガヘラセヨト、河村ニ云含メテ、主殿助カ東ノ丸ヘ矢文ヲゾ射サセケル、千秋竊カニ彼文ヲ  
 開キ見ルニ、味方ニ志シヲ變ジ、忠節アルニ於テハ、能登ノ内ニ郡并ニ黄金千兩恩賜アルベ  
 キトノ哀ナリ、此儀同心アルニ於テハ、僞ラザル旨起請文ヲ相越ルヘキ由ヲゾ書タリケル、  
 主殿助ツク、心ニ思慮シケルハ、元來此合戦不意ニ出來リタレバ、城中兵糧ノ用意ナク、  
 水乏シク矢種ツキヌ、然レバ落城モ十日計リノ中ニアラント思ヒケレバ、大將奥村ヲス、  
 メ、心ヲ變ジサセテ、城ヲ開渡サセテ、是ヲ我忠ニセント思ヒケレバ、夜深更ニ及ンデ後、本  
 丸ニ至リ、忍ビヤカニ門ヲ敲ク、内ヨリ誰人ニテ候ゾト出向フ、千秋主殿助ニテ候、大將ニ申  
 ベキコトノ候、爰ヲ開玉ヘト云ヘバ、暫ク御待候ヘトテ、内ニ入テ斯ト告ル、奥村聞テ、千秋



ナランニハ何か苦シカラン、其身一人此方へ入レヨト云付テ、扱日野川市太、常岡十兵衛ト云フ二人ノ勇士ヲ、身ヲ離タズ召ツカヒケルヲ呼デ、今夜陰ニ千秋ガ忍ビ來リヌルコソ心得ネ、渠若反忠ノ志モアラハ、飛出テ搦メヨトテ、南ノ角櫓ノ一間ナル所ニ隱シ置、其後此所へ千秋ヲ招キ入ル、千秋、奥村ニ對面シ、右ノ趣ヲ語リシカバ、奥村氣色ヲ損ジ、某何ゾ人倫ノ法ニ背キ、不義不忠ニ與シ候ハンヤ、千秋殿ノ心中コソ思フニ違ヒテ候ヘト、云ヒモ果ヌニ、日野川、常岡飛テ出、手モナク千秋ヲ組伏搦捕レバ、則チ稠シク番ヲ付置、東ノ丸へハ、舍弟奥村加兵衛尉ヲゾ入替ケル、是ヨリシテ、城中ノ士卒奥村ガ智謀忠勇ノ程ヲ感ジ、彌義心ヲ勵ミ、當城ヲ枕ニシ討死シテ、譽レヲ後天ニ留メントゾイサミケル、

前田利家末森後詰事

去程ニ、越中勢ハ末森ノ城ヲ七重八疊ニ取圍ンデ、日夜ノ分チモナク、攻動カスコト頻リナリ、殊ニ二ノ丸ノ門櫓ハ、普請未ダ調ラズ、淺間ナルヲ能察シ、詰寄々々、門際ニ著ヨリ早く、勇氣盛ナル若者共門ノ扉ヲ推破リ、攻込ントスル處ヲ城中ノ者共突立切立相戦フ、寄手ハ次第ニ勢カサミ、氣ニ乗テ攻入シカバ、城兵今ハ防ギカネ、此所ヲ打捨テ一ノ門ニ引入レ、敵ニ爰ヲ破ラレナバ、落城ニ及ブベシ、潔ヨク討死シテ義名ヲ子孫ニ殘セヨト、互ニ傍輩ヲ恥シメテ、命ヲ限リニ防ギケレバ、寄手モ爰ヲ破リ得ズ、頓テ勢ヲ引揚ケル、斯テハ落城近キニ

アリ、如何ハセント、城主奥村案ジ煩ヒケレドモ、幾重トモナキ敵ノ圍ミノ中ナレバ、金澤へ後詰ヲ請ベキヤウモナシ、然レドモ此分ニテハ攻落サレン事疑ヒナシトテ、郎等ノ中ニ謀才アツテ、辨舌（辯）キ、忠義深キ者ヲ一人撰ミ出シ、金澤へゾ遣シケル、此者難ナク敵中ヲ方便リ拔、九月十日ノ戌ノ下剋金澤ノ城ニ馳著、大將前田殿ノ前ニ來リ、此間佐々内藏助末森ヲ取巻攻動シ候ヘドモ、城中身命ヲ捨テ防キ戦ヒ候ユへ、只今ニ至ツテ持泳ヘ候、然レドモ敵ハ多勢ニテ、討ルレドモ疼マズ、入替々々攻候、味方ハ既ニ士卒疲レ、兵糧、矢種、鐵炮ノ玉藥等盡テ候上ハ、近日落城ニ及ブベク候、去ナガラ、某ヲ始メ城中ノ士卒、一人モ殘ラズ討死仕リ候トモ、生テハ城ヲ渡スマジク候、只片時モ早く後詰ヲ冀ヒ候ト、奥村ガ口上ノ趣ヲ演説ス、利家はヲ聞玉ヒ、去ラバ後詰スベシトテ、軍勢ヲ催サル、老臣等利家ノ前ニ來ツテ、承リ候ヘハ、奥村勇氣ツキテ、城ヲ敵ニ相渡シヌルヨシ、慥ニ申者共ノ多ク候ト云ヘハ、利家聞玉ヒ、加様ノ時ハ虚説區々ナル者ソ、彼奥村カコトハ、故信長公ノ御朱印ヲモ用ズシテ、尾州荒子ノ城ヲ敵ニ渡サザリシ程ノ大剛ノ者ナレハ、討死ハ遂ルトモ、城ヲ渡スコトハ有マジ、看ヨ

〳〵利家カ眼ハ違フマジト、嫡子孫四郎利長ト共ニ鎧取テ著、此度ゾ必死ノ合戦ナルト、物具ノ上帶下（下カ）トシメテ餘ル所ヲ小刀ニテブツ〳〵ト切テ捨ラルレバ、相從フ者共モ、皆悉ク討死トゾ思ヒ定メケル、時ニ利家ノ北ノ方熨斗炮、搗栗ナド取添、自ラ銚子ヲ携へ出、首途ヲ祝



ヒ玉へハ、利家モ名残惜ダニ見ヘナガラ、感悅斜ナラズ、彌勇ミ玉ヒケリ、爰ニ丹羽五郎左衛門尉長秀ヨリ、溝口金右衛門尉、村上次郎右衛門尉兩人三千餘騎ヲ從へ、加勢トシテ馳來リ、御供仕ラント望ミシカドモ、旁ハ當地ニアツテ、若一揆ナト起リナバ、其ヲ制シテタベヨ、頼入ト宣ヒテ、金澤ニ殘シ置ル、利家ノ甥前田又次郎進ミ出、御在京ノ節ナドハ、某早晚モ當城ヲ預リ、留主居仕リ候ヘトモ、今般ニ於テハ是非御供仕リ候ハントテ、打立レケル上ハ、利家モ兎角ニ及ビ玉ハズ、天正十二年九月十二日ノ戌ノ上剋、金澤ヲ打立玉ヒ、汗馬ニ白泡カマセ、數鞭ヲ加ヘテ急ギ玉フ程ニ、三里餘ヲ只一息ニ打テ、津畑ノ町ニ著キ玉ヘバ、炮聲頻リニ聞ヘタリ、扱ハ未ダ戰ヒ半ナリト覺ヘタリ、一先爰ニテ一息休メテ推寄ベシトテ、軍勢ノ著到ヲ付サセ、老臣等ヲ呼集メ、合戰ノ評議セラル、近習ノ者共諫メケルハ、佐々内藏助越中勢數萬ヲ以テ、末森ヲ稻麻竹葦ノ如ク打圍ミ、成政ハ己レガ旗本ノ勢ヲ以テ、金澤ヨリノ後詰ノ勢ト戰ンガタメ、末森ヨリ一里計リ引下リ、此方ニ向フテ陣ヲ堅メ候ヨシ、待設ケタル敵ニ、變ル術モナク御カ、リ候トモ、味方ノ勝利候マジ、且<sup>ソウ</sup>成政モ武略ニ長ジタル將ナレバ、如何ナル謀カ候ラン、只々是ヨリ引返サセ玉ヒ、金澤ニテ御一戰然ルベカラント申ケリ、傍ヨリ又進ミ出テ、此上ハ早馬ヲ遣サレ、末森ノ一左右ヲ御聞アツテ、其上ニテ兎モ角モ御計ラヒ候ヘナンド、テ、更ニ評議一決セズ、前田殿聞玉ヒ、利家はマデ出勢シテ、暗々ト奥村ヲ

討セナバ、弓矢取テノ恥辱、後代迄ノ瑕瑾何事カ是ニ如シ、殊ニスベキ軍ヲセザレバ、見苦シキ負ヲスル者ナリ、利家ニ於テハ一騎ナリトモ後詰スベシト宣ヘバ、徳山五兵衛尉莞爾ト打笑フテ、先則制人有利トコソ申候へ、義ヲ見テセザルハ勇ミナシ、某ハ御供仕リ候ハント、頓テ馬ヲ乗出セバ、血氣盛ンナル若者共、尤々ト同シテ打立ケレバ、利家父子悦喜アツテ、駿馬ニ鞭ヲ揚、末森ヘトゾ馳ラレケル、

末森合戰<sup>附</sup> 齋藤甚介、寺嶋牛之介事

斯テ、金澤勢敵陣近クナリシカバ、備ヘテ濱邊ヘ押廻シ、物ノ音バシスナトテ、轡ノ鳴ラザルヤウニ枚ヲフクマセ、馳ラレシ程ニ、末森ノ東ノ方ニ著玉ヘバ、マダ黎明ノ比ホヒナリ、横雲ハ東ノ山ノ端ニ鬩<sup>ニ</sup>霧<sup>ニ</sup>朝霧咫尺ノ間ヲモ分ザルニ、諸勢旗ノ手ヲ颯トヲロシ、野々村主水正、佐々新右衛門尉ガ攻口ニ押寄テ、タ、一聲鯨波ヲ咄ト揚ル、越中勢思ヒ寄ザルコトナレバ、上ヲ下ヘト騒動ス、佐々新右衛門尉、野々村主水正、兼テ後詰アラント思ヒ設ケシコトナレバ、馳廻ツテ士卒ヲ鎮メ、堅ク備ヘテ待カクル、時ニ前田殿ノ小姓富田六左衛門尉今日ノ一番鑓ハ我ナリト、眞先ニ鑓ヲ入ル、北村三左衛門尉、山崎彦右衛門尉、半田半兵衛尉、野村傳兵衛尉富田ニ越レケルコソ安カラネト、手々ニ鑓ヲ提ゲ突テカ、ル、佐々新右衛門尉、本庄清七鑓ヲツ取テ進メバ、是ニ續イテ、野々村主水正、小川鯨之介、本庄市兵衛尉、野入平



右衛門尉、立田菊丸、齋藤半右衛門尉、堀田次郎右衛門尉、矢嶋五郎右衛門尉等ヲ始メ遣兵五百餘騎、鎧袞ヲ作ツテ突カ、ル、五人ノ者共ニモ臆セズ、真丸ニナツテ鎧ヲ入、爰ヲ詮ト相戦フ、城中ヨリ奥村助右衛門尉是ヲ見テ、後詰ノ援兵馳著タリ、突テ出テ内外ヨリ敵兵ヲ揉崩セヨト下知スレバ、城兵大ニ勇ンデ、龍ノ雲ヲ得、虎ノ山ニ靠ル勢ヲナシテ、城戸ヲ開キ突テ出ル、前波三四郎、野瀬次郎右衛門尉、野崎孫介、舍弟與左衛門尉、三輪勘左衛門尉、同助右衛門尉得タリ賢シト突テカ、ル、押續イテ可兒才藏、本田三彌左衛門尉引ナ進メト聲ヲカケ、敵中ニ突テ入ル、小川鯨之介モ富田ガ爲ニ討レヌ、立田菊丸ハ大力ノ若者ニテ、生年十六歳ト名乗、敵三騎突伏セ、猶モ走り廻ツテ戦ヒシガ、左ノ太股ヲ後ヘ鐵炮ニテ打拔レ、小篠ノ上ヘ百ド伏、是ヲ見テ、菊丸ガ中間走り來リ、肩ニ引カケ引退ク、越中勢モ前後ノ敵ニ捫立ラレ、辟易シテ見ユル處ヲ、野々村主水正大音揚テ、前後ノ敵ニ取籠ラレテ生ント思フハ不覺ナリ、逆モ遁レヌ處ゾヤ、聲花ニ討死シテ、譽レヲ子孫ノ眉目ニ當ヨ、死ネヤ死ネヤト眼ヲイラ、ケ、四方ヲ白眼ンデ八方ニ馳廻リ、士卒ヲ恥シメ下知シケレバ、林野源内、加々田大八死ヌルニカタキ哀カトテ、敵ノ真中ヘ一文字ニ突テ入ル、元來短氣ナル若者共、野々村ニ義ヲ進メラレ、ナジカハ少シモ咏フベキ、加々田、林野ニ劣ラジト、一度ニ咄ト破テ入、一舉ニ死ヲ争ヒケル、爰ニ齋藤甚介、舍弟寺嶋牛之介トテ、武功勝レタル勇士アリ、大將内藏助ガ旗

成政ノ臣  
齋藤甚介

寺嶋牛之  
助等ノ奮  
戰

本ヘ使ヲ馳、是ニテ暫ク合戦ヲ挑ムベク候、其間ニ片時モ早ク本陣ヲ寄ラレ候ヘ、城ヲ攻落スベキ術ノ候ト云送り、大將ヲ待居タリ、去程ニ、敵味方互ニ雌雄ヲ争ヒ、戦ヒ午角ニ見ユル處ニ、後詰ノ大將前田利家父子采牌ヲ取テ馳廻リ、汝等前ヘハ進スムトモ、後口ヘ一足モシリゾクナ、鎧ニテ叩キ合フベカラズ、唯突倒セヤ者共、我眼前ニテ高名セヨト、士卒ヲ勇メテ下知セラレバ、野村、北村、半田以下究竟ノ兵共、命ヲ塵芥ヨリモ輕ンジテ、勇氣アタリヲ拂ヒ、火花ヲ散シテ戦ヘバ、越中勢恠ヘカネ、咄ト崩レテ敗北ス、今宿入道印西、徳山源七進メヤ若者ト、逃ルヲ追テ勇ミ掛レバ、金澤勢氣ニ乗ツテ、短兵急ニ挫ントソ追カケタル、越中勢諸隊悉ク破レ、崩レテ逃行ヲ、追詰々々討取タリ、茲ニ齋藤甚介、舍弟寺嶋牛之介兄弟ハ大將佐々成政ヲ待テ、討殘サレタル手勢ヲ從ヘ、前ニ怖ルヘキ敵ナク、後ヘニ退クベキ心ナク、真丸ニナツテ扣ヘタリ、金澤勢是ヲ見テ、敵纔カノ小勢ニテ、只一備殘リタルハ、退後レタルカ、又ハ志シアツテ備ヘタルカ、ヨシ何ニモセヨ取籠テ、一人モ殘サズ討取レヨト勇ミケルヲ、利家謀才勝レタル良將ナレバ、士卒ヲ下知シテ、必ズ討テカ、ルベカラズ、渠ハ齋藤甚介、寺嶋牛之介ト云フ兄弟ノ者共ニテ、武功勝レタル勇士ナリ、何ゾ度ヲ失ヒテ退後ルベキ、思フ處アツテ扣ヘタリト覺ヘタリ、争カ卒爾ニ討ルベキ、其上加様ニ心ヲ一致シテ思ヒ切タル敵ヲ碎ントスレバ、味方ノ士卒多ク討ル、者ゾトテ、一騎モ出シ玉ハネバ、齋藤、寺嶋兄



天正十二年九月十一日

一六六

弟今ハ是マデゾト士卒ヲ從ヘ、靜マリ返ツテ引行シカバ、天晴勇士ヤトゾ感ジケル、利家軍士ヲ以テ、味方ノ勢ニ長追ヲスベカラズ、早々引返スベシト、再三制シ玉フ處ニ、案ノ如ク、敵將佐々内藏助己レガ旗本ノ勢七千餘騎、旌旗ヲ北風ニ翩翻サセ、勇ミカ、ツテ押來ル、今宿入道印西、徳山源七、堀喜市、舍弟佐太郎、秋山矢之次郎以下究竟ノ勇士十騎計リ、大將ノ下知ヲモ用ズ、餘リ追ニ長追シテ、返シ來ル敵ニ前後ヲ取ツ、マレ、一人モ殘ラズ討レニケリ、越中勢是ニ氣ヲ得テ、洪水ノ堤ヲ破ツテ漲ギルガゴトク、勇氣ヲ振ツテ掛リ來ル、利家はヲ見玉ヒテ、佐々モ去ル者ナルゾ、必ズ悔ルコトナカレト、士卒ヲ纏ヒ引取玉フガ、一ツノ切所アリシヲ打越テ、爰ニテ備ヲ設ケ、敵此切所ヲ越來ラバ、思フ圖ニ引入テ悉ク討取ベシト、堅ク備ヘテ待玉ヘドモ、佐々モ又此術ニ乘ラズ、士卒ヲ從ヘ、関ヲ揚テゾ引取ケル、利家名將ナレバ、戰フマジキヲ知テ勝利ヲ全フシ、佐々モ亦カクマジキヲ知テ勢ヲ引取ヌ、是皆良將ノ樞要トスル處ニシテ、其武略相同シ、斯テ前田殿末森ノ城ニ入玉ヒ、奥村此度城ヲ恙ナク持泳ヘシコトヲ感ジ玉ヒ、利家、利長父子ノ感狀ニ馬印ヲ添テ與ヘラル、其比秀吉ハ、美濃、尾張ノ間ニ坐シテ、徳川家ト御對陣ノ折ナリケレバ、前田殿今般討取玉フ處ノ宗徒ノ首十二、彼表ヘ持セ遣ハシ、合戰ノ趣ヲ注進アリケレバ、秀吉悦喜淺カラズ、頓テ感狀ヲ遣ハサレケル、

佐々内藏助加賀亂入附 鳥越開城事

去程ニ、佐々内藏助成政ハ此度ノ合戰ニ打負シコトヲ悔怒リ、如何ニモシテ此憤リヲ散ゼント、敗軍ノ士ヲ集メ、加賀ノ國ニ亂入ス、佐々先手ノ勢ニ軍使ヲ馳テ、津畑ノ町ヲ破却セヨト下知シケレバ、先鋒既ニ竹橋ヲ過テ、津畑近ク押寄タリ、前田方ノ軍勢ハ津畑ニテ越中勢ヲ防ンタメ、此所ノ茂林ニ備ヘテ待カケタリ、越中勢是ヲ見テ、敵ハ多勢ト覺ヘタリ、無謀ニカ、ツテ敵ニ方便タバカラル、ナト云フマ、ニ、是ヨリ取テ返シ、吉倉山ヘ勢ヲ引上、此所ニ陣ヲゾ取リタリケル、爰ニ竹橋ノ良ニ當ツテ鳥越ト云フ所アリ、此所ノ城ニハ、前田殿ヨリ丹羽深深カ十郎、目賀田又右衛門尉等ヲ籠置レケルガ、敵ノ軍勢吉倉山ニ取登リシヲ見テ、扱ハ敵兵當城ヘ取カケナン、多勢ニ取卷レナバ、悔ルトモ甲斐アルマジト見怖シテ、城兵一人モ殘ラズ、夜ニ紛レテ落行ケリ、ストモ知ラズ、齋藤甚介、寺嶋牛之介、久世又兵衛尉等二千餘騎ヲ引卒シ、鳥越ノ城ニ推寄テ、先輕卒ヲ以テ鐵炮ヲ打シメタリ、去レドモ城兵ハ悉ク落行タレバ、靜マリ返ツテ音モセズ、時ニ牛之介進ミ出、此方ノ炮聲ニ驚キ、城中ノ梢ヨリ諸鳥多ク逃飛バ、如何様城中ニ人ナキト察シタリ、乗入レヨト下知スレバ、士卒我モト城中ニ乗込タルニ、敵ハ早落失テ一人モナカリケリ、扱ハ聞逃ニシタルニコソトテ、齋藤兄弟、久世又兵衛尉三人鳥越ヘ入替リ、城ヲ堅メテゾ居タリケル、去程ニ、前田又左衛門尉利家ハ未ダ末森ノ城

天正十二年九月十一日

一六七



成政秀吉  
ノ授軍ヲ  
願シテ  
軍ヲ退ク

中卷

ニ滞留シテ居玉ヒケルガ、佐々内藏助成政加州ニ亂入セシ由、早馬頻リニ來ツテ告シカバ、利家はヲ聞玉ヒ、何程ノコトカ有ベキトテ、士卒ヲ從へ、末森ノ城ヲ打立玉ヒ、濱邊ヲ傳タヒ  
 〱ニ駿馬ヲ馳テ、丑ノ剋ニ金澤ニ著城シ玉ヒ、軍卒ニ兵糧ツカハセ、暫時休息シ玉ヒテ、寅ノ剋ニ又金澤ヲ打立玉ヒ、山上、金腐川、柳橋、枕板ヲ打過テ、森本、栗崎邊ニ陣ヲ取、茂ミヲ便リニ勢ノ程ヲ指カクシ、梅鉢ノ旗少々此彼ノ木々ノ梢ニヒルガヘラセ、纒カノ小勢ニ見セテ備ヘラル、是ハ敵ヲ僞引出サシ爲ナリケリ、係ル處ニ、伏木小市郎、高岡兵内以下七騎斥候トシテ馳來リ、金澤勢ヲ見積リ、取テ返シテ佐々ガ旗本ニ馳歸リ、敵ハ小勢ト見ヘテ、森本、栗崎ニ陣ヲ取テ候ガ、若伏勢ヤ候ラント云、成政聞テ、扱ハ後詰トシテ京都ノ大軍馳付タルヲ、伏勢トナシテ、成政ヲ僞引出シ、討取ントノ術ナラン、敵ノ謀ニ乗セラル、ナトテ、早速陣ヲ引拂ヒ、木船ノ城ヘ引入ケレバ、前田殿モ金澤ニ歸陣セラレケル、○續武家評  
林異事ナシ、

〔桑華字苑〕

一末森御後卷の時、津幡にて末森は早落城なりと云沙汰在、去ども、利家公是非とて討立たまふ、はま表へ御出被成候へば、鐵炮の音きこえたり、利家公是をきこしめし、あれをきけ、末森ははまだおちぬぞ、つゞけ者どもと、御身をもませたまふ由、  
 一能州末守の時、神保氏春川尻に貳千餘騎にて、金澤の押に參たると云説在、いつはりなり、中卷の者として、成政の家にては、足輕よりは上、歩行の者よりは下の者五拾人在、いづれも

くつきやうのすくやか者どもなり、是を頭どもに川尻へ遣しおかれたり、金澤の押へ心にもや在けん、氏春は前後成政と一所に坪井山に居られたり、氏春、成政へ度々被申けるは、夜明ば利家後詰すべし、後卷有之ば、味方敗軍うたがひなし、夜中にむりに城をせめ落したまへといへども、成政何とかおもはれけん不用、氏春被申は、今度利家後詰せずんば、一代男はなるまじ、そこの所を思召候へ、うむに後詰なるべしといへども、成政運のきはめにや、なんの後詰と云て不用、然所に夜のほのく明に、今濱表に入數見ゆる、すは利家後詰よと云ほどこそ在けれ、旗本少しいろめく、成政せうぎに腰を掛、城の方をにらみ、しからあわをかみ、はざりをして居られたり、旗本しづまり、各鑓を取、番ざし物、金ののし、坪井山はさながら金山のごとし、扱先手末森城せめ衆敗軍を見て、旗本は次第を守て退く、一段見事なりと云々、右は土田作右衛門親土田作右衛門、神保氏春の子小姓にて、其時前後氏春のそばに居て、慥に知りたるとて、常にかたりけるとて、二代作右衛門語る、

〔關屋政春古兵譜〕

一能州末森にて、一番鑓富田六左衛門、二番野村傳兵衛、三番山崎彦右衛門也、此三人同事と利家公御批判在事、さくら城戸堀切の所にて也、土肥伊豫討死の所は、町口のねりこ山と云所也、門口よりさくら城戸迄二町四拾間、城戸より押水海道迄四町二十間、押水海道へ出、ねりこ山迄は八町五十間、此通、されば本城よりねりこ山迄は



天正十二年九月十一日

合拾八町餘也、

一右同時御家中討死の衆は、徳山源七郎、堀喜市郎、舎弟左太郎、今藤印齋、此外に十騎計名不知、

〔前田家雜錄〕 堀部養叔咄

一能州末森の時、一番鑓半田半兵衛と也、右之時富田六左衛門本名は山崎也、如何の様子か刀にて、右半田氏より、結句前方に出らるゝと也、偕山崎彦右衛門は半田に續き鑓を合、偕半田氏に言葉をかけ、振よしと也、右之様子、利家公開召、富田が事は鑓は所持なけれども一番なり、彦右衛門ことは二番なれども、右の時慥に言葉をかくる様子手柄也、然れば三人共に何も不劣働と被仰と也、

〔附録〕

〔可兒才藏誓文日記〕 一末森ニテ、夜廻リ之頭ヲ被仰付候、利家公御人拂ヒテ、段々被仰渡旨、一々大切之御名言共、末代迄之可爲軍教ト奉存、記置傳來候、御祕事之大切也、深ク可爲謹蜜、條目見左、

一利家公被爲成仰次第、其方若輩者ト雖、第一剛情ニテ、諸卒ヲ曾、人皆慕望スルコト被聞召知ニ付而、一大事ヲ御相傳之上、夜廻之大將ヲ被仰付間、御相傳之子細、肥前守様へモ堅ク

利家可兒  
才藏ニ末  
森ノ夜廻  
ヲ命ズ

利家夜廻  
才藏ニ傳  
授ス

申上間敷段、誓紙被仰付候、於某難有段奉感骨髓、此御ケ條末代可尊蜜、

一夜廻リニハ大勢モ不出習有、手勢強テ五拾人ニシテ、騎馬ヨリ先ニ歩行者貳拾人、内五人ハ飛道具、又五人ハ長道具、又三人捕道具可持せ、其行烈ハ鐵炮ト鑓ト交テ、五人宛二間程間ヲ置二段ニ行、手明拾人身輕ニ支度可申付、其拾人モ二間程間ヲ置、跡ヨリ可押ス、扱自分ノ馬廻リ廿人内五人飛道具、又五人ハ長道具、又拾人ハ手明、殘ル拾人ハ馬所ヨリ廿間モ間ヲ置、是モ貳人ハ鐵炮、一人弓、三人ハ鑓、壹人捕道具、三人手明也、扱又夜廻リ之外ニ二町三町程跡ニ二所モ三所モ武功心得有者ヲ撰、物聞ヲ配リ可置、其者共ニモ飛道具、長道具、捕道具ニテ拾人宛手分ノ、何ルモ歩行者可然、夜中ニ八度程可廻、扱者大事所敵近キ陣所坏ハ、箭ヨリ外如此ニ廻リ、箭ノ内ハ歩行者廿人程、成程閑ニ二手ニ分可廻、勿論忍ビテトテ別而支度ナケレ共、著シ様ニ心得有、ハイダテニ袋ヲカケ、羽織ニ帶ヲノ、馬上ニテ物ノ具鳴サヌ様ニ氣ヲ可配、忍ヒ履ニハシユロノ毛ノフルキヲ用、水ヲフクマヌ故、履音靜也、忍ヒ火繩、胴ノ火、水松明、楯松明所持可仕、猿轡、手ガセ、捕道具ニ添持せ、生捕ニ聲ヲ不立せ心得迄肝要ニ可仕ト、御條目ニ御祕事之儀共御書付被仰付、奉得其意、末森ニテ則夜廻ノ大將相勲候、日比甲賀牢人脇部一貞ト申竊盜名人ニ得傳受候火道具、捕道具、此時用而、得勝利タル祕事モ記テ、茲末孫可祕敬也、

甲賀牢人  
脇部一貞  
才藏ニ  
傳シタ  
ノ火道具  
捕道具等  
ノ製造法

天正十二年九月十一日



天正十二年九月十一日

一 胴之火持様、少（小下同シ）キ香爐又ハ桐ヲ少ク内ヲクリヌキ、赤銅ニテハリ、内ニ例ノタドンイケテ可持、

タドンノ方

ナスビノ木カゲホシ、タデノカゲホシ、タバコノ莖ノカゲホシ、クヌ木炭ノ粉、杉原黒燒ノ粉、

右五種等分ニ細末ノ、シヤウナウニテフノリヲトキ、其ノリニテネリカタメテ、大キサハ火桶ニ入ルツモリニ應ノ心得可有、

一 胴ノ火ハ火桶ヲ巾著（巾）ニ入テ持、冬ハ首ニカケ、袋（袋）へ入テモ可持、

一 小刀火トテ、練物ヲホシカタメ、小刀ニテ刻メバ、其粉皆火トナル方、

熊野ホクチトテ、クチ木ノシヤレ 壹匁、粉ニノ、クラマ石 壹匁、但粟粒ホドニクダキテ調

合、野ザラシノ牛糞（糞）七分、但成程フルキヲ粉ニメ、良鼠糞二分、シヤチウニヒタシ、又能ホ

シ、粉ニメ、野瀑ノ古ツギ木綿ニテモ布ニテモ粉ニメ、五分、調合シタルエンシヤウ 壹匁六分、粉ニメ、

右ノ六種細末ニメ、コエ松ノアマハダヲ細ニ刻ミ、舂ニテ壹舂半ハカリ、水三舂入、水一舂ニ煎ツメタル時、其カスヲコシ、能々シメシボリ、火ヲ和ニメ壹合ニ煎ツメ、右ノ六種ヲ練堅メ

テ〇〇（縦一センチ四ミリ、横一センチ三ミリ）、是程ニ堅メ、能々日ニホス、但龍腦三分（如テ良）、

一、脇部氏極意ニハ、胴火色々傳受有ト云トモ、上上之ハガネニテスリ火打、杉原ヲ能々モミウムシ燒ニメ、熊野ホクチノ粉ヲマセタルニ益コトナシ、ホクチニハサラシ木綿ノ古キヲウムシ燒ニメモ能モノ也、

一 五里松明、クヌギ（ヌカ）ヲ貳尺五寸ニ切、細ニ刻、油ヲヌリ、ホシツケ、其上エシヤウチウニテセウノウヲトキ、七返ヌリテハホシツケ、ヌリテハホシカラシテ、ホソ繩ニテ握籠ル程ニ結（束カ）、火口ヲ細ニ刻カケ、イヲフ（ウカ）ヲシヤウニテトキ、火ニテ煮トロカシ、火口エヌルベシ、胴ノ火ニテモホクチニテモ其マ、火ヲツケトボスタメ也、

一 風雨ノ時用心松明、櫻ノ皮ヲ厚クヘギ、イヲウノ粉ヲシヤウチウニテトキ、煮テ、三返ホドモヌリテハホシ付、長サハ二尺ホトニメ、大キサ七八寸廻リニメ、古ツキヲ繩ニメ、所々結、ソレエモセウノウト松脂（ヤニ）ヲヌリ、ホシツケテ持、

一 水松明祕方

明礬 五匁、鼠糞 壹匁、松脂 五分、艾葉 一匁、生腦 五匁、鹽硝 五分、膽礬 五分、麻灰 壹匁、シヤウチウヲシメシテ日ニホシ、

右何モ細末ニメ、コエ松ノアマハダヲシヤウチウニテ如前センジツメ、其汁ニテ練ツメ、

天正十二年九月十一日



天正十二年九月十一日

一七四

竹ノ筒ノ中エ込テ堅メ、日ニホシ、則其竹ノ筒ヲ上エカケテ緒ヲ付、腰ニサケ持也、長サ壹尺程ニシテ、大キサハ三十目ノ臘ノ大キサ程ニシテ、此松明ハ水中ニテモエハヨケレトモ、音高クメ忍ヒコトニ難用、

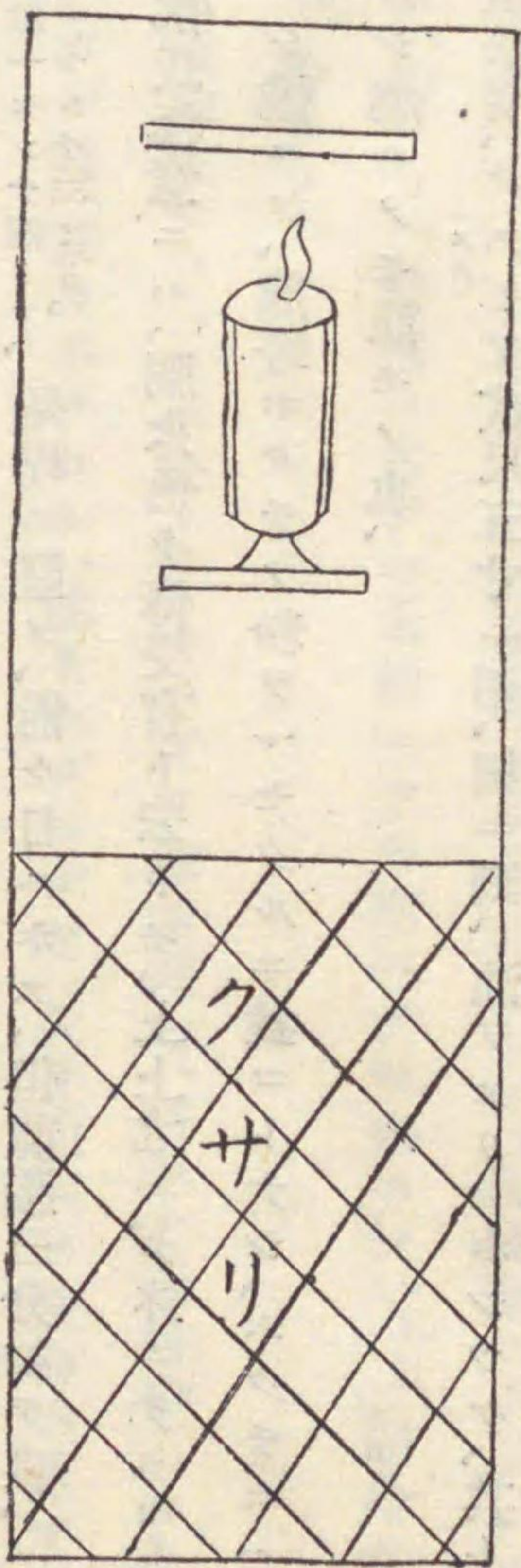
忍ヒ火繩

一 忍ヒ火繩ト云ハ、古ツギヲ水ニサラシ、シヤウチウ壹舛ニ生腦三十目入、古木綿ツギヲ煮テ日ニホシ、鐵炮之藥ノ粉ヲモミ付テ繩ニナヒ、成程能スリヲカケカタクスル也、水中エ入テモ消ルコトナク、竹ノ筒エ引籠火ヲカクシテモ不消、

楯松明

一 楯松明

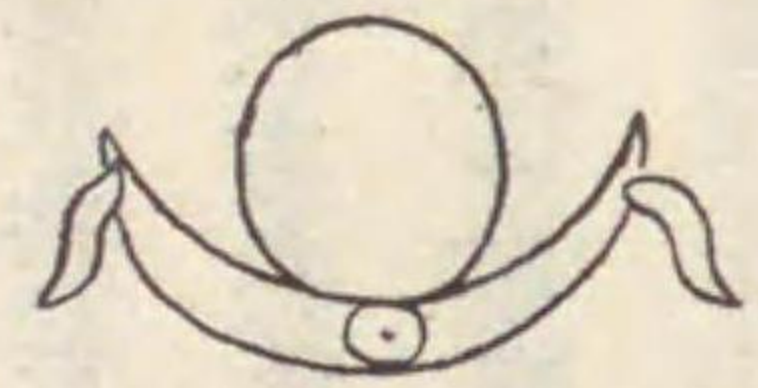
松明ノ方、膽礬八匁、生腦五匁、松脂十匁、硫黃三匁、エンシヤウ五匁、細末ノ、松ノ脂ト臘ト等分合ニメ煮テ、ソレニテ練堅メ、臘燭ノ心ニハ木綿糸ヲエンシヤウニテ能々煮、イヲウヲセウチウニテトキ、ソレヲモヌリ、日ニホシ、松脂ニテ堅メ、其尻ハ鐵炮ノネヂノ如ク鐵ニテ



カラクリ、楯ノ折釘エサス也、大キサ三拾目臘ノ如ク、楯板ハ柳、厚サ八分、長サ貳尺、横六寸大方ナリ、大キナレハ手前働不自由也、指板ノ裏ニ手懸ノクハ有、物見ヨリ六寸下ニ用ル也、又内ニモ内臘燭立アリ、面ノ外ニ横サシ鐵ニテ打、物見ヨリ壹尺下、其横サシニ臘燭立ネヂノ如クニメ折釘有、

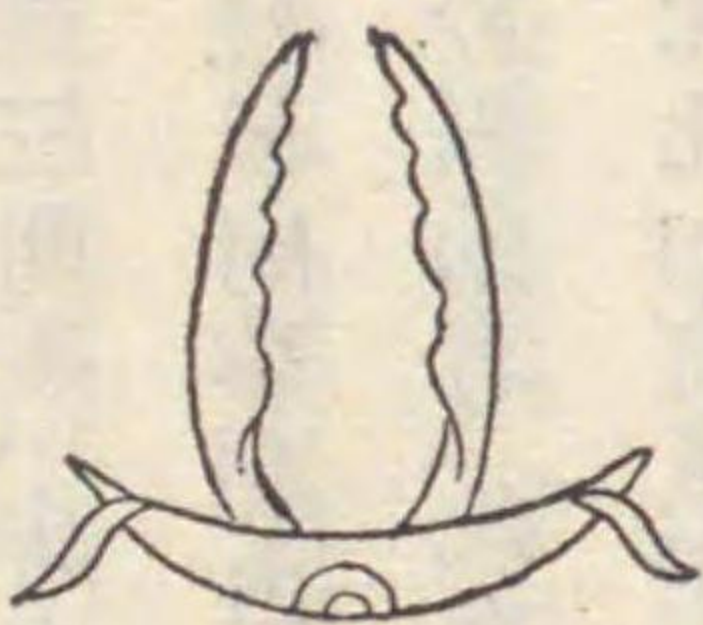
猿轡

一 猿轡ノ圖



此玉口中ニ入ル也、玉ハ楳ニケスル、ホウバサミハ中ニチヤウツガイアリ、緒髪ノ結目ニテ結ブ、

此轡ニテハ息ハ通メ聲不出、



此轡ハノコギリバノ如クニメ、舌ヲハサミ、ホウバサミノ緒ノ留様右ニ同事也、

右書記ス如ク、一大事之御役被仰付候時、此道具持參可仕段被仰出、日比嗜置、此時節御用ニ立候、一々御音蜜(隠密)ニ御覽被遊候而預御褒感候、爲武勤ニハ諸事之兵器、武具心懸可相嗜者也、○上  
下略

天正十二年九月十一日

一七五



長宗我部元親、其將久武親直ヲシテ、伊豫ヲ攻略セシム、是日、同國深田城  
陥ル、

〔金子文書〕

○土佐

今度至三間表、少々人數申付候處、深田(北字和郡)之城責詰、去十一日(河野通直)に令落去、在々所々立毛等刈掃、  
無所殘發向勝利由注進候、次從道後郡内表(河野通直)へ可相働由、傳説之旨申來候、其邊如何相聞候哉、  
自然於相働者、此度無御由斷、道前口被取發尤候、何も道後之催候者、可示給と令由斷候、(毛利)  
邊事此如何風聞候哉、上邊之儀、東國彌勝手之由候、近日三介殿、家康より御使者候て、深  
重御入魂之旨御懇狀共候、佐々内藏介加賀、越中、能登其外一味之旁差競由、嚴重相聞候、其  
邊何等之説共候哉、方角能々被聞合、無御退屈可示給候、誠無盡期毎々被添御心儀難申述候、  
猶萬般期後音候、恐々謹言、

長宮

九月十五日

元親(花押)

金備(金子元忠)

御宿所

〔元親一代記〕

中 一與州美間陳之袁

此美間表之義、先年久武内藏介不覺取し所也、是(親定)に味しめて、度々境目へ取出働に依て、内

河野通直  
郡内ニ出  
トノ風聞

元親上形方  
東國ノ子  
勢ヲ金子  
元宅ニ報

河野氏ノ  
出兵三間

元親ノ兵  
三間ニ入  
ルハ天正  
四年ト

深田城降  
ル  
元親ノ小  
姓衆土居  
ヲ攻ム

藏介吊矢と號し、美間表を可被破との評議也、彼表ノ城數深田、岡本、高森、土居ノ城、金山  
とて五ヶ所城一目に見ゆる也、寄手幡多分五頭、久武二男内藏介一手、北ノ川衆、菅田、魚  
無、河原淵一覺、西川、又元親ノ小性分(註下同シ)差加ル、奉行ハ本山將監、福富隼人介、小性頭桑名藤  
七、都合其勢八千餘、先川原淵へ著陳ス、天正十四年八月末、美間表へ打寄、先手ハ深田城  
を取詰責ル、此城攻之間に手を賦り、岡本、高森城廻り發向す、掛りける所(親定)に、高森の城ハ  
山下を圍て、敵廿町計取出禦ク、幡多國澤越中と云老武者唯一騎懸出し、則時敵を追上ル、  
深田の城攻の所ハ先是を見物す、追々馳つき、山下の家を燒、小屋を破り、越中手柄して引  
取たり、扱深田ハ、桑名彌次兵衛、越中へ向て、老躰の無用の骨折と申けれハ、城中、年寄て  
すね弱く候得共、馬さへこたへ候ハ、心ハ昔に不替候、若き衆にも劣ましきと申て笑し  
也、扱深田の城主十日計有て降參ス、則人質を出し罷出、何もへ禮を申、扱殘ル城々へ手を  
分、稻を糶て山下を發向す、土居の城へハ、小性分掛し所(親定)に、敵山下へ取出、小屋を圍みて、  
西谷口を專(マ)に防ク、小性分の内四人山下へ取出たる敵をせり上、敵の足床をとり、其敵又  
上取返合戰す、又小性分九人懸上り、合拾三人して又敵の足床を取、小屋を破り、家を放火  
し、午刻ハ申刻迄戰ヒて不退、其内(マ)に手負も出來ず、右之奉行將監、隼人、藤七三人ハ急引  
候へと、吉松治右衛門を遣し候へ共、皆若き者共なれハ、誰先(マ)に可引者なし、又二番(マ)に岩村



高森ノ中野某降ル  
岡本金山等モ降ル

七左衛門を遣し、是こモ不引、三度めこ白川與兵衛、嶋田可右衛門を遣ス、此二人來て急引立、少足床引處こ、敵付て出ル、此時又取て返し、既こ鍵合ル、十三人ノ内中嶋彦五郎鍵先にて一人討捕、又其を追上、手柄して引取たり、則右拾三人を書立て、奉行方言上ス、元親か感狀有、扱殘ル城々を取詰攻へきと手分をする所こ、高森の城主中野、深田城主爲縁者こ依て、深田肝煎を以降參ス、今三ツの城主申分ハ、此美間郡の侍共ハ、板嶋西王寺殿(圖ノ公慶)の簾下也、然所こ今度我等十死一生の氣遣こ及といへ共、加勢も無之、後卷無、手立も一切不通也、此遺恨こ依て、何も野心を擇候、菟角三人の者共申合、追而降參致スへし、迎も御手下へ可參ものか、御互こ骨を折、以後の御惡みを招んカ、兩年中こ久武殿へ得御意、人質を出し可申事、全偽無之と制止(按詞)を致ス、此上ハ元親へ不及窺とて、右降參貳人の人質を取歸陳ス、○土佐國群書類從所收元親記、長會我部記及ビ南海治亂記殆ソド同ジ、

**〔長元記〕**下 伊豫一國十四郡へ從元親公弓矢御取出之哀  
一字和郡深田の城を取卷て責時、從敵城細々夜討を仕るに付て、深田城の大廻りに二里餘に柵を付、其外に堀をほり、柵の内に陳取て、二十四日攻也、○長元物語ニハ、廿日餘リ責タリトアリ、以樵木二處井樓を組昇ル、土俵を以茲彼より仕寄を付る處多し、堀一重に成て、後に深田降參仕、城も知行も前代に不替給處也、

深田攻撃

一深田の城の責口にて、年十七に成侍有、乞矢受て見間敷やと、城中より申けれハ、流石に辭とハ不被申折節、持口替衆來打渡刻、仕寄こ具足ハ重きとて脱捨、赤肌に成て、彼若者乞矢の鐵炮受け共、其玉不中也、城和睦に成て後、其打入を聞けれハ、乞矢仕侍打殺哀ハ、打者の恥辱成故、功者の衆云留て、其人をハ不認して放と申なり、彼鐵炮を受し若者に、味方の傍輩申様ハ、武邊も依哀、犬死を好とて、皆々以外の外に怒ける處也、○長元物語ニハ、コノ次ニ兵衛也、自身ノ事故名ヲ不顯トアリ、

**〔土佐物語〕**

十三

(三下四ツ) 美間合戦

中伊豫、西伊豫降參之哀

其後軍論議有て、桑名藤七預りの小姓組一手、本山將監、福富隼人を奉行とす、幡多勢五組、阿波、讃岐、伊豫の勢合て三万八千餘騎、天正十一年八月下旬、與州河原淵へ著陣し、軍兵の手分して、美間の郷の城々へそ向ひける、深田の城をハ食攻にせよとて、城の廻り二里に大柵を振、其外に壕塹ドヲをつき、所々に井樓を揚、柵の外に陳屋を構へ、混軍を止、圍碁、双六、茶會をなし、中國方商人を呼寄、賣買の柵を飭らせ、幾年も經へき有様也、其中にも番手の者ハ井樓に上て、晝夜を守、つまり〜に篝を燒、隙透間もなかりけれハ、城中の兵共、諸方の通路音信ハ思ひ絶たる事共にて、中〜慰方もなく、今ハ勇氣もたゆみ果、此儘にて日を経るならハ、唯徒に飢死なん、さらハ又打て出んとすれ共叶はず、恰魚の釜中に遊ぶことく、危事

深田食攻